

# 林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)

永平寺所蔵史料(下)

飯塚大 展

## 一 はじめに

本考察は、前稿<sup>(1)</sup>に引き続き、永平寺において師資の間に秘伝授された相伝史料、特に切紙史料を取り上げたいと思う。江戸時代前半における切紙相伝の状況を今後も考察したいと考えており、現在では永平寺には現存しないが、当時において相伝されていたであろう切紙の全体像を推察してみたい。今回は、駒澤大学図書館所蔵『室中切紙謄写』の翻刻紹介を中心にしたいと思う。

## 二、室町時代後期成立の切紙について

林下曹洞宗相伝史料としては最古層に属し、比較的まとまって見出される遺存例として、愛知県渥美町常光寺(寒巖派普濟寺門派、潔堂義俊、一四八九 開山)所蔵の、文明十三年(一四八二)より延徳・明応(一四八九～一五〇二)期、さらに天文三年(一五三四)に至る間に書写された二十一通の切紙挙げることができる<sup>(2)</sup>。

寒巖派とは、寒巖義尹(一二二七～一三〇〇)を祖として、永平寺・総持寺・大乘寺・永光寺等の支配とは直接的關係を持たず、独自の展開をした曹洞宗の一派である。同派は、大慈寺を中心に筑後地方に展開した一派と、普濟寺を中心に東海地方に展開した一派とに大別される。義尹には、嗣法の弟子で主だった者が四人あった。斯道紹由(？～一三〇一)、鉄山土安(一二四六～一三三六)、愚谷常賢(一二六九？～一三三九)、仁叟紹熙(？～一三六四)がそれであり、その鉄山の法系は東洲至遠 梅巖義東(一三六〇～一四三三) 華蔵義曇(一三七五～一四五五)と次第する。静岡県浜松市普濟寺は華蔵を開山とし、引間城主吉良義真を開基として、正長元年に建立され、永享四年に寺地を現在地に移したとされる。華蔵示寂後、普濟寺は嗣法の弟子達により一期一年の輪番で住持を勤める輪番制がしかれることになった。その住持有資格者が十三派十四ヶ寺の住職経験者であったことから、普濟寺十三門派の呼称がある。その普濟寺十三門派の一

つ潔堂派の拠点寺院が渥美半島の尖端(愛知県渥美郡渥美町)に位置する常光寺である。常光寺の開山は潔堂義俊であり、開基は烏丸資任とされる。以下に、常光寺に所蔵される切紙の目録を掲げてみたい。

(1)「一、鐵山和尚五位分別祕訣(端裏)

五紙に分断されており、二七三×三二二 二七三×三七六

二七三×三七〇 二七三×三七八 二七三×五六三 ミリメー

トル。本文途中に「日本正應六年巳八月一日記。今日日本

明應七年戊午八月十六日記之。是秀拝」とあり、奥書には「于

時明應三年甲刃十二月日、傳受之」とある。「潔堂派参和目

録」に「于明應三年甲寅拾二月廿日、於普濟禪寺之丈室、忠和

尚今附授是秀畢。光中(花押)」とあり、この時一括して伝授

された切紙の一つが、この切紙の本となった物であり、更

にそれを明應七年の段階で筆写した物と考えられる。鐵山土安

による五位解釈を示す物であるが、寒巖派における五位の位置

づけをなす上で、他の常光寺蔵の五位関係の切紙と共に貴重な

史料と言える。

(2)「三、見性成佛之一大事」

三五四×二六九(ミリメートル、以下同)。奥書に「言文明十

四年壬丑九月二十三日、於東海道三川渥美縣和知山潔堂老書之

(花押)」とある。

(3)「又三、見性成仏一大事」

二八二×四六〇。奥書に「言文明十四年壬丑九月二十一日書之(花押) 潔堂か、樹王衲授宗補者也」とある。この切紙は、樹王是秀から處山宗補に授与されたもの。傍線部は宗補に授与する際に添え書きされたと思われ、本文は潔堂義俊の筆と考えられる。内容は(2)とは異なる。

(4)「四、室中之大事」

二九八×四〇七。本文冒頭に、「當派室中之大事、於和知山、

義俊示是秀」とあり、末尾に「義俊(花押)」とある。内容の

面から注目すべきは、禅宗の依経を「首楞嚴經」とし、「當派

之参学帳者、從楞嚴外不可有之」とする点にある。又、潔堂派

には参すべき公案の目録があり、その公案理解は「五轍」即ち

「入頭・拳揚・悟上・傳受・行李」に拠っていたことがわかる。

同派の『首楞嚴經』伝授については、常光寺に伝授印可状と言

うべき物が蔵されており、これによって確認できる。「當山開

祖真積、大事々々 透徹首楞明妙光、圓通五々充家常。堪興永

平九傳道、培本養枝藥樹王。右賀樹王首座楞嚴傳受畢。長享元

年二月十四日、和知山菴六十四翁義俊(花押)」。この伝授の偶

については、『普濟寺前住牒』にも注記として見える。

(5)「五、三滲漏之大事」

二八三×四六八。奥書に「自佛祖次第相承、而至道元・寒巖・

鐵山・東州・梅岩・華藏・潔堂、々々授光中畢(花押)。今光

中授是秀畢」とある。傍線部は、後に添え書きされた物と思わ

れる。したがって、潔堂が光中に与えた切紙を、光中は是秀へと附授したと考えられる。又、「此是奥相之聖傳也」とあり、(6)(7)の切紙との關係が推定される。

(6)「六、傳法奥蔵一紙三清淨」

二七六×三一八。潔堂の花押あり。この切紙は、普濟寺十三門派においては特に重要視され、印可状の意味合いを持つ物である。普濟寺蔵の「嗣法弟子・戒法弟子次第写」(室町時代写力)に、「東寺奥蔵一紙・奥蔵一紙・傳法奥蔵一紙」と見え、この三種が嗣法の際に伝授された物と思われる。

(7)「九、奥相一紙」

二七五×三三七。奥書に「此是從東洲和尚衣法、同奥蔵一紙伝授、今傳受義曇。々々今為一樹枝授義俊。々々今傳受是秀畢。義俊(花押)」とある。この切紙も(6)同様嗣法の弟子に伝授された物と思われる。同内容の切紙に、命天派の祖である命天慶受に華蔵が伝授した「奥相一紙(宿禰寺蔵)がある。その奥書に次のように見える。「此是從東洲和尚之法衣、同此奥相一紙、東和尚傳附義曇、曇和尚今傳附慶受畢。嘉吉元年辛酉十二月廿日夜半子時相承之。朱印二顆(花押)」。同じく宿禰寺蔵の「出家作法」にも奥相一紙がともに伝授された記事が見える。「正平二年丁未二月十二日、奥相一紙、具義和尚職嗣、所授於至遠實也」。内容の面からは、寒巖義尹が道元の正嫡であり、その正系を寒巖 鐵山土安 東洲至遠 梅巖義東 華蔵義

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

曇とする点が注目される。この主張の根拠となったと思われる物に、普濟寺蔵の華蔵義曇宛「梅巖義東嗣書」がある。上記の法系が記されており、又、「佛祖命脈、證契即通、義曇即通。日本應永丙戌、現海蔵義東。朱印二顆(花押)」とある。

(8)「十、佛祖眼目之大事」

二七五×二〇一。潔堂の花押あり。

(9)「十一、八卦之圖(徳城禪師之御作)」

三四七×五一五。奥書に「徳城禪師之御作也。義曇禪師傳受俊和尚付与光中、々々付与是秀也。大日本國遠江州濱松庄普濟禪寺、皆文明十三稔庚丑八月一日(花押)」とある。この花押は潔堂の物であり、傍線部は後に書き添えられた物と思われる。常光寺蔵の「潔堂一派参和目録」に、「于時文明十三年辛丑八月一日、俊和尚今附授光中畢。義俊(花押)」とあり、恐らくこの時幾つかの切紙とともに伝授されたと考えられるからである。中世の曹洞宗の教学における易学の影響は極めて大きな物がある。「五位」の解釈においては勿論であるが、易学それ自体を切紙や語録抄等に取り込んでいるのである。普濟寺十三門派においても、華蔵義曇から龍澤派の龍澤永源に附授された「易圖相傳之血脉」(岡崎市万松寺蔵)がある。これによれば、「右此易圖相傳之血脉者、五十六代法王之傳來。我今為汝永源付囑畢。敢莫令断絶也。于時嘉吉二年壬戌正月十九日、於普濟寺丈室而傳之。曇華蔵示。朱印二顆(花押)」と見え、華蔵義

曇派下に易圖が相伝されていたことがわかる。

(10)「十五、杖拂竹籠之寸尺、同袋之寸法」

二八七×四五二。奥書には「文明十四壬刀九月二十一日(花押)」とある。主杖・竹籠・私子の寸法としつらえ、及び法衣袋・御大事袋(戒法・嗣法・血脉)の寸法としつらえを簡略に記す。

(11)「十七、五位」

二七六×二七八。奥書に「義俊授是秀畢」とある。潔堂派内における「五位」関連の切紙の一つ。易学の大極・兩儀・四象・八卦等の術語が用いられている。

(12)「一八、五方・五智・五体・五輪之惣圖」

三五七×六〇二。義俊・光中・是秀の署名と花押あり。奥書に「于時明應七年戊午八月十有八、謹是秀傳寫之」とある。図には彩色が施されている。

(13)「廿、血脉圖相之大事」

三〇八×四〇二。奥書に「于時明應三年甲寅十二月二十日、竺印老示是秀畢」とある。

(14)「廿一、傳受之次第」

三三〇×四四四。本文には「傳受道場莊嚴之次第」とある。奥書に「昔明應三年甲寅二月廿日、於普濟禪寺、是秀書之」とある。「委者在別書」とあることから、傳受についての詳細を記した物が別に存した物と思われる。

(15)「廿三、知死期大事」

二八九×三六八。本文には「達磨大師之秘法口訣靈傳紙」とある。又、奥書には「今義俊授是秀、於和知山(花押)」と見える。

(16)「廿一、王子之配立」

二九三×三八一。「應仁二季孟秋日」とあるが、他の切紙とは異なり、伝授關係を示す記載及び署名・花押等がなされていないことから、疑問が残る。内容は「王子五位」であり、「偏正五位」との相応關係を示す。

(17)「偏正五位大事」(以下は端裏に整理番号なし。順不同)

二八二×三五七。本文には「偏正五位圖」とあり、奥書に「於和知山義俊老衲示是秀畢」と見える。

(18)「二句之偶血脉」

六九一×二八一。二紙縦縫ぎ。奥書に「昔日本寛正六年乙酉九月五日伊勢国飯高郡大黒田郷同傳受之、昔日本正文元年丙戌三月廿七日義運傳受之、昔日本延徳三年辛亥二月一八日同是秀之」とある。(19)の相承次第と考え合わせると、ここに見える義運は、普濟寺十三門派の一つ月窓派の祖であり、西来院(浜松市)開山である月窓義運を指すと思われる。従って、是秀は潔堂派の切紙以外にも他派の切紙も相伝していたことがわかる。又、裏書きに「常光寺芳久用之」とあるが、芳久は常光寺九世参室芳久のことであり、「潔堂一派之参和目錄」に「昔慶長拾庚戌年林鐘朔日、於常光寺真前、祥君今附授芳久畢。祥

君（花押）\ 維時元和七辛酉仲春廿八日、於丈室、芳久今附授天察畢。芳久（花押）\ と見える。この記事によれば、芳久は恩海洋君から伝授を受け、明山天察に相伝している。

(19) 「観音二句相承之偈」

七五九×二九八。二紙縦縫ぎ。奥書に「延徳三年辛亥二月一八日」とある。又血脈相承次第の末尾に「谿岳 東海 義運 是秀」とあり、本切紙が(18)同様月窓義運から伝授された物であることを示す。更に鶏岳は普濟寺十三門派の一つ谿岳派の祖であり、宝鏡寺（山梨県都留市）開山の谿岳永金を指し、同様に東海は東海派の祖であり、妙巖寺（愛知県豊川市）開山の東海義易を指すと思われる。

(20) 「天神血脉相承」(仮題)

卷子。五紙をつなぐ。一三八×三六二 一三八×三六二 一三八×七六一 一三八×三七九 一三八×四九二。奥書に「天神血脉相承。仁治二年辛丑三月廿七日\ 長祿三年己卯八月二十日\ 應仁二年戊子三月二十七日\ 文明十三年辛丑十月三十日\ 明應七年戊午八月廿八日\ 是釋子秀傳畢」とある。

(21) 「手印大事」

一〇七二×三四八。奥書に「吉天文三年甲午二月十八日、於常光丈室、是秀傳授俊徳畢也」とある。俊徳とは常光寺六世山翁俊徳を指す。この日付を有する資料が外にも常光寺に蔵されている。「受戒作法」「菩薩戒作法」がそれである。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

上記の切紙の中から、一例として「知死期之大事」を取り上げてみたい。前近代、特に中世という時代、仏教者にとって、その死は個人的な範疇を越えてより社会的な意味を持つていたと思われる。禅者としてのあるべき終焉の迎え方が求められ、瑞祥や奇特をも含めて、善きものでなければ、その人となりか全否定されかねない状況にあった。事実、禅宗に関連するところでは、『沙石集』巻十(末)の「臨終目出千人々」として見える、荣西、荣朝、藏叟朗普、法心房、蘭溪道隆、聖一国師等の記事を見ても、臨終の意味は極めて大きかったことを知ることができる。以下に掲げる「知死期之大事」は、自らの死期を悟ることが、禅僧にとって以下に重要であったかを推察させる史料である。

「廿三、知死期大事」

達磨大師之秘法口訣密傳紙

纈覺玉池無滴瀝、次於波底取神光、無常須聰體頭鼓、得數方知幾日也。

漢土之第六南能和尚、最上乘秘密法也。為師嫡々相授而到洞山和尚。又和朝之元和尚、代々相傳而到義曇、々授俊、々授中、々授秀、法器者也。道心堅固而傳此偈畢。右不信非器輩、莫傳授此法。若傳授之時、於堂塔佛前、踞踞合掌礼師了、可受。傳授了、礼拜。師資之礼拜。雖三世隨順、無器之者、不可傳。雖不三世隨順、法器之者、何不傳哉。此時傳授無師、販墮

在地獄矣。此法可修様、先七日以前、若三日之間、加行用心、或坐禪、或讀經・誦咒・禮拜、日數之燒香、日數之花・燈明不斷、無睡禁足而可行者也。

一、十二月晦日、以子時可行。偈云、聽體頭鼓者、檢明年大小月、并日數拳三展、兩手掩双耳。以左右指牽上牙、頭上其聲似鼓。月日時數打之、無聲、知定業期本。以三度為限。偈云、玉池無滴漉者、不慮之外得病。漉溢口中、塗指端見之、若無沫泡者、可知定期也。偈云、波底取神光者、以指峰指目時、眼光如星散、若無光者、可定期也。

右於「長日」不斷用心不緩、隨時秘為秘。臨終日、心可試之。以是真實之道心者云也。此外何善惡之可起、一念無。又不起一念者、一切衆生之処無益。無益、半眼之光明云。有起飯無起、々々飯有起、々々無起、真無。無起有起、真有。此時相是、々相非、々相是。不レ知は相非、不レ知非相是。掃ハハ相非ナリ、掃ハ非相是。用は不レ知は相非、用非不レ知非相是。此時不識上云。亦復不識上、物看、此密傳者、從七仏以來宗承来、何僧伽難提和尚下、依無法器者、為去後達磨面壁少林、而現諸法、末世之大法器相承云々。

今義俊授是秀、於于和地山、

(花押)

この切紙の成立時期であるが、「参話目録」の記事及び「見性成佛之大事」に、「崑文明十四年壬丑九月二十三日、於東海道三川渥美縣和知山潔堂老書之(花押)」とある事から、文明十三、四年前後と考えられる。

面山瑞方(一六八三—一七六九)は、「洞上室内断紙揀非私記」においてこの切紙を「疑真言僧之新添也」として批判している。

達磨大師知死期法断紙

面山謂、此知死期法、則道家仙術者之所行、而非佛法也。圖悟禪師廣録有「破胎息論」、實「其邪義」。萬松從容録中、評之。榮西興禪護國論、亦破之。宗門中必勿用。今断紙附會印呪者、疑真言僧之新添也。題「達磨大師」、誑惑之甚。是故附之揀非。

面山は、「達磨大師知死期法」切紙を批判する根拠として、圖悟克勤「破胎息論」(「破妄傳達磨胎息論」)、萬松老人「從容録」第九六則、榮西「興禪護國論」を挙げている。

怕臘月三十日憶惶、競傳歸真之法。除夜望影喚主人翁、以下日月聽樓鼓、驗玉池岫眼光、以為脱生死法。眞誑譚閻閻、捏偽造窠。胎高人嗤鄙。復有一等、假託初祖胎息說、趙州十二特別歌、龐居士轉河車頌。遞互指授密傳行持。以圖長年。及全身脱去。或希三五百歲。

(圖悟克勤「破妄傳達磨胎息論」大正蔵四七・八〇九下、八一)

〇上)

宋西(一一四一—一二二五)は『興禪護國論』第五門において、「達磨大師知死期偈」の真偽を問題としている。すなわち、仁安三年(一一六八)四月、第一回の渡宋で明州に着早々の頃、広惠寺の知客との問答に、以下のように見える。

又問曰、我日本国有達磨大師知死期偈、真偽如何、知客答曰、所喻之法、乃小根魔子妄撰其語也、夫死生之道、在吾宗本以去來生死平等、初無生滅之理、若謂知其死期、是欺吾祖之道、非小書乎、久聞日本国仏法流通、幸逢吾師須奉筆語、然人有華夷之異、而仏法總是一心、一心纔悟唯一門、金剛經所謂應無所住而生其心也、欲知源流請垂訪及、当一一相聞、応知祖師之道、非小乘知見所能測度也、云云、

(大正蔵八〇・一〇上)  
とある。宋西在宋当時の禅林では、既にこの広惠寺の知客の言に見るように、達磨に仮託された偽説との評価が一般的であつたと推定される。

しかしながら、宋西が「達磨知死期之偈」が真説かどうかを疑問視した背景には、それが恐らく当時の顕密僧によつて広く受容されていた事によるのではないかと考える。このことを示す史料として、院政期成立(保延十一年—一一四五)の「達磨和尚秘密偈」(高山寺蔵)があり、同種のもの

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

のが金沢文庫にも収蔵されている。高山寺所蔵の史料は、末木文美士氏によつて初めて紹介された史料である。<sup>6)</sup>

「達磨和尚秘密偈」(高山寺蔵)

達磨和尚秘密偈云、纔覺玉池無滴瀝、次於波底取神光。無常須聽體頭鼓、得數方知幾日上。

雲州修行者善慶語云、以先年ノ比マ、大宋国ノ船頭、雖在俗也ト即称シテ法号マ、名テ曰フ範勝ト、通シテ達磨宗マ、道心堅固ナリ、即渡テ鎮西ニ、欲テニ伝ト此ノ偈マ、依テ無ニ其ノ機、空ノ終ニ箇年マ、於是ニ鎮西ノ陽尊聖人、而問シ其ノ要マ、仍テ範勝適得テ機マ、伝フ陽尊ニ、々々伝門人陽円ニ、々々伝觀山ノ源範ニ、々々伝求法僧善慶、々々伝良深、々々伝澄仁、々々伝有西、々々伝勝尊、々々伝基舜、矣、深ク収テ函底ニ、勿伝ト他門ニ、別在相承印信云々、口伝云、先檢テ十二月朔日マ、子ノ時ニ誦ニ阿弥陀經マ、念仏百返セシ、而文ニ聽頭鼓ト者、檢ハ明年ノ大小月ノ日數畢テ展ノ、二ノ手ヲ掩フ、二ノ耳マ、以左右ノ指ノ峰マ、互ニ打テ頂ノ上マ、其ノ声ノ似リ鼓ニ、數テ曰フ打ニ之マ、以テ無ラム音、日ヲ知シ定期ト、三度ヲ為シ限ト、又玉池無滴者、不應ニ得ニ病マ、唾ヲ溢テ口中ニ、塗テ指ノ端ニ見ヨ之マ、若無クハ泡沫者、可知定期也、又波底取光者、以テ指ノ峰マ、指セ目畔マ、見ニ如シ散ルガ星マ、若不然者、可知定期矣、範勝之定限無違、陽尊又無違云々。保延十一年甲申十一月十五日伝受マ。

また先の質問が宋西によつて発せられた疑問であることを



誘出<sup>テサシヤル</sup>已來<sup>コトヨリ</sup>、三界・二十五有<sup>カニ</sup>、懸<sup>カケ</sup>網<sup>ミ</sup>、受<sup>ウケ</sup>火血刀<sup>ノ</sup>、三魔<sup>マ</sup>、苦<sup>ク</sup>梵語也。此<sup>コノ</sup>ヲイテ骨卸也。被<sup>カケ</sup>迫<sup>セ</sup>死<sup>ス</sup>本源。何<sup>ナニ</sup>レ<sup>ノ</sup>季<sup>キ</sup>時<sup>トキ</sup>日<sup>ヒ</sup>、不知<sup>シラ</sup>、爰<sup>ココ</sup>本朝第一高祖傳教大師渡唐之時、修禪寺道遂和尚奉<sup>ホウ</sup>值<sup>チ</sup>、此<sup>コノ</sup>相<sup>サウ</sup>承<sup>シユク</sup>。知<sup>チ</sup>死期<sup>シキ</sup>、法業<sup>ホウゲツ</sup>。飯朝之後、我<sup>ガ</sup>山<sup>ヤマ</sup>ニ為<sup>シ</sup>佛法弘<sup>コウ</sup>行人<sup>ノ</sup>、記<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>云々。忝<sup>カシヤクモ</sup>此<sup>コノ</sup>秘法<sup>ヒツポフ</sup>ハ七十以後<sup>ニシテ</sup>、非<sup>シ</sup>臨終<sup>リンシユウ</sup>開<sup>キ</sup>眼<sup>ノ</sup>弟子<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>、相<sup>カウチ</sup>構<sup>カウ</sup>々々<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>非<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>機<sup>ヲ</sup>、授<sup>ケ</sup>此<sup>ノ</sup>秘法<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、不<sup>レ</sup>信<sup>シ</sup>間々<sup>ニ</sup>、三<sup>ノ</sup>宝<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>蒙<sup>シ</sup>當<sup>シ</sup>罰<sup>ス</sup>。可<sup>レ</sup>趣<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>惡<sup>ノ</sup>道<sup>ニ</sup>也。仍<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>秘法<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>信<sup>シ</sup>、々々、實<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、三<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>、亦<sup>モ</sup>祖<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>內<sup>ノ</sup>證<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>議<sup>ス</sup>也。可<sup>レ</sup>秘<sup>ス</sup>々々、穴<sup>ノ</sup>賢<sup>ノ</sup>々々、爰<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>定<sup>シ</sup>、境<sup>ヲ</sup>何<sup>レ</sup>季<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>月<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>日<sup>ノ</sup>何時<sup>ノ</sup>知<sup>ハ</sup>ハ、或<sup>ハ</sup>誦<sup>シ</sup>經<sup>ヲ</sup>誦<sup>シ</sup>真<sup>ヲ</sup>言<sup>ヲ</sup>唱<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>、遮<sup>シ</sup>惡<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>、修<sup>シ</sup>善<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>、只<sup>シテ</sup>偏<sup>ニ</sup>發<sup>シ</sup>無<sup>レ</sup>上<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>提<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>、出<sup>シ</sup>離<sup>ノ</sup>要<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>、可<sup>レ</sup>囑<sup>シ</sup>開<sup>シ</sup>悟<sup>ヲ</sup>得<sup>シ</sup>脫<sup>シ</sup>旨<sup>ヲ</sup>。此<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>ハ傳<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>、生<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>在<sup>リ</sup>無<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>也。真<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>目<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>也。於<sup>テ</sup>ハ末<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>鈍<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>愚<sup>ノ</sup>癡<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>、尤<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>習<sup>シ</sup>、覺<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>秘<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>也。偏<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>議<sup>ス</sup>也。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>也。言<sup>ハ</sup>語<sup>ヲ</sup>道<sup>ヲ</sup>斷<sup>ス</sup>也。若<sup>シ</sup>傳<sup>フ</sup>之<sup>者</sup>、此<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>住<sup>シ</sup>坐<sup>シ</sup>臥<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>隨<sup>フ</sup>身<sup>也</sup>。呼<sup>ビ</sup>、有<sup>レ</sup>由<sup>也</sup>哉。穴<sup>ノ</sup>賢<sup>ノ</sup>々々。

知<sup>ル</sup>死<sup>シ</sup>期<sup>ヲ</sup>法<sup>ヲ</sup>則<sup>シ</sup>次<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>、季<sup>ノ</sup>末<sup>ニ</sup>、極<sup>メ</sup>月<sup>也</sup>、晦<sup>ノ</sup>夜<sup>也</sup>、大<sup>ツ</sup>ツ<sup>ノ</sup>モリ<sup>ノ</sup>、夜<sup>ノ</sup>半<sup>也</sup>也。可<sup>レ</sup>行<sup>フ</sup>也。先<sup>ニ</sup>觀<sup>シ</sup>音<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>卷<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>心<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>廿<sup>一</sup>卷<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>尊<sup>ノ</sup>勝<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>羅<sup>ノ</sup>尼<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>返<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>慈<sup>ノ</sup>救<sup>ノ</sup>咒<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>返<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>火<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>咒<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>返<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>輪<sup>ノ</sup>咒<sup>ノ</sup>七<sup>ノ</sup>返<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>念<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>返<sup>也</sup>、次<sup>ニ</sup>坐<sup>ノ</sup>禪<sup>ノ</sup>、然<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>金<sup>ノ</sup>剛<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>掌<sup>ヲ</sup>、後<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>二<sup>ノ</sup>兩<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>手<sup>ヲ</sup>、二<sup>ノ</sup>兩<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>耳<sup>ヲ</sup>強<sup>ク</sup>押<sup>シ</sup>、去<sup>テ</sup>後<sup>ニ</sup>讀<sup>シ</sup>心<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>、念<sup>フ</sup>佛<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>唱<sup>ス</sup>、然<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>、二<sup>ノ</sup>兩<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>定<sup>シ</sup>惠<sup>シ</sup>、指<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>八<sup>ノ</sup>マ<sup>、</sup>初<sup>ノ</sup>月<sup>ヨリ</sup>一<sup>・</sup>二<sup>・</sup>三<sup>・</sup>四<sup>・</sup>五<sup>・</sup>六<sup>・</sup>七<sup>・</sup>八<sup>・</sup>九<sup>・</sup>十<sup>・</sup>十一<sup>・</sup>十二<sup>ノ</sup>打<sup>ツ</sup>響<sup>ノ</sup>音<sup>ヲ</sup>聞<sup>ク</sup>也。何<sup>レ</sup>同<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>敲<sup>ク</sup>聞<sup>ク</sup>時<sup>キ</sup>吉<sup>也</sup>也。其<sup>中</sup>二

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

不<sup>レ</sup>レ<sup>ル</sup>嗚<sup>ク</sup>月<sup>ヲ</sup>在<sup>リ</sup>者<sup>ハ</sup>、死<sup>ス</sup>後<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>定<sup>シ</sup>。頭<sup>ノ</sup>鼓<sup>ノ</sup>法<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>事<sup>也</sup>、師<sup>ノ</sup>弟<sup>ノ</sup>相<sup>シ</sup>對<sup>シ</sup>、委<sup>ニ</sup>細<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>口<sup>ノ</sup>傳<sup>也</sup>。聊<sup>ウ</sup>尔<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>示<sup>ス</sup>者<sup>也</sup>。可<sup>レ</sup>秘<sup>ス</sup>々々。

片<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>山<sup>ハ</sup>、京<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>。山<sup>ガ</sup>キ<sup>ニ</sup>近<sup>キ</sup>也。達<sup>ノ</sup>磨<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>示<sup>シ</sup>聖<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>太子<sup>ノ</sup>渡<sup>シ</sup>唐<sup>ノ</sup>時<sup>キ</sup>、達<sup>ノ</sup>磨<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>唐<sup>ノ</sup>約<sup>ス</sup>束<sup>ス</sup>也。日<sup>本</sup>片<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>午<sup>ニ</sup>現<sup>シ</sup>、出<sup>テ</sup>違<sup>レ</sup>給<sup>セ</sup>。知<sup>ル</sup>死<sup>シ</sup>期<sup>ヲ</sup>。頌<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>、眼<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>落<sup>シ</sup>地<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>、是<sup>レ</sup>黑<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>池<sup>也</sup>、「鏡<sup>ノ</sup>」、覺<sup>シ</sup>玉<sup>ノ</sup>池<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>滴<sup>シ</sup>瀟<sup>ス</sup>。指<sup>シ</sup>波<sup>ノ</sup>底<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>取<sup>ル</sup>神<sup>ノ</sup>光<sup>也</sup>。無<sup>常</sup>須<sup>レ</sup>臆<sup>ル</sup>頭<sup>ノ</sup>鼓<sup>也</sup>。得<sup>ル</sup>數<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>幾<sup>ヲ</sup>日<sup>ヲ</sup>識<sup>ル</sup>亡<sup>ス</sup>。

三通在之。睡<sup>ル</sup>・眼<sup>ノ</sup>光<sup>・</sup>耳<sup>ノ</sup>鳴<sup>也</sup>是<sup>也</sup>。

法<sup>性</sup>平<sup>等</sup>理<sup>偏</sup>見<sup>起</sup>法<sup>喜</sup>禪<sup>悅</sup>食<sup>飢</sup>六<sup>道</sup>輪<sup>迴</sup>衆<sup>生</sup>成<sup>達</sup>、達<sup>ノ</sup>廣<sup>ノ</sup>コト<sup>也</sup>也。阿<sup>ノ</sup>羅<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>譯<sup>シ</sup>者<sup>ハ</sup>、是<sup>レ</sup>聖<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>太子<sup>ノ</sup>達<sup>ノ</sup>廣<sup>ノ</sup>牛<sup>ニ</sup>現<sup>シ</sup>、奉<sup>シ</sup>達<sup>ト</sup>キ<sup>ヲ</sup>ヨミ<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>歌<sup>也</sup>。法<sup>ノ</sup>喜<sup>ノ</sup>禪<sup>ノ</sup>悅<sup>ノ</sup>食<sup>ヲ</sup>、衆<sup>ノ</sup>生<sup>ハ</sup>ハク<sup>ク</sup>ライ<sup>エ</sup>又<sup>也</sup>。是<sup>レ</sup>六<sup>道</sup>輪<sup>迴</sup>者<sup>也</sup>。太<sup>ノ</sup>子<sup>ハ</sup>達<sup>ノ</sup>廣<sup>ノ</sup>憑<sup>ミ</sup>被<sup>レ</sup>レ<sup>ル</sup>申<sup>也</sup>。衆<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>救<sup>フ</sup>ワ<sup>ン</sup>為<sup>メ</sup>ニ<sup>ト</sup>ヨ<sup>マ</sup>ル<sup>ク</sup>也。

・達<sup>ノ</sup>磨<sup>ノ</sup>返<sup>ノ</sup>歌<sup>也</sup>。經<sup>ノ</sup>文<sup>ナ</sup>ル<sup>ヲ</sup>歌<sup>ニ</sup>讀<sup>ム</sup>。飛<sup>イ</sup>鳥<sup>都</sup>轉<sup>天安</sup>樂<sup>世界</sup>不<sup>レ</sup>退<sup>リ</sup>轉<sup>法</sup>輪<sup>不</sup>絶<sup>我</sup>本<sup>師</sup>釈<sup>迦</sup>大<sup>師</sup>説<sup>法</sup>教<sup>他</sup>日<sup>本</sup>在<sup>レ</sup>。歌<sup>ノ</sup>之<sup>注</sup>脚<sup>、</sup>法<sup>性</sup>ト<sup>ハ</sup>、佛<sup>法</sup>ノ言<sup>端</sup>也。般<sup>若</sup>之<sup>名</sup>稱<sup>也</sup>。一<sup>乘</sup>三<sup>乘</sup>之<sup>三</sup>科<sup>妙</sup>法<sup>也</sup>。平<sup>等</sup>ト<sup>ハ</sup>、覺<sup>母</sup>能<sup>現</sup>照<sup>之</sup>明<sup>智</sup>也。是<sup>レ</sup>ヲ<sup>平</sup>等<sup>ト</sup>ハ<sup>也</sup>。片<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>山<sup>者</sup>、無<sup>レ</sup>佛<sup>法</sup>片<sup>ノ</sup>國<sup>ヲ</sup>指<sup>シ</sup>言<sup>也</sup>。又<sup>、</sup>日<sup>本</sup>片<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>州<sup>ト</sup>云<sup>也</sup>。山<sup>ト</sup>ト<sup>ハ</sup>、有<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>與<sup>山</sup>如<sup>堆</sup>而<sup>沈</sup>輪<sup>ノ</sup>車<sup>越</sup>渡<sup>故</sup>、山<sup>ト</sup>者<sup>云</sup>也。飯<sup>ノ</sup>飢<sup>者</sup>、三<sup>界</sup>衆<sup>生</sup>流<sup>点</sup>、迷<sup>情</sup>菩<sup>提</sup>、飯<sup>ノ</sup>飢<sup>難</sup>至<sup>ハ</sup>八<sup>正</sup>直<sup>路</sup>。沈<sup>没</sup>五<sup>道</sup>生<sup>死</sup>二<sup>也</sup>。六<sup>道</sup>輪<sup>ト</sup>ハ、佛<sup>法</sup>弘<sup>道</sup>ノ事<sup>也</sup>。旅<sup>人</sup>ト<sup>ハ</sup>、一<sup>切</sup>衆<sup>生</sup>、我<sup>力</sup>臥<sup>シ</sup>無<sup>明</sup>長<sup>夜</sup>覺<sup>現</sup>、於<sup>六</sup>道<sup>茫</sup>々<sup>ト</sup>而<sup>キ</sup>「<sup>レ</sup>」也。無<sup>レ</sup>相<sup>者</sup>、釈<sup>尊</sup>慈<sup>父</sup>已<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>涅<sup>槃</sup>、迷<sup>々</sup>謬<sup>ル</sup>火<sup>宅</sup>。我<sup>等</sup>者<sup>、</sup>誰<sup>レ</sup>」

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

界廣大無邊轉變無常流点スルト如ニ車ヲ轉ス。外ニワ更ニ無シ常住不滅ノ躰。又三世覺母大聖、早ク皈ニ本宮ニ而流轉チ稚ク誰力可レ衰。無母如レ子。起シ首ヲ進テ菩薩歌云、飛鳥都 日本在。飛鳥都力ヤトハ、太子過去世ニ轉シ生玉テ、其時法隆轉寺邊ニ多生ノ間住玉テ、可レ讀ム彼者ノ事。安樂世界不退位 絶ト者、一切衆生ヲ濟度スルヲ、富トハ讀也。濟度シ助ケントスルニ、流点生死ノ水、更ニ絶者、自レ古至今云心也。我本師 在トハ、覺母智公慈悲ヲ心ニ發スル也。利益衆生ノ道ヲ相義シマ、離覺母智ヲ及濟度ニ故、衝山ヨリ飛來玉テ、於ニ日本國弘宣コトマ、佛法紛諾シ訖。達磨先在ニ出現テ我朝ニ故、争カ可レ忘ル御名ヲ者、詠玉ヘル也。

大和州片岡山達磨寺 萬十群此郷山直ノ村

日本ハ西來ハ十一月十五日、入滅臘月一日也。

方和尚傳正岳乾傳方和尚、夫々嫡々相承而今正鎮傳實和尚即傳正盛也。

今附傳正紹。

前永平大安現住安室正盛老衲(花押)

于時慶長八癸卯年八月二日書之。

しかしながら、室町時代後期における切紙相伝の中心は、嗣法伝授に関わる切紙であったと思われる。石屋派における切紙伝授については、別稿において論ずる予定であるが、一例として、『峨山派室中切紙』を取り上げてみたい。

【(3) 傳法付衣一校儀軌】

傳法付衣一校儀軌

受テ命後七日間、諸堂焼香礼拜、三時無ク懈怠動レメ之。其餘ノ祈念動行須ク勇猛精進ナル、當テ其ノ夜ニ黄昏ノ以後、着テ淨衣ヲ具シテ威儀ヲ及テ半夜ニ潛カ上ル方丈。

道場狂殿様

當ニ正中ノ堂奥ニ、立ツ椅子ヲ。不レ懸ニ法被ヲ、其前ニ置ク棹一脚ヲ。棹衣打敷須ク狂レ之。其ノ中奥奉ル置キ嗣書・血脉・法衣ヲ。西ハ花瓶、東ハ灯燭、華用レ松枝ヲ同ク置ク棹上ノ東。當テ北南ニ向レ西ニ設レ椅子ヲ。師暫シ踏レ此ニ。已ニ入レ道場。師東椅前ニ西面ニ立ツ。資ハ在レ西ニ向レ東ニ而立ツ。師資互ニ展レ坐具ヲ。々々、端須ク重レ之。資九拜。師ハ立地ニ受ク。到レ九拜ニ時キ、師資共ニ拜ス。是ヲ名ク奇拜ト。此時重ニ坐具ノ端ヲ者、豎ニ極レ三世ヲ也。

次ニ向レ中央ニ安ニ嗣書ノ棹ヲ。師資同ク焼香。共ニ展レ坐具ヲ九拜。此時者重ニ坐具ハ坐具ノ長ヲ、横ニ尺ノ十方ヲ也。次ニ収レ坐具ヲ問訊。次ニ移ス棹ヲ於ニ東ニ。資唱云、請和尙坐セ。師踏レ椅ニ垂レ兩脚ヲ。資進前シテ大展六拜。左肩上ニ掛レ法衣ヲ。膝行七步而進前シテ唱云、生死事大、無常迅速師。拜請シテ佛祖ノ命脉ヲ、欲ス為ニ仏祖新師ト。和尚慈悲哀感聽許シ。師洒水灌レ頂ニ。如ニ血脉ノ時ニ。其後順ニ摩頂スルニ返ス。資低頭。師唱云、從ニ如來嫡々相承シテ而到リ吾

ミ、々々授レ汝、々々能護持而、莫レ令<sup>ムルコト</sup>仏祖ノ種子ヲ断絶セ。三唱止。

次<sup>ニ</sup>付<sup>レ</sup>法衣<sup>ヲ</sup>、有<sup>レ</sup>口傳。三皈・三聚・十重禁畢、膝行七歩、退后三拜。師資共向<sup>テ</sup>嗣書・血脉<sup>ニ</sup>三拜。其<sup>ノ</sup>后、師向<sup>テ</sup>資<sup>ニ</sup>三答拜。資<sup>モ</sup>亦同拜ス。其<sup>ノ</sup>后拈<sup>レ</sup>嗣書香<sup>ニ</sup>熏<sup>シテ</sup>云、我今得<sup>ルコト</sup>汝、如<sup>ク</sup>積尊<sup>ノ</sup>得<sup>ル</sup>迦葉<sup>ヲ</sup>。嫡々相承<sup>シテ</sup>而、到<sup>リ</sup>六十三世<sup>ニ</sup>、我<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>正法眼蔵<sup>ノ</sup>、不<sup>レ</sup>殘付<sup>レ</sup>你<sup>ニ</sup>。尽未來際、勿<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>仏種断絶セ。師資頂戴<sup>ス</sup>三度、開<sup>キ</sup>嗣書<sup>ヲ</sup>、燒<sup>シ</sup>松熟<sup>令</sup>見<sup>ル</sup>資<sup>ノ</sup>名字<sup>ヲ</sup>。其<sup>ノ</sup>后、如<sup>ク</sup>血脉<sup>ノ</sup>、量<sup>ク</sup>取<sup>リ</sup>資<sup>ノ</sup>胸襟<sup>、</sup>或<sup>ハ</sup>取<sup>リ</sup>袈裟<sup>、</sup>紐<sup>ヲ</sup>下<sup>ニ</sup>、三拜<sup>シテ</sup>退<sup>ル</sup>。

次<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>翌日<sup>ニ</sup>五更上<sup>リ</sup>方丈<sup>ニ</sup>、致<sup>ス</sup>無住拜<sup>ヲ</sup>。言<sup>ハ</sup>無住<sup>ト</sup>者、無數量拜也。受<sup>ル</sup>師<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>則<sup>テ</sup>住<sup>ム</sup>。今者此<sup>ノ</sup>時必<sup>ス</sup>為<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>限<sup>ニ</sup>二十五拜<sup>ヲ</sup>也。

聖授儀式易<sup>シ</sup>忘<sup>ル</sup>、正猷為<sup>レ</sup>后人<sup>ノ</sup>撰記。正猷付<sup>ス</sup>為<sup>レ</sup>璫藏主、璫付<sup>ス</sup>益藏主<sup>、</sup>益付<sup>ス</sup>心書記<sup>、</sup>心付<sup>ス</sup>心書記<sup>、</sup>心付<sup>ス</sup>宗睿都司<sup>、</sup>睿付<sup>ス</sup>心書記<sup>。</sup>

文喜二年壬戌臘八宗睿授宗本 在判

#### 【(4) 授紙傳記】

##### 授紙傳記

焼香禮拜

北部 三拜 師資兼  
受者皆兼

普賢十願

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(一)飯塚

礼敬諸仏、称讚如来、廣修供養、懺除業障、隨喜功德、諸轉法輪、諸佛出世、常隨仏学、恒順衆生、普皆迴向。

##### 次三皈依

南無帰依佛、南無皈依法、南無皈依僧、帰依佛而足尊、帰依法離欲尊、帰依僧衆中尊、帰依仏竟、帰依法竟、帰依僧竟。

##### 四弘請願

衆生無辺誓願度、煩惱無辺誓願断、法門無尽誓願知、無上菩提誓願證。

##### 宝號

南無釋迦牟尼仏

##### 開經偈

無上甚深微妙法、百千万億劫難知、我今見聞得受持、願解如来第一義。

##### 次

掲<sup>ク</sup>經<sup>ノ</sup>題<sup>ヲ</sup>三度、其<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>讀<sup>ム</sup>レ文也。經及本尽皆唯此法而受矣。

右采西僧正傳法作法

宗睿授宗本 在判

##### ( 図有り省略 )

拜<sup>ノ</sup>後、師取<sup>テ</sup>經<sup>ヲ</sup>熏<sup>シテ</sup>香<sup>ニ</sup>、而度<sup>ニ</sup>与<sup>ス</sup>受者<sup>。</sup>弟子受<sup>テ</sup>經<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>合掌<sup>ニ</sup>、而著<sup>ス</sup>座<sup>。</sup>捧<sup>シ</sup>經<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>待<sup>ツ</sup>作法<sup>ヲ</sup>。先<sup>ッ</sup>受<sup>テ</sup>法華經<sup>ヲ</sup>、次<sup>ニ</sup>受<sup>テ</sup>梵網經<sup>ヲ</sup>。已<sup>ニ</sup>受<sup>テ</sup>二本<sup>ノ</sup>聖經<sup>ニ</sup>云云。壽量品与<sup>テ</sup>師共<sup>ニ</sup>引<sup>キ</sup>展<sup>キ</sup>、而不<sup>レ</sup>断<sup>セ</sup>聲<sup>ヲ</sup>而讀<sup>ム</sup>也。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

明德五年<sup>成享</sup>三月八日傳授之

法谷 良秀 有判

西和尚嫡々相承到<sup>レ</sup>吾々、々今付<sup>ス</sup>正猷藏主。 仍受耳。

應永十五年<sup>成</sup>八月一日

前總持 真梁 有判

今正猷授<sup>レ</sup>瑞藏主

文安二年<sup>正</sup>二月六日 有判

今為<sup>レ</sup>瑞授益首座 文正二年丁亥仲春初一日 在判

今須益授<sup>レ</sup>心書記 文明四年壬辰仲秋廿二日

今仲心授<sup>レ</sup>書都主 文明十六年卯月佛生日 <sup>判在</sup>

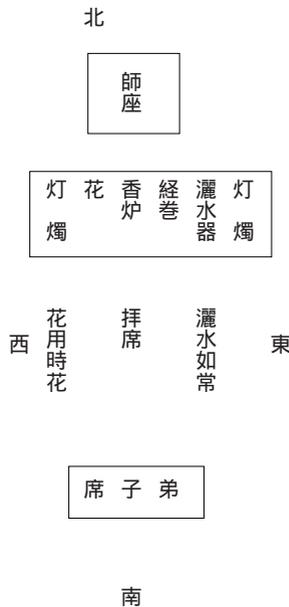
今宗書授<sup>レ</sup>本書記 文龜二年壬戌臘月八日 在御判

上記の二通の切紙の相伝の系譜に拠れば、石屋真梁以降、  
文龜二年(一五〇二)宗書から宗本に嫡嗣に相伝されてきた  
ことを言う。また、この伝法作法は、永平寺においてもその  
切紙史料を見ることが出来る。

「千光禪師之分 伝法儀軌 秀礼也」

建仁宗西千光禪師伝法儀軌

受戒作法、先<sup>ツ</sup>道場<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>シ</sup>須<sup>レ</sup>開<sup>ニ</sup>静所<sup>ヲ</sup>、受者沐浴淨潔<sup>シ</sup>、著<sup>ニ</sup>  
新淨衣<sup>ヲ</sup>、或<sup>ハ</sup>旧衣<sup>ヲ</sup>浣洗<sup>シ</sup>、受者具<sup>シ</sup>威儀<sup>ヲ</sup>、焼香礼三拜<sup>シ</sup>、于大<sup>ツ</sup>  
殿等諸堂却来<sup>シ</sup>、師所、師座<sup>ニ</sup>面<sup>シ</sup>南、受者北面焼香九拜<sup>シ</sup>、後踞<sup>コ</sup>  
跪<sup>キ</sup>合掌<sup>シ</sup>、且待<sup>ツ</sup>作法<sup>ヲ</sup>。



受戒之時可誦我今盧舍那方坐蓮華台之偈、

師合掌云、<sup>十誦</sup>禮敬諸仏、稱讚如來、広修供養、懺除業障、

隨喜功德、諸転法輪、諸仏住世、常隨仏学、恒願衆生、普皆迴

向、<sup>偈誦</sup>、  
次、三帰、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、帰依仏而足

尊、帰依法離塵尊、帰依僧衆中尊、帰依仏竟、帰依法竟、帰依

僧竟、

次、四弘願、衆生無辺誓願度、煩惱無辺誓願断、法門無尽誓願

智、無上菩提誓願証、

次、南無釈迦牟尼仏<sup>十誦</sup>、次、<sup>開経偈</sup>、無上甚深微妙法、百千万億

劫難値、我今見聞得受持、願解如來第一義、

次、揚経題三文、次、師合掌取経薫香而度与受者、々々合掌展

両手受之、師自経始誦之、文句須分明、受者深信自受誦之、但

法花經至于退坐一面而止也、或及經終也、受者不離坐具而立北面三拜了、餘受經皆準此法而受矣、

或受者著座、在坐具而坐、捧卷受之也、

日本元徳元年八月一日、在吉祥山永平寺堂興受之、

中興老師面南、曇希北面禮拜、依此儀軌矣、

本云、文曆二年乙未八月一日、依此儀軌、

弘安戊寅十月一日、依此儀、

(裏面)

仏祖伝法儀軌 於桃明庵

授永久蔵主畢

応永廿四年九月廿九日

喜舜(花押)

永平寺における相伝史料の最も古い物が伝法儀軌(内容は授經儀軌)であることは、初期の切紙成立事情を示唆する。後に三物相承を嗣法の儀礼として体系化する以前には、様々な伝法の儀軌が作成され、その意義付けを切紙や一部本参が担ったものと推察されるからである。

三、永平寺における切紙相伝について

中世林下曹洞宗における嗣法相統は、大事(参禅)了畢を前提としていたと思われる。永平寺における本参史料については前稿において管見を述べた。少なくとも室町時代以降、室内参禅修行(公案参究)が盛んに行われ、切紙や本参類の

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

相伝が嗣法相統と同時に行為、あるいはそれこそが嗣法相統と考えられていたとも推定される。ここでは、戦国期から江戸時代初期における切紙相伝を中心に考察したい。

以下に掲げるのは、永平寺第十六世以實(現世代十七世)の付法状とされるものである。

於吉祥山永平禅寺丈室而、宗門之法則・法器等、不残一物、于

新祖棟嗣資之也、聊不渡庵案秘訣矣、如件

心心円一、一在無功、君臣合道、柳緑花紅

皆大永第七丁亥年仲春三日

現住祥山永平以實(花押)

(朱印文「以實」)

大永七年(一五二七)、永平寺室中において、現住持以實から次の世代を担う祖棟(祚棟)へと、「宗門之法則」と「法器」等が伝授されている。「宗門之法則」とは、宗門(林下曹洞宗)における相伝史料(切紙・本参)に該当し、「法器」は嗣法の証とされる法具(袈裟・拄杖・弘子)を指すものと思われる。

以實の付法状に類似する形式のものが、祚棟にも残されている。

於吉祥山永平禅寺丈室、宗門之一大事因縁、儀軌・戒品、法器・杖・弘、不遺一物、祚玖首座伝附畢、

根基牢実、血脈貫通、金鎖連環、相統不断、至祝至禱

一三七

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

吉永祿三<sup>甲</sup> 七月廿八日

現住永平十七世沙門祚棟<sup>(珠印白文・祚棟)</sup>(花押)

又、祚棟には、別に伝法偈が残されている。<sup>(1)</sup>

伝法の偈云、法法円融、無始無終、異苗繁茂、心地崆峒、

吉永祿三<sup>甲</sup> 七月廿八日

吉祥山永平禅寺十七世沙門祚棟<sup>(珠印白文・祚棟)</sup>

祚棟の付法状に見える「宗門之大事因縁」とは、切紙や本参といった相伝史料を概括する言葉として用いられる。又、「儀軌」と「戒品」とは、前者は伝法に関わる儀式の軌則であり、後者は『仏祖正伝菩薩戒作法』や『出家略作法』といった伝戒史料を指すものと思われる。「法器・杖・払」とは、伝法の証としての法具を指すと思われるが、以實付法状において、「法器」として概括されていた物が、ここでは、拄杖・払子と具体的に指摘されている。後述の『室中切紙謄写』によっても、この伝法の儀礼は確認し得る。

### (3) 傳法之儀軌

敷座具、書嗣疏了、連了、其下「師傳授之偈」師之自筆ニテ書ス、年号日付判シ了テ、嗣疏ヲ疊セ、次儀軌・戒本ヲ傳授シ了テ、儀軌・戒本ノ奥ニ、年号・日付・師号・在判也、

「宗門之大事因縁」に係する物としては、祚棟に伝法した祚玖に『吉祥山永平禅寺総目録』(公案目録、以下「永平寺総目録」)が現存する。<sup>(1)</sup> その巻末の識語に、以下のよう

に見える。

球和尚以自筆書寫之

于時元和九年系誤小春十八日

永平十八世

于時慶長十一年八月廿三日 祚球(花押)

伝附 祚天座元

吉祥山永平禅寺総目録之次第

堅可秘之、

鎮徳寺現住雪菴叟(花押)

これによれば、永平寺一九世(現世代による)祚玖(球)が慶長一年(一六〇六)に祚天(後の永平寺二三世)へと伝授し、それを更に祚天の法を嗣いだ鎮徳寺三世雪庵宝積が元和九年(一六二三)に転写したのが、本書『永平寺総目録』であり、ちなみにその内容は三位の透りの参に依拠した公案目録である。

伝法は、嗣法証明(三物伝授)を中心とするが、この外に参禅了畢の証明、『仏祖正伝菩薩戒作法』(以下『菩薩戒作法』)の伝授の証明、伝衣の附授証明という形式によってもなされる。祚棟の付法状に見える「戒品」は、『菩薩戒作法』の伝授が作されたことを意味する。因みに、祚棟の書写の『菩薩戒作法』が永平寺に現存しており、以下に相伝の系譜を掲げ

右大宋宝慶元年九月十八日、前往天童景德堂頭和尚、授戒<sup>式</sup>、道元戒如是、祖日<sup>子師傳書持者</sup>・宗端知客・広平侍者等、周旋行此戒儀、大宋宝慶中伝之也、

本云、日本元弘三年九月廿七日夜半、従本寺前往永平兼宝慶二世堂上老師相伝之、比丘曇希 四十六歳

日本康安二年<sup>手黄</sup> 結制日、在永平首座寮、以先師希和尚聽許書写之、比丘以一<sup>四十二歳</sup>

日本嘉慶二年<sup>盛展</sup> 五月十八日、在永平書記寮、以先師一和尚聽許書写之、比丘喜純<sup>四十一歳</sup>

日本応永七年<sup>慶展</sup> 十月十五日、在永平首座寮、以先師純和尚聽許書写之、比丘宋吉<sup>五十八歳</sup>

日本応永十二年<sup>乙酉</sup> 七月十日、在靈梅院、以先師吾和尚聽許書写之、比丘永智<sup>四十九歳</sup>

日本永享十年<sup>庚午</sup> 十一月廿八日、在承陽菴、以先師智和尚聽許書写之、比丘祖機<sup>五十四歳</sup>

日本文安二年<sup>乙丑</sup> 二月廿八日、在首座寮、以先師機和尚聽許書写之、比丘了監<sup>五十六歳</sup>

日本康正三年七月廿八日、在承陽菴、以先師鑑和尚聽許書写之、比丘建綱<sup>甲十五歳</sup>

日本応仁二年三月七日、在承陽菴、以先師綱和尚聽許書写

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

之、比丘建漸<sup>五十四歳</sup>

日本文明六年<sup>甲午</sup> 五月二十日、在維那寮、以先師漸和尚聽許書写之、比丘光周<sup>四十二歳</sup>

日本明応二年<sup>癸丑</sup> 三月七日、在承陽菴、以先師周和尚聽許書写之、比丘宗縁<sup>三十六歳</sup>

從此年八月次元享也 日本永正十八年<sup>吉吉</sup> 六月廿八日、在文室、以先師縁和尚聽許書写之、

日本天文九年<sup>辛丑</sup> 三月廿八日、在文室、以先師貫和尚聽許書写之、比丘以貫<sup>五十歳</sup>

皆天文九年<sup>庚子</sup> 季春廿八日、以貫<sup>(詔日文・以貫)</sup> (花押)

日本永祿三年<sup>甲申</sup> 七月廿八日、申在文室、以先師棟和尚聽許書写之、比丘祚玖<sup>三十歳</sup>

皆永祿三年<sup>庚午</sup> 七月廿八日、祚玖<sup>(詔日文・祚玖)</sup> (花押)

永祿三年(一五六〇)七月二十八日に、祚玖は師である祚棟の『菩薩戒作法』書写の許可を得て書写しているのであり、同日に先の付法状及び伝法偈も与えられている。

次に、『菩薩戒作法』の相伝について取り上げてみたい。<sup>(13)</sup> 愛知県西明寺所蔵の「伝戒附法書(仮題)」は、同寺開山太

素省淳(一四九七)が、文明十八年(一四八六)に師の芝岡宗田(一五〇〇)より伝授されていた『菩薩戒作法』を、

遷化直前の明応六年(一四九七)八月四日、弟子の同寺二世

機外了禪に附与したもので、附法相承が同時に、或いは既に完了していることを前提としている。

〔伝戒附法書〕

日本文明十八年「丙午」六月二十日

前龍沢田和尚示省淳玄、仏戒者宗門之大事也、靈山少林曹溪臨濟芙蓉天童東林建仁永平、皆附嫡嗣、従如来嫡々相承到吾、伝附既畢、附法弟子省淳令附了禪、

于時明応六年「丁巳」八月四日

また、神奈川県香林寺所蔵「伝授了畢」切紙も、やはり『菩薩戒作法』の伝授に関する切紙と推察される。但しこの切紙は、二度の相伝を経ている。先ず寛永六年(一六二九)、海蔵寺十三世文苗より長円に宗門之大事である仏戒が相伝されたことを証した切紙として成立している。後に香林寺十六世髓岩千紹(一七二四)はこの切紙を用いて同寺十七世悦翁恵禅(一七五六)に伝授しており、恐らくは『菩薩戒作法』に附して伝えられたものと見られる。

(端裏) 伝授了畢

日本寛永六「己巳」年林鐘廿八日

靈山十世前永平最乘現住兼海蔵十三世文苗和尚、示長円云、仏戒者宗門之大事也、

靈山少林曹溪洞山臨濟芙蓉天童建仁永平、皆附嫡嗣、従如来嫡々相承而至吾、伝附既畢、今授附法弟子長円、

海蔵十三世苗和尚、示長円云、仏祖命脈、証契即通、如今長円、証契即通也、

髓岩叟(花押)

与恵禪

于時寛永六「己巳」年六月廿八日

裔南(花押)

それでは、江戸時代前期における永平寺の情況はどのようなものであつただろうか。永平寺二世世嶺巖英峻(万照高国禅師)によつてまとめられ、智堂光紹が相伝したと思われる「切紙目録」には、百五十七種の切紙を列記した後に、「參禅卷冊覚」として、別に二十二種の門參資料の目録が附記してある。永平寺第三四世叢州高郁(大仙国光禅師、元禄元年一六八八 示寂)が、貞享五年一〇月永平寺退院に際して記録した「伝授室中之物」<sup>(1)</sup>によれば、永平寺室中において伝授相伝され、室中の參禅箱に収蔵された本參・切紙類が列挙されている。それらの記事を以て類推すれば、江戸時代前期には実に多くの切紙や本參と言つた相伝資料が永平寺に所蔵されていたことを知ることができる。

伝授室中之物

- (1)一、後開山御守後住伝授之時、可拜箱二入、(2)一、伝授古則入派、向上最初ヨリ、十二通之目録、(3)一、三十四聞之抄、是ヲ伝法之時、不究者、吾宗之非師家、壹冊在之、(4)一、天童如

浄和尚御自筆之仏詞書之写、本書重而可見。(5)一、明全和尚御自筆血脈写シ、本書重而可見。(6)一、伝授入派、竹篋背触三位透脱之目録在之。(7)一、過去心字之血脈一大事因縁渡之、同過去七仏之血脈在之。(8)一、伝授入派、大死底之參禪、諸門派江渡ル。(9)一、道場莊嚴儀式。(10)一、両家血脈御大事之目録在之。(11)一、伝授之作法、從曩祖之本筋目也、永平寺隱居地二置、嫡子一人二可付之。(12)一、永平寺參禪之目録、代在之、渡之。(13)一、宗門二柱、是ヲ仏法之二柱俱云、祖意教意、仏法王之二柱也、代可秘之。(14)一、催促之切紙。(15)一、居士之嗣書、此内色々ノ切紙俱在リ、壹冊。(16)一、碧岩百則之參、壹冊。(17)一、御開山弁道話小本折本。(18)一、法華八卷微妙之參話、壹冊。(19)一、五家宗派之分ケ、壹冊。(20)一、吉祥參禪入派、竹篋背触、壹冊、光紹改之。(21)一、永平寺本參、壹冊、御州改之。(22)一、伝後之參目録、壹冊、光紹改之。(23)一、三十四問之各目并十則正法眼、御州改之。(24)一、三十四話之抄、同參禪、并切紙、壹冊、御開山以來在之。(25)一、吉祥山諸話頭總目録、壹冊。(26)一、正法眼藏之内梅花卷、光紹代、明光院二休大居士日牌ノ御納之、小本一冊。(27)一、大陽渡浮山黒狗、底、切紙、二十三之内ヨリ在之。(28)一、正法眼藏拔書、壹冊。(29)一、天童三十四問之各目、壹冊。(30)一、達磨五葉集、壹冊。(31)一、宗門第一ノ書円悟碧岩集古頌之參話俱二在之、三冊。(32)一、永平三位二入派、壹冊、竹篋背触也、此類多シ。(33)一、永平独則等參、壹卷。(34)一、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

仏家大事、壹卷。(35)一、毫山成道參、壹卷。(36)一、十九代門鶴勳化帳ノ写、一枚。(37)一、嗣法儀式、壹枚。(38)一、守袋圍縫様切紙、壹枚。(39)一、長門龍文寺吉祥山之由来在之、徹翁和尚ヨリ送之者也、此度相渡ス。(40)一、箱入秘伝之參目録ノ通、嫡嗣二渡之。(41)一、室内事伝授之作法、青表紙折本也、光紹改之。(42)一、十八種之劍。(43)一、牌塔伝授之切紙、壹枚。(44)同多子塔前伝付ノ作法、一枚。(45)同拈奪暗之切紙、壹枚。(46)同伝法ノ作法室中秘訣、卷本也。(47)同伝法ノ作法總目録、卷本也。(48)同開山伝法ノ作法、二卷。(49)一、太白峰記、壹冊。(50)一、根脚七道ノ抄、壹冊。(51)一、嗣書三段訣、壹冊。(52)一、当山伝法ノ作法一枚、紙小結六ツ合、大把二成二ツ。(53)同三ツ合、一把二成二ツ、後住代々可見之。(54)一、古三物、三通、是無用所、

以上

右者、參禪箱之内ニ在之、ノ右者、皆是不入室中者也、ノ伝授之時可相渡之者也、ノ高郁改之、ノ此外方丈主人之左右ニ置之、ノ本校割ニ在之、ノ貞享五戊辰、ノ十月吉日、高郁ノ

(下略)

永平寺所蔵の本參・切紙の現存状況を勘案すれば、嶺巖英峻、永平寺二十九世鉄心御州(大覚仏海禪師)、同三十世智堂光紹(慧輪永明禪師)の頃に、永平寺における切紙・本參の収集と整理が積極的になされたものと考えられ、その活動は後世代語禪として批判されることもなかったと思われる。

しかしながら、上述のように更に遡及することも可能であり、以實・祚棟・祚天・祚玖の時代に一大事因縁として總括される切紙及び本参は一定の体系を有していたと思われる。師資の間に秘伝函授される切紙や本参は、嗣法と不可分の関係にあり、極めて重要なものとして位置づけられていたと思われるが、その位置づけがどのように変化していったのかを今後少しく明らかに出来ればと考える。

さて、永平寺室中において護州が相伝した切紙は、上掲の史料に見るように、伝法に関する切紙が中心であることがわかる。又、一枚(一紙)の切紙の外に、冊子化されているもの(折本、卷子本を含む)が記載されている。

永平寺には光紹智堂書写の切紙が現存しているが、それは全体の十分の一にも満たないものと思われる。光紹所伝の切紙は、以下のように

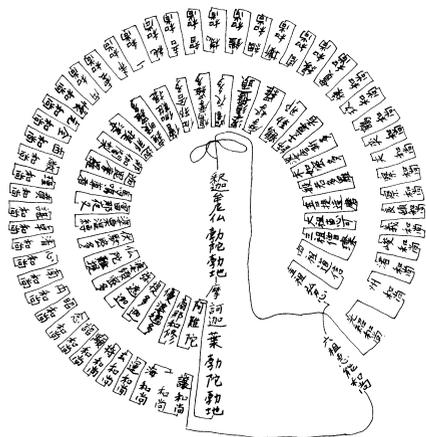
- 「No.21 道元和尚嗣書切紙」No.25 永平和尚一枚密語」No.26
- 「元和尚黒衣之由来」No.27 宗旨秘書」No.28 血脈袋之大事」No.29 山居傳戒切紙」No.51 宋西僧正記文」(以上)永平寺史料全書 禅籍編 第一卷 所収)、「No.43 一条紅線」No.45 卵形之図」(以上)永平寺史料全書 禅籍編 第二卷 所収)、「No.1 法衣傳授之時参」No.2 袈裟之切紙」No.3 卵形血脈并参禅」No.4 十智同心」No.5 州蘇村」(以上)永平寺史料全書 禅籍編 第三卷 所収)

上記十五通が永平寺に現存する。

以下に、「一条紅線」切紙を取り上げてみたい。本切紙は、二九世鉄心御州より三〇世光紹智堂へ、寛文三年(一六六三)に相伝された臨濟宗血脈に関する切紙である。

「一条紅線」

図(1) 一条紅線



臨濟命根元不斷

一条紅線牽手中、

臨濟命根元不斷、  
一条紅線牽手中、

佛祖代、嫡、相承而、吾今授<sub>レ</sub>你、伝附既畢、尽未來際、莫<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>斷絶、嫡子一人之外、不可<sub>二</sub>伝附、<sub>一</sub>、于時寛文三 庚辰年九月廿八日書之、秘訣別紙不<sub>レ</sub>言、靈山・少林・曹溪古風、連統之學、臨濟和尚、在<sub>二</sub>黃檗會中、<sub>一</sub>、行業純一也、於<sub>二</sub>六十棒下、<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>無生法忍、<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>斯、立<sub>二</sub>八種面目、汾陽和尚、有時示<sub>レ</sub>衆云、先師臨濟和尚、有<sub>二</sub>八種面目、一者本分、二者自性、三者色相、四者直示、五者爲<sub>レ</sub>人、六者機、七者賊、八者性、吾門、爲<sub>二</sub>種草者、切須如是面目具足、禪者如何<sub>一</sub>、具足<sub>二</sub>八種面目、<sub>一</sub>、便<sub>レ</sub>喝、云、參、

夫八種面目者、臨濟和尚、黃檗棒下開<sub>二</sub>正眼、<sub>一</sub>、是則、本来本分、未生已前之本身也、於<sub>二</sub>大愚脇下尋<sub>三</sub>三拳、<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>本分事、<sub>一</sub>、自性識破、歸与<sub>二</sub>一掌、<sub>一</sub>、是則、一機之発処也、從<sub>レ</sub>是<sub>二</sub>見<sub>二</sub>色相、<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>此立<sub>二</sub>本分事、<sub>一</sub>、是則、色相・本分也、色相者、五種境界也、六根・六識・六<sub>レ</sub>境界也、六根・六識・六<sub>レ</sub>境界也、是十八界、証<sub>レ</sub>是爲<sub>レ</sub>悟、不<sub>レ</sub>証<sub>二</sub>色相爲<sub>レ</sub>迷、<sub>一</sub>、爲<sub>レ</sub>人者、二<sub>レ</sub>儀門下、垂手接物、隨<sub>レ</sub>機、説<sub>レ</sub>仏説<sub>レ</sub>法、直示者、本分無一物<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>是也、機者、一<sub>レ</sub>機之発処、本分事也、是行<sub>レ</sub>棒行<sub>レ</sub>喝、把住放行、殺活自在、有時者、拈<sub>二</sub>一茎草、<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>丈六金身、<sub>一</sub>、有時者、取<sub>二</sub>丈六金身、<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>一茎草、<sub>一</sub>、是機之受<sub>レ</sub>用也、賊者、一機之動也、喚<sub>レ</sub>僧爲<sub>レ</sub>俗、喚<sub>レ</sub>俗爲<sub>レ</sub>僧、性者、本分<sub>一</sub>事也、山高海深、柳緑<sub>一</sub>、花紅、是三関、機・賊・性之内、三世俱<sub>二</sub>備、<sub>一</sub>、三世俱<sub>二</sub>陰、<sub>一</sub>、向上下、此中也、面<sub>一</sub>目受用、面目放下、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

于時寛文三庚辰歲九月廿八日、

永平廿八世御州和尚在判、

附授光紹老衲畢、

「一条紅線」切紙は、その奥書に拠れば、二九世鉄心御州より三〇世光紹智堂へ、寛文三年(一六六三)に相伝された臨濟宗血脈に関する切紙と思われるが、『永平寺史料全書』禪籍篇第一巻所載のものに限定してみると、光紹署名の切紙には、印文が「慧輪永明禪師」「光昭高風」朱印二顆と花押印が押されているのに比して、本切紙には見られないことから、案文ではないかと思われる。又、下段注釈文の二行目、四行目に訂正の跡が見られる。

永平寺に所蔵される二種の切紙目録のいずれにも、「一条紅線」切紙の名が見えており、「切紙目録」には、この外に臨濟宗血脈に関するものとして、「林際曹洞兩派血脈」などがある。

曹洞宗道元派下に相伝された切紙の中でも、嗣書・血脈伝授に関する切紙の比重は極めて重いものである。嗣法伝授の前提に参禅了畢が求められたように、切紙も同時に伝授されたものと思われ、嗣法の際に師資の間に秘密相伝される一連のものとして位置づけられていた。

嗣法に関して相伝すべき切紙がどのようなものであったかについては、永平寺二九世鉄心御州の法嗣である埼玉県寄居

町の正龍寺九世普満紹(詔)堂所伝の「伝授之儀規」(正龍寺所蔵)が参考になる。

(端裏) 伝授儀軌書

伝授之儀軌

一、師云、密室中之事作麼生、答、有之、

一、師捧<sup>テ</sup>法衣<sup>ヲ</sup>如來丈六之袈裟掛<sup>キ</sup>在弥勒千尺身、怎麼時<sup>シ</sup>仏衣長短<sup>ハ</sup>短<sup>ク</sup>、答、有之、

一、師之一指<sup>ヲ</sup>資<sup>ヲ</sup>之指<sup>ニ</sup>挾<sup>テ</sup>云、仏々祖々授示相伝、尽未來際莫<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>断絶、亦資以<sup>テ</sup>一指<sup>ヲ</sup>師挾<sup>テ</sup>云、仏々祖々相伝授乎、尽未來際不可<sup>レ</sup>妄者也、言了而跪座<sup>ス</sup>、

一、師、嗣書血脈渡<sup>シ</sup>弟子<sup>ニ</sup>、則再三頂戴而資<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>渡、資請取而再三頂戴納懐中、

一、嗣書、血脈之田相之參、勃陀勃陀之參、嗣書之參、血脈之參有之、切紙<sup>ニ</sup>明<sup>テ</sup>、

一、教授戒<sup>ヲ</sup>渡而、則戒文之參有之、

一、國王授戒之嗣書切紙<sup>ヲ</sup>渡而、則參有之、

一、龍天授戒之嗣書作法<sup>ヲ</sup>法<sup>ヲ</sup>、則參有之、

一、伝法之偈、一、合血一紙、三国流伝嗣書、一、六祖半紙、

一、宝鏡三昧渡、一、上来切紙參、一、大事渡、

一、懐敵記文、一、卵形圖、一、七仏以前血脈、一、相統切紙、

一、空塵書、一、迦文勒三説、一、正僧記、一、鉄漢之參、

此外他日渡書、烏沙巾上是青天、不可他出者也、畢竟伝授了而、師示資云、伝授底作麼生、答有之、資三拜而立、師云、後朝如何、資云、明早朝行而無住拜、師云、著語乎、答有之畢、

從永平室中直伝 詔堂拜

次に、駒澤大学図書館所蔵『室中切紙』所載の「嗣書諸目錄之切紙」を見てみたい。これは、永正十二年(一五二五)に集成されたとみられる切紙目録である。

嗣書諸目録之切紙

・梅絹二切、・國王授戒作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>菩薩戒作法<sup>長巻之紙也</sup>、・受

師命時椅子作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>戒律伝授作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>自家訓訣、龍天

授戒作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>宋西訣文<sup>一</sup>、<sup>一</sup>達磨一心戒作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>応

量器<sup>一</sup>、<sup>一</sup>仏祖正法眼蔵血脈<sup>一</sup>、<sup>一</sup>没後

授戒作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>嗣法論作法<sup>一</sup>、<sup>一</sup>空塵書<sup>三</sup>

也、永平仏祖正伝受經儀軌<sup>一</sup>、<sup>一</sup>臨濟下血脈<sup>一</sup>、<sup>一</sup>無極授<sup>一</sup>、<sup>一</sup>江

二記文<sup>長巻之紙也</sup>、<sup>一</sup>夜參之図<sup>三</sup>、<sup>一</sup>三老普所大事肝要句儀<sup>一</sup>、<sup>一</sup>嗣書

巻<sup>二</sup>、<sup>一</sup>曹洞合血本則<sup>一</sup>、<sup>一</sup>普門品相承之次第<sup>一</sup>、<sup>一</sup>三位之次第并

月両箇伝<sup>一</sup>、<sup>一</sup>如浄老師授道元和尚儀軌、夜參廿八透<sup>一</sup>、<sup>一</sup>此内透尺

新羅ノ々也、<sup>一</sup>梅絹嗣書巻<sup>二</sup>、<sup>一</sup>十八般<sup>三</sup>、<sup>一</sup>統物<sup>州</sup>、<sup>一</sup>小參之

秘訣<sup>一</sup>、<sup>一</sup>夜參出標<sup>一</sup>、<sup>一</sup>勝天如節田相承次第、<sup>一</sup>朝參計謹共<sup>一</sup>、<sup>一</sup>宗門一大

事因縁、<sup>一</sup>禪相伝附既畢、

永正十三歳<sup>丙</sup>(一五二六)極月十三日夜半

宗門一大事不遺一物正忠伝既畢、

天文二癸巳（一五三三）十月廿七日夜半、於最乘金剛寿院、

宗門一大事、不遺一物宗長伝附既畢、此、外伝後之參、敲換十  
六則最、秘極也、若流布他見贖者、隨却正法眼編却命者也、

日本天文廿年癸亥（一五五一）今寛永十歲癸卯（一六三三）九月吉

日（Gerrit）

ここに見られる「臨濟下血脈」は注目すべきものであり、

「一条紅線」切紙と内容的に連關すると思われる。

本切紙は、図の臨濟宗血脈円相と、二行に大書畫された二  
句と、更に血脈相承に關連する參禪了畢の内容と思われる八  
種面目についての注釈より構成されている。

血脈円相の図に關して言えば、『嗣書』が一重の円相であ  
るのに対して、臨濟宗の血脈が二重の円相になっていること  
が特徴である。「一条紅線」切紙と内容を同じくする臨濟宗  
血脈が相伝された例としては、神奈川県小田原市の香林寺所  
藏「濟家之血脈」が挙げられる。

「嗣書・血脈」（此下）

御大事

御開山三物

七仏偈

代々可他見

「者也」

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

「濟家之血脈」（此下）

「血脈図省略」

臨濟命根元不斷

一条紅線牽手中、

靈山・少林・曹溪古風、連続之事者、臨濟和尚、在黄檗会中、  
行業純一也、於六十棒下、得無生法忍、於此、立八種面目、汾  
陽昭禪師、有時示衆云、先師臨濟和尚、有八種面目、一者本分、  
二者自性、三者無相、四者直示、五者為人、六者機、七者賊、  
八者正、吾門為種草者、切須具足如是面目、諸禪徒如何具足面  
目云、便一喝、云、參、夫八種面目、云、臨濟和尚、黄檗棒下  
開正眼、是則本分也、未生已前本身也、於大愚脇下築三拳、得  
本分事、自性識破、（此下） 帰与一掌、一機發処也、本分也、從此  
見色相具足而、於此上本分事立、是則、色相・本分也、色相者、  
五蘊界也、六根・六識・六境界也、是十八界、証之為聖、不証  
為凡而、二義下、垂手接物、隨機說法、直示者、本来無一物処  
也、機者、一機之發処也、本分事也、以是行棒行喝、把住放行、  
殺活自在而、有時拈一茎草、作文六金身、有時拈丈六金身、為  
一茎草、是則機受用也、賊者、動一機也、具相為俗為僧、正者、  
本分事也、山高海深、柳綠華紅、是則機・賊・性之三關也、此

三関之内、三世(三)隆、向上向下、在此中、面目受用、面目放  
下、

以心伝心在之、仏祖代々相承、嫡々吾今授、(力)慶畢、尽未来際、  
莫令仏種断絶、嫡子従一人外、不可伝附云々

于時「三月吉日

付与兼慶蔵

「一条紅線」切紙と、上記の香林寺所蔵「済家之血脈」と  
を比較すると、文章の異同が見られる。又、三重県玉城町の  
広泰寺所蔵「円相八種面目切紙并臨済宗血脈」は、寛文七年  
(一六六七)二月吉辰に鉄嘴から寒察へ附授されたものであ  
り、ほぼ「一条紅線」と同じ形式と内容を持つものである。  
但し、広泰寺の切紙は、中段の二行書き部分が、以下のよう  
に、参の形式となっている点異なる。

臨済宗之一枚血脈之参也、師云、内円相、代云、清淨法身毘  
盧舍那仏、師云、中円相、代云、円満法身盧遮那仏、師云、  
外円相、代云、千百億化身釈迦牟尼仏、師云、畢竟、代云、  
總(三)有(三)此中円也、

この外、二重の円相の形式を取るものは、例えば埼玉県寄  
居町の正龍寺所蔵「臨済之門風」切紙などが挙げられる。

臨済宗所伝とされる嗣書伝授儀礼に関していえば、愛知県  
豊川市の西明寺所蔵、年記不明、村嶺所伝の「臨済宗嗣書伝  
授」の切紙が存在する。

(端裏)臨済家伝授

臨済家嗣書伝授

師示云、臨済之相統ヲ云へ、代云、元來臨済之仏法無多子、  
師云、無多子ヲ、学、師、左ノ方ニ相並テ座(三)云、多子塔前分(三)  
半座(三)、師云、臨済之血脈不断ヲ云へ、代云、仏祖証契流通、  
哀愍聽許、師云、着語ヲ、代云、臨済命根、中、師云、畢竟  
如何、代云、万盤巧妙一円空、師即渡(三)血脈(三)、資請取テ拝看(三)  
即(三)懷中(三)、九拜シテ退歩(三)、地絹之事、梅花之綾絹也、曹洞家  
与相同、嫡家計在(三)之、両家相統与請(三)之、  
豊嶽七世村嶺書之(花押)

この切紙は、臨済宗所伝の血脈伝授の参といふべきもので、  
具体的な儀礼の内容は簡略化されている。「臨済仏法無多子」  
は、高安大愚の下における臨済大悟の機縁である「師(臨済  
義玄)於言下大悟云、元來黄檗仏法無多子」(「臨済録」行録)  
という語を前提するもので、「地絹之事、梅花之綾絹也、曹  
洞宗与相同」というように、洞済の比較、乃至は曹洞宗の伝  
承の正統性を立証する根拠として、参考資料という意味で伝  
えられたものと思われる。次に紹介する「済家応身、伝授之  
作法」は、香林寺所蔵、寛永十六年(一六三九)三月二十三  
日、宗達所伝のものである。

(端裏)済家応身切紙

済家伝授之作法

濟家応真 伝授之作法

先入道場、師資共ニ応身伝授時、師ハ主位ニ、資ハ客位ニ居シテ、統松之火ヲ以テ、宗派ヲ一辺誦シテ、能ク々令見也、其後亦、一辺迦葉仏勃陀勃地、纒於転変之处ニ、得幽心旨ヲ、阿難勃陀勃地纒於転変之处ニ、得幽心之旨ヲ、如是一一誦了、曇シタ、メテ、師急度拈テ誰レニクレヨウ、資、模様ニテ身ニ給テ、師渡ク、資請取テ懐中ニ喜フ、師云、着語、資代云、啼止ヲ爲シ利栗、私云、幽ノ一字、説文ニハ、陰也、広韻ニハ、深也、於幽ノ一字ニ粉骨碎身スル者也、心ノ一字円相也、転処ハ歴劫不思儀也、師云、内ノ円相、代云、法身ヲ走、中之円相、代云、報身ヲ走、外ノ円相、代云、応身ヲ走、師云、畢竟ヲ、代云、一身即三身、三身即一身ヲ走、師云、勃陀勃地ヲ、代云、天ノ無極、勃陀ト云イ、地ノ無邊際、勃地ト云イ走、亦勃ヲ勃ト上リ、陀ヲ陀ト下テ走、師云、中ノ代云、仏祖モ不知不伝ヲ走、着語、代云、先聖モ亦不識、亦云、心ハ随テ万境ニ転、々処実能ク幽ニ、撈云、幽処作麼生、代云、良久、云、幽ノ一字、代云、妙ト拳スナリ、師云、面目ノ受用ヲ、代云、喚天為レ地、喚鹿為レ馬共僂テ走、師、面目ヲ放下、代云、背手ニシテ標然トシテ立、師、句ヲ、代云、瞎瞶不受靈山機、畢竟也、臨濟家ハ善若百則之公案、八種ノ面目、一一參得了テ以後、伝授ノ儀式如レ是也、今亦於曹洞門下ニ、尽未來際莫レ令断絶、可秘々々、是ハ建仁開山荣西和尚ヨリ永平道元伝附也、夫ヨリ以來、今到吞沢長円、如レ是伝授畢者也、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

于時寛永十六 卯季 三月廿三日 砂門宗達拜

臨濟宗の血脈(嗣書)が宗派図の形式を取るものであり、血脈伝授の前提として、「臨濟家ハ善若百則之公案、八種ノ面目、一一參得了テ以後、伝授ノ儀式如レ是也」とあるように、「善若録」・「八種面目」を中心とする公案を透過すること、即ち參禪了畢が求められる。その後に血脈伝授が行われるが、參禪了畢と血脈伝授は、ほぼ一体のものとして印可証明の意味に解してよいように思われる。

曹洞宗所伝の切紙には、「国皇授戒作法」に見られるように、国皇・天皇に対する授戒作法が用意されているが、国皇に対して附与される血脈(嗣書)の形式も成立していたとされる。正龍寺所蔵、格叟寅越所伝の「国王血脈」(仮題)の端裏に「授奉」国皇嗣書、仏祖正伝菩薩戒血脈」とあることによつて知られる。血脈を嗣書と見なして授与する国王付授血脈の形式は、臨濟宗の血脈・嗣書伝授の切紙に極めて類似する。血脈下段に記された「臨濟八種面目」を内容とする文章はほぼ同一のものと言つてよい

(端裏)「授奉」国皇嗣書

仏祖正伝菩薩戒血脈

(血脈図省略)

靈山・少林・曹溪之古風連続之學、臨濟和尚、在衆会中、行業純一也、於六十棒下得無生法忍、於斯、立八種面目、汾陽昭禪

師、有時示衆曰、先師臨濟和尚有八種面目、一者本分、二者自性、三者色相、四者直示、五者為人、六者機、七者賊、八者止、吾門為種草者、切須如是面目具足、諸禪德、如何是足面目、便一喝云、參、夫八種面目者、臨濟和尚、黃檗禪下開正眼、是則本分也、未生已前本身也、於大愚脇下築三拳、得本分事、自性識破、歸來師与一掌、則一機之発所也、本分也、從此色相具足而、於此上本分事得、是則色相本分也、色相者、五蘊界也、六根六識、接物隨機說法、直示者、本來無一物処、無一法是直示也、機者、一機之六境界也、是三六十八界曰、証是為聖、是不證為凡、為人者、二儀門下垂手、発処本分事也、棒行喝行、把住放行、殺活自在而、有時拈一茎草、為丈六金身、有時取丈六金身、為一茎草、是則機受用也、賊者、一機動、喚僧為賊、喚賊為僧、正者、本分事也、山高海深、柳緑花紅、是三関曰機賊、正内三世俱險、向上向下、在此中也、面目受用、面目於下、口伝在之、仏祖代々嫡々相承而、吾今授貫越伝附既畢、尽未來際莫令断絶、嫡子一人之外、不可伝附之、面目秘訣別可參、

伝授儀式為之口伝示貫越

曹洞・臨濟の僧侶において参禅了畢が嗣書血脈伝授の要件であつたのと同じように、居士嗣書の授与には居士の参禅が前提とされていた。事実、そのための参禅話頭目録も現存することを勘案すれば、「臨濟八種面目」は、国皇嗣書伝授資格を得る為の、参禅の内容であつたと推定される。印可の参

と称される二句の典故は、おそらく「人天眼目」と思われるが、室町時代後期以降、曹洞宗道元派下では、「人天眼目」の講義が盛んに行われ、多くの注釈書が抄出されてきた。その代表的なものとして川僧慧済の「人天眼目抄」が挙げられるが、今その該当箇所の注釈部分を引用してみたい。「臨濟八種面目」(「八境界」とも呼称される)とは、臨濟が黄檗希運の会下で大悟し、その悟りの内容を「八種面目」として定立したと言ふ。後文に拠れば、汾陽の示衆の語に、先師臨濟和尚に、八種面目が有つたとする。「八種面目」(八境界ともいう)は、臨濟宗における公案解釈、或いは公案体系の基本であり、例えば、林下大徳寺派(大応派徹翁派下)では、語録抄や密参録において頻用される術語である。更に、「八境界」は一つの公案として、「百則密参録」<sup>(10)</sup>「百五十則密参録」の中に見出すことができる。

例えば、大徳寺派の密参録である滋賀県大津市西教寺所蔵『本来面目』には、以下のように見える。

第廿九、本分、

下語、遍界不<sub>テ</sub>曾<sub>テ</sub>蔵<sub>マ</sub>、又吹毛劍、

弁<sub>ニ</sub>、有無<sub>ニ</sub>ワタラス天下<sub>ノ</sub>間充滿<sub>シテ</sub>アル物<sub>カ</sub>本分<sub>テ</sub>候、此故<sub>ニ</sub>遍界

不曾<sub>テ</sub>蔵<sub>マ</sub>、下語シタソ、鉄団樂<sub>ヲ</sub>ハ、本分打<sub>ト</sub>碎スト云心テシ

タ下語ソ、鉄黒<sub>キ</sub>色<sub>ル</sub>ホトニ、物ニソマヌソ、本分物ニソマヌ

ソ、此故<sub>ニ</sub>、鉄<sub>ハ</sub>本分<sub>ニ</sub>用タソ、吹毛劍<sub>ハ</sub>、本分<sub>ノ</sub>名ソ、

第卅、現成

一、現成

下語、月白ツキシロ風清フウキヨク

弁、月白ツキシロ風清フウキヨク上ウヘ、道里ミチナイソ、自然シズカニナル処カ、現成マダラ

柳ヤナギ緑花キナンド紅ベニト云イハキ、自然シズカニナカタチソ、柳ヤナギミトリニ見、花ハナ紅ベニニミユ

ルカ、マツスクソ、是コトカ、現成マダラゾ、

第卅一、色相

一、色相

耳朶ミミ兩片皮、

弁ヒラ、生ナマ得來トクマ、眼耳鼻舌身意メミミハシゴナスワサカ、色相イロサマテ走

第卅二、截断

一、截断

下語、斬釘截鉄

弁、色相イロサマト云物モノハ、大イタツラ物トミキツテ、吹毛劍フキウケンヲ以モテ、釘鉄クワシヲ

キル如ノククスルル、処トコロ、截断キリテ走、

第卅三、直指

一、直指

下語、車不横推

弁ヒラ、物マツスクニイハアラワスカ、直指也、車クルマ横ヨコニ推オシヌ物也、

マツスク也、月ツキハ在アリ天アメニ水ミヅハ在アリ瓶ビンニ、月ツキ天アメニアルソ、水ミヅ瓶ビンニアル

ソト、サシテミセ又マタカ、直指也、

第卅四、為人

一、為人

下語、平生心膽向人傾

禅宗チンジュウト云者モノハ、平生截断シズカニ用ルソ、是平生シズカニノ心膽也、向人傾ムカヒニカガムト云処トコロハ、

截断シズカニラスベシソトミヤウソ、為人トクニシタソ、

无孔ムクハ鉄鎚テ當面マシメ擲

無孔鉄鎚ムクハテト、アナノナキカナツチ也、用モトメタトヌ物也、是コトヲト

ヘタ也、其無孔鉄鎚ムクハテ面オモテ擲マシメテミセタ処、本分モトバシヲ為人トクニシタソ、

又、百花春到為誰開

是コトハ、春ハルハ誰タレカ開ヒラケトイワ子トモ、百花ガ開ソ、ト為人トクニシタソ、

是コトハ現成マダラ為人也、爰コト、弁ヒラハ、一句イツク因縁インエンヲ御示ミサシアリテ、手ヲタレテ

御スクイアルカ、為人トクニテ候、

第卅五、賊

一、賊

下語、作レ賊ト人心ココロ虚ムソハル

又、牡丹花ボタン下シタノ睡猫ネコ見ミ

弁、上ウヘニハ何ナニナフシテ、底ソコニ人ヒトタラスヤウナ事コトカ、賊トクニテ候、虚言ウソ

ノ事コト、賊トクニト云物モノハ、心ココロミナ虚ムソナ物モノ、イツハリハカリソ、牡丹花ボタン

下シタニ睡猫ネコ見ミハ、蝶テフヲ取トルテクワント云云イハソ、真実マコトノ睡ネニテハナシ、賊トクニ

云ハ、此ヤウナル事ソ、

第卅六、機

一、機

下語、錦ニホ包フミニ毒石ドクイシヲ

又、黒花、猫児面門斑ヲリ

弁 見分<sup>ケ</sup>カタキ処<sup>マ</sup>、禪宗ノ機<sup>ヲ</sup>用テ候、白<sup>キ</sup>カ黒<sup>キ</sup>カハ、見分<sup>テ</sup>ヨ、ケレトモ、マタラナハ、見分難<sup>シ</sup>ソ、錦<sup>ハ</sup>ケツコウナ物<sup>シ</sup>ジャニ、中<sup>ニ</sup>特石<sup>ヲ</sup>ツツミタハ、ヨソロシキ、見分難<sup>キ</sup>心<sup>ソ</sup>、

抄曰、八境界ノ中ニ肝要<sup>ニ</sup>用ル境界アリ、取出<sup>テ</sup>弁<sup>ヲ</sup>ヨ、弁、色相<sup>ヲ</sup>肝要<sup>ト</sup>用フスルテ候、其子細<sup>ハ</sup>、本分<sup>・</sup>現成<sup>・</sup>截断<sup>、</sup>直指<sup>・</sup>為人<sup>、</sup>賊<sup>・</sup>機<sup>ト</sup>云モ、皆色相<sup>ノ</sup>上<sup>リ</sup>ナリ、色相<sup>ヲ</sup>サヘ能用レハ、心法<sup>モ</sup>ヨイソ、色相<sup>ヲ</sup>ワロク用者<sup>ハ</sup>、心法<sup>モ</sup>ワルイソ、印可<sup>ノ</sup>印証<sup>ヲ</sup>取<sup>テ</sup>云トモ、此色相<sup>ヲ</sup>能受用<sup>シ</sup>タル人<sup>ニ</sup>アル事<sup>ソ</sup>、色相<sup>ヲ</sup>アシク用イタ者<sup>ニ</sup>ハ、印可<sup>モ</sup>ナイソ、然<sup>ハ</sup>、千七百則<sup>ノ</sup>公案<sup>モ</sup>無<sup>ニ</sup>ナルソ、爰<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>、八境界中<sup>ニ</sup>色相<sup>ヲ</sup>肝要<sup>ニ</sup>用也<sup>ト</sup>云ヘリ、臨濟云、食物<sup>ニ</sup>ハ人物<sup>ヲ</sup>肝要<sup>ト</sup>イカナル珍物<sup>モ</sup>美食<sup>モ</sup>、ケカレタ器物<sup>ニ</sup>ハ入タラハ、味カアルマイソ、麴草<sup>ヲ</sup>食物<sup>モ</sup>ヨキ器物<sup>ニ</sup>ハ入タラハ、風味カヨカラウト也、然間、色相<sup>ヲ</sup>能用得タル人<sup>ハ</sup>、心清<sup>ヨ</sup>イホトニ、色相<sup>ヲ</sup>アルヘキヤウニラサルルガ大事也、能々工夫可有、

(26ウ) (29ウ)

林下曹洞宗道元派下において、「臨濟八種面目」は、切紙のみならず、本参等においても参究されている。佐賀県武雄市円応寺所蔵『参禅』(石屋派本参。円応寺八世華嶽宗藝所持)に以下のように見える。

臨濟八種面目、師云、機<sup>ヲ</sup>代、活機<sup>ヲ</sup>走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、午日打<sup>ニ</sup>三更<sup>ヲ</sup>。師云、賊<sup>ヲ</sup>代、赤手<sup>ヲ</sup>門庭<sup>ヲ</sup>立走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、

驢糞<sup>ヲ</sup>達人<sup>ノ</sup>換眼珠、師云、性<sup>ヲ</sup>代、烏<sup>ノ</sup>黒鷲<sup>ハ</sup>白<sup>ク</sup>走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、山高海深、師云、本分<sup>ヲ</sup>代、赤肉<sup>ヲ</sup>走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、鹿<sup>ノ</sup>無縫罅、師云、直示<sup>ヲ</sup>代、末直<sup>ヲ</sup>ニ云テ走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、眼横鼻直、師云、為人<sup>ヲ</sup>代、夫レ<sup>ノ</sup>成ツテ走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、逢驢作驢、逢馬作馬、師云、自性<sup>ヲ</sup>代、千代若<sup>ク</sup>走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、了々常知、師云、色相<sup>ヲ</sup>代、柳在緑花在紅<sup>ク</sup>走、師云、句<sup>ヲ</sup>代、庭前紫面<sup>ニ</sup>衣、

「八種面目(八境界)」の各項目については、『八境界註』(上下二巻、明曆二年 一六五六 刊)が詳しい。

次に、「印形之図」切紙を取り上げてみたい。本切紙は、御州から光紹が相伝した、太陽誓玄が浮山法遠に示したとされる切紙であり、混沌未分から天地が生成する次第になぞらえて三段階の下語によって解釈する。

印形之図(師方)

大師告遠和尚云、知印<sup>(師方)</sup>形<sup>(手)</sup>本分<sup>(手)</sup>時無、遠則云、如何是印<sup>(師方)</sup>形<sup>(手)</sup>未分<sup>(手)</sup>時、師以<sup>(師方)</sup>手作<sup>(手)</sup>形<sup>(手)</sup>示<sup>(手)</sup>、問、印<sup>(師方)</sup>形<sup>(手)</sup>分破<sup>(手)</sup>作<sup>(手)</sup>天<sup>(手)</sup>時如何、師以<sup>(師方)</sup>手作<sup>(手)</sup>形<sup>(手)</sup>示<sup>(手)</sup>、問、印<sup>(師方)</sup>形<sup>(手)</sup>分破<sup>(手)</sup>作<sup>(手)</sup>地<sup>(手)</sup>時如何、師以<sup>(師方)</sup>手作<sup>(手)</sup>形<sup>(手)</sup>示<sup>(手)</sup>、問、如何<sup>(手)</sup>是印<sup>(師方)</sup>形<sup>(手)</sup>未分<sup>(手)</sup>性、師時則默<sup>(手)</sup>示<sup>(手)</sup>、問、如何<sup>(手)</sup>是天<sup>(手)</sup>形<sup>(手)</sup>之性、師則出<sup>(師方)</sup>陰<sup>(手)</sup>息<sup>(手)</sup>、遠忽<sup>(手)</sup>大悟<sup>(手)</sup>、礼<sup>(手)</sup>謝<sup>(手)</sup>去、後某甲遺書<sup>(師方)</sup>印<sup>(手)</sup>形<sup>(手)</sup>圖<sup>(師方)</sup>并<sup>(手)</sup>圖<sup>(手)</sup>續<sup>(手)</sup>、以<sup>(師方)</sup>作<sup>(手)</sup>宗<sup>(手)</sup>門<sup>(手)</sup>一<sup>(手)</sup>大<sup>(手)</sup>事<sup>(手)</sup>因<sup>(手)</sup>緣<sup>(手)</sup>也、謂<sup>(手)</sup>之<sup>(手)</sup>三<sup>(手)</sup>固<sup>(手)</sup>劍<sup>(手)</sup>、

又謂之「談訣」也、又謂之「三世」血脈、又謂之「三寶論」、  
 又謂之「三生服」、夫「印形之葛藤」者、天之陽氣下、地之陰  
 氣合而、自生「動搖之氣」、自生「万物之体」、殊有「印生」  
 胎生・湿生・化生之四生、各自具「五蘊」、生「六根」矣、愚  
 而迷故、披毛戴角而、墮「起滅之深坑」、輪迴「三界」、智而  
 悟故、教外別伝而、出生「死窠臼」、遊「履十方」、皆是「天風  
 地風虫之所作也」、何故、威音如來、昔坐「斷印形中」、未  
 曾出「天地之生」、此時、諸仏不知「諸仏」、菩薩不見「菩薩」、  
 謂之「不見不知時」、如來出世時、迴光返照而、深省「本身之  
 相」、得「得」為「三界導師」、曾「曾」山会上、拈「二枝之芳」而、  
 引「得」頭陀之微笑、後「後」正法流「布天下」、皆是「印形分破」、  
 以來之妙道也、若問「印形未分時」、無「一法」、吾師「明安大師」、  
 深省「本身之相」、權「立」此「三種圖續」、以附「某甲遠」、々  
 信受奉行畢、諸方禪流、莫疑此「一大事因緣」、可秘々々、某  
 甲遠書写、

古語下語

(天) (地)

石女懐胎 父母所生眼 悉見三千界  
 長夜漫々 一夜落花雨 滿城流水香

鳥栖無影樹 花開不萌枝 花落不萌枝

死 生 死

善惡不二 善 惡

巖山云 夜半杵煤 スナリ 明月 芦花

後 大震云 蟄杜レ戸 一声雷

前 唯我独尊 天上 天下

通句云 崑崙入海無消息 文殊騎獅子 普賢騎象

德雲比丘不レ下山 別山 相見

維摩詰 釈迦 阿難

紫極宮中鳥 銀河波底 百億分

鄂州大陽開山明安大師(第2)印形之図

印形未分混沌(第1)

(天 釋也安也  
釋也清也)

地謂之天地間氣也  
陰也・海也・塵也

虫不動風之正休

凡分作「天少動風

虫作地也大動風

毘盧界

光明台

発心土

宝印台

日月星宿

修行土

万物懐胎

雲雨国

出生土

涅槃城

寂光土

汚穢国

極楽

天童道之字可用

地獄

仏

菩薩

衆生

涅槃門

菩提門

煩惱海

鉄

金

銀

開田地

野馬

陰裡

三

三

三

夜半

正明

不露

天曉

王

君

臣

父

母

子

智

知

事

仏眼伝之

法眼伝之

凡眼伝之

七仏以来嫡々相承之曹洞之秘法也

御州在判  
附与光紹老衲

「(第2)印形之図」切紙は「切紙目録」に「一、卵形之血脈并参  
禅有之、三通」とあり、その三通の中の一と推定される。

やはり光紹が相伝した切紙の一つに、「印形血脈並參禪」があり、本文中に「明安大師印形図」の語が記されている。さて、本切紙の名称であるが、端裏うわ書に「印形図」とあり、本文中においても「印形」として記されているが、他の切紙目録、本切紙以前に成立した切紙によれば、「卵形図」「切紙」として相伝されてきている。内容からも、「卵形図」の名称の方が妥当であると思われる。「印形図」としたのは、光紹写誤によるものなのか、その元となった御州の切紙が既に誤っていたのかは、明確にはし得ないが、以下の用例から光紹の写誤の可能性がある（以下「卵形之図」切紙で呼称を統一する）。

「卵形之図」切紙は、詳しくは「鄂州大陽開山明安大師卵形之図」といい、伝授に関わる切紙の一つとして相伝されてきた。上掲の御州の法嗣である正龍寺九世普満紹（詔）堂所伝の「伝授之儀規」に拠れば、血脈・嗣書伝授に関する儀軌及びその意味づけを行う一連の切紙の一つに、「卵形之図」切紙は位置づけられている。

また、神奈川県小田原市香林寺所蔵「大樹派本參之次第」においては、

大樹派本參之次第

点之分八參禪不具、不書ナリ、

死活当頭、大死底

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

万機休罷 竹篋背籠

香巖樹上 何レモ入派也

爰ニテ仏界魔界之誦詠在之、

活句不承当

自己転処

自己不点

自己目前一致

自己淵源

爰ニ鴻山水牯牛引也、

智不到之分

智不到之所

智不到淵底

道吾智不到

爰ニ引ベシ、

異句之弁

智不到点処

智不到不転

没蹤跡

那辺之分

臨濟家ニハ在リ、

那辺承当

那辺透過

阿誰勤弁

位裡点側

退得那辺

行履

那時之三人

了庵・大綱・無極之拳派ハ、別々也

位裡双対

伝授之參

唯以一大事因縁故出現於世、

卵形未分図

・俱低一指

忠国師一円相

・世尊拈花

- ・黄龍拳頭
- ・雪峰火焰裡
- ・南院古殿重興
- ・血脈之參

傳授了後之參八

殊ニ龍天之真像可肝要、以秘スル為相

看經

此外教授戒文之參在之、

于時寬永丙寅年

初春五日

附与林渚耆衲畢

高林九世長林(花押)

とあり、「卵形未分図」は、三位の本參を了畢して後、伝授

時の參の一つに位置づけられている。また、切紙が別に存在

することと快庵派の參であることを注記している。

室内秘書として相伝されてきたと思われるものに、岐阜県

関市龍泰寺所蔵『大陽明安大師十八般妙語』がある。本書に

は「郢州大陽開山明安大師卵形圖」が合冊されている。その

奥書には、

龍天護法

〆奉請招宝七郎深々守護仏法繁昌所也、

白山妙理

前龍泰六世示龍門正桃伝附畢、

首元龜參季三十一林鐘初六日、

とあり、本書が元龜三年(一五七二)に枝深正孫(?)一五

七六)から大洞正桃(?)一六〇五)へと伝附されたことが

わかる。同寺所蔵『無極由緒一覽記』の「第二十二、濃州竜

泰寺由緒証拠之品々」には、

一、警玄和尚託浮山遠公附投子青和尚十八般之妙語、道楷和尚

編集之物一卷、右無極派一子相承、代々嫡子一人伝附之法物也、

華叟一人伝焉、餘人無伝授、云云、

(47オウ)

とあり、『十八般妙語』が無極派の嫡子である華叟一人に相

伝されたとする。また住持職にある者の龜鑑となるべき条項

を記した『住職肝銘記』にも、

郢州大陽開山明安大師一十八般妙語勝句秘訣図、

先師梁山緣觀和尚付ニ某甲警玄ニ也、吾又待ニ法器ヲ者也、汝能ク

護持シテ、応テ授ク青鷗子ニ、吾宗至レ渠ニ、挑テ悟火ニ而伝ヘ無尽灯ニ去リ

在リ、以テ頂相・皮履・布直織・十八般妙語寄ル汝ニ、須レ待テ

渠カ来儀ヲ笑ハ、偶ニ云、

陽山頭ノ草、依テ君ニ待テ煨燉ヲ、

異苗繁茂ノ処、密々固ク靈根ヲ、

又云、得法ノ者、潛レ衆ニ二十年ニシテ、応宣ニ揚法ヲ、遠和尚受ニ此等、

伝書ヲ作礼而去、此書全冊唯在ニ濃之電泰ノ室中ニ、

(41オウ)

とあり、『十八般妙語』が龍泰寺室内の師資相承の書であったことがわかる。元龜三年の書写本が「卵形図」を含むものであったことを勘案すれば、両者共に華叟派の相伝書として位置づけられるのではないかと思う。

「卵形之図」切紙の内容について見てみると、最初に大陽警玄とその法を付囑された浮山法遠との問答が全体の序となっている。図の前半は、「古徳下語」として、混沌未分の状態から陰陽二氣が生じ、やがて天地が生成する次第に併せて、古人の下語を取り上げており、峨山韶碩、通幻寂靈、大源宗真の名が見える。後半が太陽警玄が示された「卵形之図」に相当すると思われる。しかしながら、この構成は、他のより古い切紙史料や本参などとは次第順序が異なる。

ここでは、最初に大陽が説示したとされる「卵形図」があり、次に大陽と浮山法遠の問答並びに別名などの本文が続き、三番目にこれに対する古人の解釈（下語）が図示され、最後に相伝の系譜が示されるといような構成になっている。また、「卵形図」「古徳下語」は、「三箇剣」「三談訣」「三世血脈」「三宝論」「三生服」の別名が示すように三段階の構成である。面山瑞方は、『洞上室内断紙棟非私記』において、この切紙について以下のように記している。

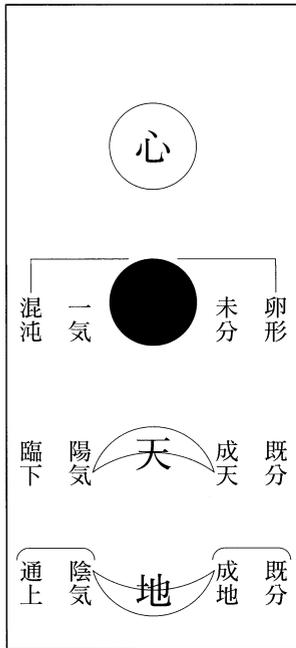
大陽卵形図断紙

面山謂、古来或名<sup>二</sup>之曹洞夜参血脈<sup>一</sup>、或名<sup>三</sup>三世血脈<sup>二</sup>、或名<sup>三</sup>

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(一)飯塚)

三箇剣<sup>一</sup>、又名<sup>二</sup>三段訣<sup>一</sup>、又名<sup>三</sup>三宝輪<sup>二</sup>、又名<sup>三</sup>三生眼<sup>一</sup>、不是大陽明安之所<sup>レ</sup>作、而日本洞下代語僧、鷹解儒家大極図<sup>一</sup>者所<sup>レ</sup>私製<sup>二</sup>也、但是俗氣不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>絶、於<sup>三</sup>宗門<sup>一</sup>直須<sup>二</sup>棟非<sup>一</sup>、面山の説は、これ以降の切紙の相伝に關して、影響力を持っていたと思われる。駒澤大学図書館所蔵『百二十通切紙』(群馬県子持村の双林寺所伝、文化八年 一八一 東天梅溪から慧光へ伝授)所収の「卵形図」切紙には、図は簡略化されたものが提示されており、その注記は以下のようなものである。

図(2) 卵形図



或家以<sup>レ</sup>此図<sup>一</sup>名<sup>二</sup>之曹洞夜参<sup>一</sup>血脈<sup>一</sup>、或<sup>レ</sup>名<sup>三</sup>三世<sup>一</sup>血脈<sup>一</sup>、或名<sup>二</sup>三箇<sup>一</sup>剣<sup>一</sup>、又名<sup>二</sup>三談訣<sup>一</sup>、又名<sup>三</sup>三宝輪<sup>一</sup>、又名<sup>三</sup>三生眼<sup>一</sup>、作<sup>二</sup>

為<sup>シテ</sup>種々<sup>ニ</sup>胡說<sup>ヲ</sup>、為<sup>シテ</sup>大陽明安禪師<sup>ノ</sup>所作<sup>ト</sup>、并<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>後人<sup>ノ</sup>私說、  
全<sup>ク</sup>非<sup>ズ</sup>家伝<sup>ニ</sup>、決<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>信用<sup>ニ</sup>也、是<sup>レ</sup>借<sup>リ</sup>天地<sup>ノ</sup>次第<sup>ヲ</sup>、顯<sup>ス</sup>心法<sup>ノ</sup>  
實通<sup>ニ</sup>者也、  
右嫡々相承到今、

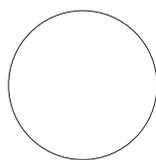
先に述べたように、香林寺には、この「卵形之図」と同内容の切紙が現存している。香林寺本では、端裏に「夜参之切紙、附与玄虎」とあり、文中に「宗門之一大事因縁、洞家夜参之血脈」とあることから、夜参において参すべきものという位置づけがあったと思われる。ちなみに、能登永光寺(石川県羽咋市)に所蔵されている『截紙之目錄』(永光寺輪住四百七十九世万山林松書写)にも、「卵形之図夜参ノ血脈トモ也」とある。永光寺所蔵切紙については、次稿において考察する予定である。また永平寺蔵の「卵形之図」切紙に「七仏以来嫡々相承之曹洞之秘法」とある部分が、香林寺本では実際の相伝の系譜となっており、相伝書としての重要性が強調されている。

(上略)

宗門之一大事因縁洞家夜参之血脈

寂曇和尚 惠明和尚 明宗和尚 宗能和尚  
宗稜和尚 明宗和尚 乘慶和尚 珪梁和尚  
新玄虎 嫡々相承畢者也

人 人 具 足 底



筒 筒 円 成 底

此円相者以應量器可輪之、故者、応量無窮、仏心無始無終、  
本師釈迦牟尼仏陀附屬迦葉、自第一坐迦葉嫡々相承而到吾、  
如今宗本伝附既畢也、

日本永祿二未己年二月晦日

前永平津英珪梁 玄虎代々伝附了  
于時天正元年 前永平

香林中興乘方野衲

安叟派本源嫡子伝者也

他見凡 仏罰・法罰相当ル者也

更に、愛知県豊川市の西明寺所蔵『鄂州大陽開山明安大師  
卵形三箇』(鉄山天牛、寛永二十一年 一六四四 写)では、  
特に三位説による解釈が強調されている。

(上略)

入処

徹処

転処

智不到之自己

自己之智不到

自己之那边

那時之自己

那時之智不到

那边之那边

入処トハ、最初デ、案山点頭也、徹処トハ、自己デハ法眼宗也、  
転処トハ、自己デ寛家也、入処ト云ハ、那返ノ入派也、徹処ト

ハ、那返、主中主也、転処トハ、那边退得道裡行裏、  
(手方)

(中略)

于時寛永竜集甲甲 年霜月吉日

天牛拝

代々可改者也 附与牛薫長老

上述したように、大陽警玄に擬せられる「卵形図」に別種  
のものがある。光紹が相伝した「卵形血脉并参禅」がそれで  
あり、今その参禅(参の部分)を以下に掲げる。

印形血脉(海真つ并の書)参禅

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

仏祖正伝法(朱印文、仏法傳書) 血脉伝授之日光龍

(図省略)

印形図

私云、中之図五色三書也

明安大師(師カ)印形図 師云、此相ヲ云へ、(、龍、師ノ前二到テ、  
手ヲクンデ坐ス、師云、何ントテ、龍云、母之胎内ニ籠テ走、  
師云、夜参ニ合テ、一句ヲ云へ、龍云、此時、七夜ノ体テ走、  
師云、何ンソ、龍云、龍云、鉄境界テ走、師云、何ントテ、竜  
云、本性ニスリ目ノ当ラヌ自己テ走、師云、)此相ヲ云へ、竜  
云、六相六識ノ形出テ走、師云、何ントテ、龍云、飯ニ飯ヲ添  
へテ、満腹テ走、師云、夜参ニ合テ云へ、竜云、銀テ走、師云、  
何ントテ、龍云、一色不足無イ事テ走、師云、何ントテ、竜云、  
此時、一國將軍ノ性ヲ受ケ、太平テ走、師云、此僧ヲ云へ、虫、  
竜良久ス、師云、何ントテ、竜云、此胎内ノ主相テ走、師云、  
風動ノ動キ羊ヲ、竜云、此主ガ、動テ走、師云、夜参ニ合テ云  
へ、代云、那边テ走、師云、何ントテ、竜云、禅人未レ顯主テ  
走、師云、畢竟ヲ、立テ云、異中異、主テ走、師云、此相ヲ、  
大極已前テ走、師云、夜参ニ合テ云へ、代云、師前二到テ、禅  
衣ヲカブツテ坐ス、師云、何ントテ、竜云、此時、空却已前  
テ走、師云、●此相ヲ云へ、天八白雲ト共ニ曉ントス、師云、  
何ントテ、竜云、清苦練行シテ、此事ヲ明メントス、師云、●

此相ヲ云へ、立云、偏正ノ作息テ走、師云、夜參二合テ云へ、代云、十字街頭二尺八ヲ吹ク、師云、此相ヲ、竜云、天利二叶イ、人心二叶テ走、師云、夜參二合テ云へ、竜云、根本事上位テ走、師云、此相ヲ、代云、豎一点横一点テ走、師云、何ントテ、竜云、豎三窮三際、横亘十方走、師云、境界ヲ、代、礼拜ス、師云、此相ヲ、竜云、本遠功ノ手段テ走、師云、(天地)、此相ヲ、竜云、父母兩位テ走、師云、夜參二合テ云へ、三昧王三昧テ走、師云、与麼時如何ン、竜、師卜頭ヲ合テ坐ス、師云、何ントテ、竜云、天地同根、万物一体テ走、已上、

伝附既筆、

(朱印文「光紹高風」)

(朱印白文「慧輪永明禪師」) 版刻花押

「印形血脈并參禪」切紙は、端裏つわ書に「印形血脈并參禪」とあり、本文中においても「印形」として記されているが、他の切紙目録、本切紙以前に成立した切紙によれば、「卵形図」切紙として相伝されてきている。内容からも、「卵形」の名称の方が妥当であると思われる。「印形」としたのは、光紹写誤によるものなのか、その元となった御州の切紙が既に誤っていたのかは、明確にはし得ないが、光紹の写誤の可能性がある(以下「卵形」で呼称を統一する)。

前述の「卵形之図」切紙は、詳しくは「鄂州大陽開山明安

大師卵形之図」といい、伝授に関わる切紙の一つとして相伝されてきた。鉄心御州の法嗣である正龍寺九世普満紹(詔)堂所伝の「伝授之儀規」によれば、血脈・嗣書伝授に関する儀軌及びその意味づけを行う一連の切紙の一つとして位置づけられている。同様に神奈川県香林寺所蔵「大樹派本参之次第」によれば、「卵形未分図」とあり、三位の本参を了畢した後、伝授時の参の一つに位置づけられており、更に切紙が別に存在することと快庵派の参であることを注記している。

「卵形血脈并參禪」切紙は、上半分に描かれた「卵形図」と下半分に描かれた参(問答)とにより構成されている。「卵形図」は、日・月・星の星辰、地水火風の四大、男・女の両性、生・死等を配した図である。切紙の呼称の一つである「血脈」は省略されており、「仏祖正伝法 血脈伝授之日光龍」とのみ記されている。また、「私云、中之図五色<sup>三才書</sup>」とあるように、「卵形図」が本来彩色された図であることがわかる。

下半分の参の内容は、前半と後半とに大別され、前半が三位説による解釈であり、後半が五位説によるそれである。前半の三位説による解釈では、一つには、〇、母胎内のあること、鉄の境界、自己を謂い、二つには、〇、六相六識の形相を顕すこと、銀の境界、將軍位(智不到力)を、三には、胎内の主相、那辺、禪人未顕の主、異中異の主を謂つ。後半

の五位説は、團児と代語との関係及びその典拠については、未詳とせざるを得ない。

「法衣伝授時之参」切紙は、光紹が相伝した、法衣伝授の意味問答体の参で注釈する切紙である。

(朱印)、「法衣伝授時参」

### 法衣伝授之時参

(朱印)、「仏法僧宝」

夫以、仏々祖々指深之法衣ト云ハ、譬ハ大師釈迦、迦葉法衣御渡給事、此法衣ト云ハ、八万四千条ノ御袈裟也、此ノ御袈裟ヲ持テ、迦葉給時、迦葉涙ヲ流シ、名曰「発露涕泣」、彼御袈裟者、在ニ母胎内時、此御袈裟裏ハ八万四千毛敷ニ、骨肉共ニ、一毛不レ漏、此御袈裟ノ内ニ、被ニ裏蓋、不レ得レ犯ニ塵一法ニ、是私ニ名曰「衣衲」、又此御袈裟、曰「仏祖不伝衣」、又曰「九条」也、是即母未生已前本来無縫之直衣也、生来以前、紫極宮中ト云モ也是、烏抱<sub>ニ</sub>卵<sub>ニ</sub>是也、在<sub>ニ</sub>此中<sub>ニ</sub>、纒借水火風空、又木火土金水ヲ具足スル者也、烏ストハ<sub>ニ</sub>云紫極宮中ノ主也、吾宗之密語密処也、人々須参得<sub>テ</sub>法衣頂戴者也、師、学人<sub>ニ</sub>問云、倒騎<sub>ニ</sub>仏殿出<sub>ニ</sub>山門時如何、学人合秘<sub>シテ</sub>自可<sub>ニ</sub>参得<sub>ニ</sub>、二問<sub>ニ</sub>一答、口伝在リ、ウガノ一声也、又問、倒騎<sub>ニ</sub>仏殿、意旨如何、学人欲出来<sub>セント</sub>時、此内<sub>ニ</sub>転却時節也、師云、山門トハ、出生スル処ノ門也、是名曰<sub>ニ</sub>玉闕<sub>ニ</sub>、門出テ後如何、学人云、ト云ハ、法堂上草深一丈、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

又問、意旨如何、学云、「哆々呶々、師云、法堂産出スル生土也、又云、草深一丈ト云ハ、産時展<sub>ニ</sub>両手<sub>ニ</sub>、何物ニテモル時キ啼<sub>ク</sub>、是ヲ云也、此声響天地也、是清淨本然、無相之説法ト云也、又無相之杖払也、故<sub>ニ</sub>生土<sub>ニ</sub>名曰法堂、今号<sub>ニ</sub>法衣<sub>ニ</sub>事、是<sub>ヲ</sub>表也、然<sub>レ</sub>問、法衣<sub>ヲ</sub>染紫色<sub>ニ</sub>、可<sub>レ</sub>塔者也、

右曹洞秘密之参話也、是曰<sub>ニ</sub>伝授<sub>ニ</sub>参<sub>ニ</sub>也、

山門之話参得<sub>シ</sub>羊、別在、能々可<sub>レ</sub>参得<sub>ニ</sub>云々、

師云、看々山門騎<sub>ニ</sub>仏殿、從<sub>ニ</sub>道<sub>ニ</sub>裡<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>、速<sub>ニ</sub>道<sub>ニ</sub>、云々

(朱印)、「永明叟(花押版刻)」

この切紙は、永平寺所蔵『切紙目録』(『永平寺史料全書』禅籍編第二巻No.39)に、「一、法伝授参」と見える切紙に相当する。また、面山瑞方が著した『洞上室内断紙揀非私記』所収「永平寺室中断紙目録並引」によれば、「法衣伝授参話」「法衣伝授大事」という二種の切紙が永平寺に所蔵されていたことがわかる。駒澤大学図書館所蔵『室中切紙臚写』(請求番号「一七二一一七」)にも、「山門法衣之大事/法衣伝授時参話」として、本切紙とほぼ同内容のものが所載されている。

本切紙は、他の智堂光紹所伝の切紙同様、縦長の細い短冊形に折り込まれ、その端裏に切紙の項目が付されているが、更に他の切紙では押されていない「慧輪永明師」の朱印が存する。切紙の形式であるが、冒頭に切紙の名前が書かれ、第一

行目から二行目にかけて、三宝印が押されている。切紙は本来師資相承の伝授物であるら、その末尾には、相伝の日時、伝授関係が記載されのが一般である。しかし、本切紙では、相伝した智堂光紹の署名「永明叟」と、「慧輪永明禪師」の朱印、版刻の花押が押されているだけである。実は、光紹相伝の紙の形式は一定ではない。上掲の「一条紅線」(『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻 No.43)では、「于時寛文三<sup>庚辰</sup>歲九月廿八日ノ 永平廿八世御州和尚在判ノ 附授光紹老衲畢」とあり、相伝の日時と伝授関係が記載されているが、花押と朱印は押されていない。永平寺所蔵「永平和尚一枚密語」(『永平寺史料全書』禅籍編 一卷 No.25)では、「御州在判ノ付与光紹老衲」と伝授関係が記載され、「慧輪永明禪師」「光紹高風」の二顆の朱印と版刻の花押が押されている。本切紙とほぼ同じ署名の形式の切紙としては、「元和尚黒衣之由来」(『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻 No.26)「宗旨秘書」(同上 No.27)があるが、これらの切紙との間にも少異が見られる。ちなみに本文全体には朱点が付されており、人名には朱線が引かれている。

次に内容について見てみたい。「切紙目録」「伝授室中之物」(『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻 No.14)には、伝法に関する儀軌関連の切紙が多く記載されていることは指摘した。嗣書の伝授を中心とする儀礼が「小儀規」と呼ばれるのに対

し、「大儀規」とも呼ばれる『菩薩戒作法』の伝授が嗣法を前提とするとされたが、江時代中期以降、室内伝授物を嗣書・血脈・大事の三物として定着していく。一方で「天童如浄禪師、道元和尚法論」等の切紙に見られる、芙蓉道楷の法衣・竹篋・白払・宝鏡三昧・五位顯訣等の相承があったとする伝承も存在する。室内伝授附法の状況を伝える最も古い記録は、永寺二世懐英と徹通義介の師資の間に交わされた問答も含む『永平開山御遺言語録』であり、全体は三段の構成になっている。前二段は歴史叙述的性格を有する部分であり、建長五年(一二五三)四月二十七日より翌建長六年二月二十四日の嗣法完了に至るまでの具体的な儀礼の記録である。第三段部分はさらにこれに、嘉暦三年(一三二八)正月二十九日に、大智が瑩山紹瑾の直筆の『仏祖正伝授受儀式』を、「浄住和尚(無涯智洪)」より拝借して書写したもので、内容は嗣法儀礼そのものである。そこには、「伝衣作法」として、以下のように見える

伝衣作法 先卓上安袈裟、安師右辺、資向師問訊焼香三拜、師奇拜、拜了、師両手取袈裟、度与資、資両手受衣、頂戴有法語、法語罷、換自衣度侍者、掛伝衣、掛了向師問訊出、

次に、付法状に見える法器の一つとして、重要視されたのが袈裟であった。「伝衣作法」として、「袈裟之切紙」が永平



○青色衣、赤色衣、黒色衣、金黄色衣、  
 青黄赤黑白云、五色和合紫極衣也、上衣也、是ヲ謂上衣也、  
 因縁曰、是阿部大日和合也、凡神道二八、衣那、千葉  
 屋、千盤屋之三字、  
 此衣那云、  
 五、五姓也、三八、三部大日、三部者、金剛界・胎藏界・  
 中大也、仏道名袈裟、三世諸仏解脱幢相衣云、三衣共崇此  
 衣那、一、九条僧伽衣、二、七条優鉢陀羅衣、三、五条安陀  
 羅衣、四、十三条阿耨衣、五、二十五条菩薩衣、天二十八宿、  
 地三十六萬、七曜、九曜、一万三千六百五十四神、荒神、衣那  
 也、同袈裟ノ參禪在之、可秘々々、

(赤白文・黒輪赤輪脚) (赤白文・光輪脚)  
 永平念九世 永明叟 (版刻花押)

袈裟は「三衣一鉢」といわれるように、僧尼の衣食のため  
 に保持を許されるものの内、その衣服をさして言う。僧尼の  
 生活法具として六物や八物・十八種物のいずれにも含まれ、  
 清規等にも、禅僧の所持物として例外なく明記される。この  
 「衣(袈裟)」がある時期よりその所伝の法の象徴「伝衣」と  
 して、またその法の相承の正当性の証である「法信」として  
 の意味が付与されるようになった。中国では神会が提唱した  
 「法信」としての袈裟の觀念がその後も受け継がれており、

日本における禅宗宣揚の嚆矢となった達磨宗の大日房能忍  
 (一一九四頃)も、中国阿育王山の拙庵徳光より、達磨の  
 頂相等とともに法衣の相伝を受けている。道元もまた中国留  
 学から帰国するに際しては、芙蓉道楷(一〇四三—一一一八)  
 以来師資により相伝され、如浄に至ったとされる青黒色の袈  
 裟を伝授されており、切紙史料においても、「元和尚黒衣之  
 由来」(『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻 No.26)として取  
 り上げられている。道元は、『正法眼蔵』「伝衣」や「袈裟功  
 徳」を撰述して、衣法一如、仏袈裟としての位置付けを行っ  
 ているが、特にその功德を強調し、袈裟の著け方、受持の仕  
 方、衣財、袈裟浣洗の法、種類、十種の勝利等を示し、仏袈  
 裟の正伝性を強調したとされる。

また、出家得度に際して、袈裟を伝授することの儀礼は、  
 例えば埼玉県正龍寺所蔵、三世格叟寅越(一一五八七)所伝  
 の「出家略作法文」に「授衣鉢加法」が付記されていること  
 から確認できる。

貞享五年(一六八八)三月、東京都府中市の高安寺九世大  
 器保禅(一七一七—一七二二)が同寺八世普岩言説(一七〇四—  
 一七〇四)に伝授した「三国相伝福田切紙」には、袈裟が福田衣と別称  
 される由来と、その相伝着用の功德が示されている。

(端裏)三国相伝福田切紙

祇夜経曰、阿難白、仏言、袈裟之体又以何作、仏曰、靈山

有<sub>レ</sub>田号<sub>レ</sub>福田、故<sub>二</sub>下<sub>レ</sub>種<sub>一</sub>一度<sub>ヲ</sub>、効<sub>二</sub>七<sub>レ</sub>度也、実長<sub>テ</sub>一寸五分也、食<sub>レ</sub>之者無<sub>レ</sub>病患、故<sub>二</sub>此田<sub>ヲ</sub>形<sub>リ</sub>袈裟<sub>二</sub>号<sub>一</sub>福田、故食物之時不<sub>レ</sub>掛<sub>レ</sub>袈裟<sub>一</sub>者、是掃<sub>レ</sub>フ食鹽<sub>ヲ</sub>、云云、退身而以不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>同座<sub>一</sub>、云云、雖<sub>モ</sub>同罪<sub>一</sub>、同座<sub>スル</sub>者重罪<sub>一</sub>之者也、云云、雖<sub>レ</sub>然着<sub>二</sub>仏袈裟<sub>一</sub>法衣<sub>一</sub>者、仏身者也、如<sub>レ</sub>是儼爲<sub>二</sub>出家<sub>一</sub>者、ハ能<sub>ク</sub>可<sub>レ</sub>憶着<sub>一</sub>也、

天童山景德禪寺住持如浄大和尚、謹<sub>テ</sub>伝<sub>二</sub>附道元<sub>一</sub>既<sub>二</sub>畢<sub>一</sub>、元和尚御飯朝以来、永平寺<sub>ヲ</sub>御建立<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>而、伝<sub>二</sub>附懷辨<sub>一</sub>而、其<sub>リ</sub>以来、也<sub>ヲ</sub>代<sub>テ</sub>流伝<sub>テ</sub>今到<sub>二</sub>当門家岩<sub>一</sub>伝<sub>二</sub>附既<sub>一</sub>畢、尽<sub>レ</sub>未來際護<sub>二</sub>此垂戒<sub>一</sub>保護<sub>レ</sub>給、謹<sub>テ</sub>焼<sub>二</sub>香<sub>一</sub>九拜<sub>一</sub>者也、云云、

于時貞享五戊辰年二月吉辰

家岩比丘示之

(印)保禪九拜

岩手県正法寺所蔵『仏祖嫡伝聖財之巻』(享保年間書写)には、「伝衣」に関する月泉派相伝の切紙が記録されている。

此衣表信、

此一袈裟三世諸仏道場<sub>ヲ</sub>、衆生著<sub>二</sub>仏伽利<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>体<sub>一</sub>則、為<sub>二</sub>無相<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>福衣<sub>一</sub>、然者便有相<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>凡身<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>相<sub>一</sub>之心<sub>ヲ</sub>、迦葉尊者著<sub>二</sub>袈裟<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>体<sub>一</sub>則、万像森羅<sub>ト</sub>与<sub>二</sub>人々<sub>一</sub>這裏、無<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>差<sub>一</sub>、若有<sub>レ</sub>差<sub>一</sub>則、有<sub>二</sub>生<sub>レ</sub>处<sub>一</sub>麼、有<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>处<sub>一</sub>麼、山雲海月表<sub>二</sub>肩<sub>一</sub>上衣<sub>一</sub>也、慧能曰、此衣表<sub>レ</sub>信、豈<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>力<sub>一</sub>争<sub>一</sub>哉、

不思善不思惡、正当与麼時、那箇是明上座本来<sub>一</sub>面目、本来衣

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

也、

五条、五体也、七条、七識、九条、九穴、四点衣四体、合而二十五之菩薩、相分而呈<sub>二</sub>四衣<sub>一</sub>、四大分離、本身露現、恙<sub>レ</sub>々出身、以<sub>レ</sub>爰号<sub>二</sub>瑞衣<sub>一</sub>、真是成仏作祖<sub>一</sub>云云、

坐具是般若、

右以<sub>二</sub>四天王<sub>一</sub>護法、具法身性、一坐具、十方仏土中、唯一<sub>一</sub>乘法、虚空無辺、四王諸仏迷、爰諸祖錯、是於爰拜、違則不<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>法、不<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>師、不<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>我、礼拜常如是云云、

宋紹定元年九月一日 天童如浄援道元

伝衣図

( 図省略 )

八木田<sub>◎◎</sub>凡<sub>◎</sub>字者、八相三昧福田、米字、無始無終、大般涅槃境界也、披<sub>二</sub>此衣<sub>一</sub>時、唯<sub>レ</sub>一人<sub>一</sub>独尊<sub>レ</sub>仏<sub>一</sub>、其<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>言句、一切皆<sub>レ</sub>獅子吼<sub>一</sub>也、

永平和尚伝

坐具文曰、

善哉尼師壇、諸仏所受用、願共一切衆、常坐於其中、右此坐具者、三世諸仏之金剛座也、登<sub>二</sub>此座<sub>一</sub>者、正<sub>二</sub>坐于金剛座<sub>一</sub>、三惡四趣之怖畏無<sub>レ</sub>之、

五条衣者、表<sub>二</sub>五仏<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>五智<sub>一</sub>、二<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>五仏住<sub>一</sub>在其<sub>レ</sub>中<sub>一</sub>、故<sub>二</sub>此<sub>一</sub>袈裟者、離<sub>二</sub>五欲<sub>一</sub>、断<sub>二</sub>五煩惱<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>五神通<sub>一</sub>、滿<sub>二</sub>五智徳<sub>一</sub>、

三世諸仏相伝袈裟也、故曰行道衣、曰作務衣、一切時中用此袈裟、故又曰安陀会、此翻常住衣故、今日授、七条衣者、表七仏、顯七菩提、七聖財、七等覺支、皆在此中、是号食衣、持此袈裟衣者、法善禪悅之食、飽滿心中、故外離七遮罪、内得七種善、此袈裟者、二百三十五仏縫頭也、是三世諸仏相伝之袈裟也、故今授之、九条衣者、三世諸仏之說法衣、上自二十五条、下至九条、合為一衣、持此袈裟者、上中下俱九条也、表如来九識円備之智体、此衣者、三百五十仏縫頭、持此衣者、離九界妄心、到究竟妙覺之果、是三世諸仏解脱幢相之袈裟也、故今授之、

延文元年八月時正月在妙莊嚴院伝之良詔

紹續判

夫受衣者、我宿母体内九月也、其間修理次第、謂受衣作法、又謂之受持衣也、然袈裟者、我在母体内九月、其間消息次第顯也、当三月、謂之葛麻、取之表四條、坐具、五月二分、一長一短五条也、謂之掛絡、七月分、兩長一短七条也、謂之飯衣、九月分、四長一短九条也、謂之大法衣、已上合而二十五条也、四・五・七・九条也、皆是宝心三昧内消息、亦五大出入息、柯纏無明、凡夫緒也、表之為法衣二筋、環者是、我此一心法、正体也、夫血脈者、我此一心法正体信受、謂正伝血脈、相統

此血脈、我此宝心至三十二相、儀、血脈正伝之道場也、又上天下下、背上面、背搭袈裟、此一事無所不通義也、

正保四丁亥年夷則下旬、於洞谷山前正法良周和尚伝授此旨、ここでは、袈裟に付随して「坐具」が取り上げられ、「永平開山御伝坐具文」を引用している。この切紙と同内容のものが、天文十九年(一五五〇)十月十一日に建福寺各叟正越より伝授された、長野県上田市龍洞院四世千照鏡(正)珊所伝の「永平開山御伝坐具文」と題する切紙である。

永平開山御伝坐具文曰

善哉尼師檀、諸仏所受用、願共一切衆、常座於其中、此座具者、三世諸仏金剛座也、登此座者正座金剛、惡四趣之怖畏無之、五条衣者、表五仏顯五智、三十五仏住在其中、故者、此袈裟者離五欲、断五煩惱、得神通、端五智得、三世諸仏相伝袈裟也、故曰、行道衣、又云、作務衣、一切時中此袈裟故今日受之、

七条衣、表七仏、顯七菩提、七聖財、七等覺支、智在此中、是号食衣、將此袈裟者、法善禪悅之食、心中滿故、外離七遮罪、内得七種善、此袈裟、二百三十五仏縫頭、是三世諸仏相伝之袈裟也、受之、

九条衣、三世諸仏之說法衣、上廿五条、下至九条、合為一衣、持此袈裟者、上中下九条也、持九条者、如来識円備之智体、袈

袈三百五仏纏頭、持此袈裟者、離九条界之志心、至究竟妙覺々  
果、是三世諸仏解脫幢相之袈裟也、故今日受之、

廿五条 一 九条 十三条

上三衣 廿三条 中三衣 十七条 下三衣 十一条

廿一条 一三条 九条

鉢孟曰、此応量器者、三世諸仏了持鉢也、是七種有金銀銅鉄  
九石木、此七種合為一鉢、伝迦葉、持此鉢者、現世得福樂、未  
來不違三惡四趣之飢饉之難、無上菩提成就、法喜禪悅之食飽滿  
故、今汝受之、

又永平開山之垂誡云、槌高五寸、口四寸、柄三寸五分、口一  
寸許、槌八角、但四面広、四角狹也、鉄尺定有説、槌高八寸、  
口六寸、八角也、柄四寸、八角也、口二寸也、都合鉄尺砧高二  
寸五分、口九寸、或八角、或一円也、柄穴ハ不鑿透中ニ可留

前建福格叟正越(朱印二顆)(花押)

于時天文十九庚戌十月十一日 正珊書之 当山二代

正龍寺九世普滿紹堂(一六〇一〜七六)は、永平寺二九世  
鉄心御州より授与された多くの切紙を相伝しており、そこ  
は永平寺室中より直接に伝えたとの記事が見える。「衣鉢血  
脈伝授作法」も普滿所伝のものであり、伝授作法とはあるが、  
内容は袈裟の田相や、鉢を黒く塗る意味、血脈についての口  
訣を一枚に記したものである。

(端裏) 衣鉢血脈伝授作法

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

### 衣鉢血脈伝授作法

一、受衣トハ、我レ父ノ体中ニ宿スルコト九十日也、其日數ヲ  
過テ、母ノ胎中ニ入テ宿スル事九月也、其間ノ修行ノ次第ヲ、  
受衣ノ作法ト云也、畢竟衣八衣那ヲ表スル也、亦衣那荒神ト云  
有リ、是ハ身命ヲ守ル魂也、是ヲ氏神トモ云也、人身ヲ不レ失  
神也、其袈裟トハ、我レ母ノ胎内ニ宿スルコト九月也、其間ノ  
消息ヲ露也、七曜・九曜・廿八宿、三月ニ当ルヲ、カツマフト  
云也、是ヲ取テ四条ノ坐具ト表也、五月ニ当ル分ヲ一長一短ト  
云テ、五条衣ト作シ、是ヲ小衣ノ掛落ト表也、七月ニ当ル分ヲ  
両長一短ト云テ、七条ノ衣ト作シ、是ヲ食衣ト表也、九月ニ当ル  
分ヲ三長一短ト云テ、九条衣作シ、是ヲ大衣・法衣ト表也、皆  
是ヲ取合テ、廿五条ト云也、是皆宝心三昧ノ消息也、亦五大出  
入ノ息ヲ命緒ト云也、此出入ノ息ヲ袈裟ノ二筋ノ緒ニ表シテ露  
也、亦衣ノ色ヲ黒作スワ、声識ノ黒ヲ表ス、

(中略)

從永平室中之直伝

詔堂拜

曹洞宗における袈裟功德の意義は、基本的には道元の著作  
に求められるが、さらに中世における秘密相伝の風潮を受け  
て、袈裟の象徴性は「袈裟大事」の切紙において顕著となる。  
普滿には、二種類の「袈裟大事」関連の切紙が相伝されてい  
る。正竜寺所蔵の「福田衣切紙」は、袈裟(九条衣)の田相



袈裟ノ緒トハ、胎内ニ居時キ、<sup>(ホカ)</sup>ソノ緒ノコトダ、鉄緒、珠數ノ緒、何レモ是ヲ表スル也、亦山伏ノカイノ緒モ同シコト也、

袈裟ノ數者、捻而五条・七条・九条・十一条・十三条・十五条・十七条・十九条・廿一条・廿三条・廿五条也、

五条者行脚衣、七条者食衣也、九条者說法衣也、廿五条者、仏之人滅之時、附阿難給法衣也、

内裡工ノ径ヲ云フ、丹墀ノ沙石ト云ハ、シラスノコト也、ソノシラスヲ透テ、月脚・雲客ヲ申ス也、其後、前儀・後座・左輔・右弼ヲ申「」是ヲ内裡ノ四天下云也、此ノ方々ガ、帝王ヲ申「」亦禁中ヨリ官ヲ給ルニ、槐ノ字ヲ如何、

密力<sup>(ヒツリキ)</sup>テ出ス也、先左大臣・右大臣ノ庭ニ蓮池アリ、此ノ池デ、頂キヲ酒テ官ヲ作スニ依テ、草文槐門ノ字ト云也、前儀者、「」後座者、近衛ノ位、左輔者右大臣ノ位、右弼ハ左大臣ノ位也、

祇夜經云、阿難白仏言、袈裟ノ体<sup>(ハ)</sup>夫<sup>(ハ)</sup>以<sup>(レ)</sup>何<sup>(ニ)</sup>作<sup>(ル)</sup>、仏曰、靈山<sup>(ニ)</sup>有<sup>(ル)</sup>田<sup>(ノ)</sup>号<sup>(ス)</sup>福田、下<sup>(レ)</sup>種<sup>(ヲ)</sup>一度、莖<sup>(カ)</sup>七度也、実<sup>(ノ)</sup>長<sup>(ク)</sup>一寸五分也、食<sup>(レ)</sup>之<sup>(者)</sup>無<sup>(ク)</sup>病患、故<sup>(ニ)</sup>此<sup>(ノ)</sup>田<sup>(ヲ)</sup>移<sup>(シテ)</sup>袈裟<sup>(ニ)</sup>号<sup>(ス)</sup>福田、故食物ノ時不<sup>(レ)</sup>掛<sup>(ル)</sup>是袈裟<sup>(ノ)</sup>者、<sup>(ハ)</sup>是<sup>(レ)</sup>食<sup>(ノ)</sup>量、云云、退<sup>(レ)</sup>身<sup>(而)</sup>以<sup>(テ)</sup>不可同座、雖<sup>(シ)</sup>同座<sup>(ス)</sup>、却<sup>(シテ)</sup>同座<sup>(者)</sup>重罪謂、

着袈裟者、此義能<sup>(ク)</sup>可<sup>(ク)</sup>憶<sup>(ス)</sup>、

畢竟<sup>(ハ)</sup>卍<sup>(ノ)</sup>字也、順逆合<sup>(シ)</sup>夕<sup>(ノ)</sup>時、用<sup>(ル)</sup>「」亦一円相之用<sup>(ル)</sup>「」也、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

正左順也、

善知識、中品中生ヲ大内殿<sup>(ヲ)</sup>「」洛中デ八大内殿ガ内裡ヲ守護シ、亦天下京中ヲ儘<sup>(ヲ)</sup>ニスル故ニ中二居<sup>(ル)</sup>也、如是釈迦モ向上向<sup>(上)</sup>下ヲ不<sup>(レ)</sup>欠<sup>(ル)</sup>故ニ、天上 尊トヲセラル、也、夫レニ依テ、中二取ル也、善知識モ過去・現在・未來共ニ沙汰スルニ依テ、心ニトル也、

廿五条ヲ分<sup>(ル)</sup>而、九条・五条・三条・一条ト作<sup>(ル)</sup>、九条者說法衣、七条者食衣、五条者<sup>(行)</sup>持<sup>(ヲ)</sup>而洛<sup>(ス)</sup>行街衣、三条者作<sup>(ル)</sup>坐具、一条者鉢袋ト作<sup>(ル)</sup>、是合<sup>(シ)</sup>而ニ二十五条也、

大毘婆娑論云、袈裟在<sup>(ニ)</sup>一仏土、日月世界也、先九条<sup>(ハ)</sup>三百五十仏之道場也、七条者、二百十五仏道場也、亦五条者、百三十仏之道場也、金縷之糸<sup>(ノ)</sup>之袈裟者、憍曇弥織給、憍曇弥者釈迦<sup>(ノ)</sup>之伯母<sup>(ノ)</sup>平、

如淨和尚附道元  
從永平室中直伝

ちなみに、石屋派に属する佐賀県武雄市円応寺にも、同内容の「福田衣切紙」が相伝されている。

また、光紹智堂所伝の「袈裟切紙」と同じ内容を持つものに、普満所伝の「袈裟大事」があるが、両者の間には仏菩薩や諸天の名称に異同が見られる

詔道拝

図(5)

碧天		虚空	
提頭頼吒天王 十一世界	東方阿闍仏	毘盧博叉天王 西方無量壽菩薩 一世界	毘盧博叉天王 西方無量壽菩薩 一世界
地蔵菩薩	文殊師利菩薩 一切菩薩最勝福田 甘露河	彌勒菩薩 普賢菩薩 一切如來宝蔵福田 八味河	大梵天王 普賢菩薩 一切如來宝蔵福田 八味河
毘婆尸仏	尸棄仏	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏
塔有	月光菩薩 金剛界曼荼羅 馬頭河	塔有 日光菩薩 胎藏界曼荼羅 獅子頭河	塔有 日光菩薩 胎藏界曼荼羅 獅子頭河
吸教宝蔵	觀自在菩薩 寺求童子	南方宝勝如來 摩訶毘盧舍那仏 積迦牟尼仏 靈山淨土 北方不空成就仏	南方宝勝如來 摩訶毘盧舍那仏 積迦牟尼仏 靈山淨土 北方不空成就仏
毘婆尸仏	毘舍浮仏	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏
地蔵菩薩	文殊師利菩薩 一切菩薩最勝福田 生女河	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏
東方阿闍仏	毘沙門天王	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏
提頭頼吒天王	東方阿闍仏	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏
提頭頼吒天王	東方阿闍仏	彌留孫仏 狗那含仏	彌留孫仏 狗那含仏

從永平室中直伝

紹道拝

この切紙は、袈裟の各条の田相(壇隔)、周囲の四縁、各葉等に、過去七仏をはじめ、諸仏・諸菩薩・金胎両曼荼羅・諸天・宇宙世界を配し、袈裟一領の上を一つの宇宙に見立てたものである。西明寺所蔵「九条衣之図」(書写年不詳)は本切紙の図とほぼ同様であるが、更に別紙にて、以下のよう

道公師来訪マ、以ニ仏祖正伝袈裟、図一本ヲ示ス予ミ、予踊躍シ而生ニ希有僧マ、拝ニ閱スルニ之作ニ一長一短九条衣ト也、仏菩薩諸天等、皆画像也、画像之傍ニ書セリ諸仏ノ宝号諸天ノ名マ也、予以ニ一布下品ノ九条衣ヲ書ニ写ス之マ、然レモ不能レ画スルコト、仏菩薩之像ハ、以ニ此ニ相マ、直ニ画シ宝号マ、諸天ノ之像ハ、以ニ此ニ相マ、書ス其名マ、拝覽セシ者ノ弁セヨ之マ、即今字ハ与レ画相去ルコト、多少ッ矣、若不ニハ其人ニ、不レ許濫リニ拝覽シ書写シ流伝シ披在ニスルコトヲ、笑、知ル者、珍レセシ之マ、々々

右九条衣之裏書ニ在之間、写留置者也、

丑六月吉日

宋仙 謹誌

この記事に拠れば、「袈裟大事」切紙は、原初的には「袈裟曼荼羅」と同じく画像と宝号とによって表されていたことがわかる。それがやがて宝号のみで表現されるようになり、諸仏諸菩薩と諸天とを区別するために朱筆によって記号が冠されることとなった。しかし、西明寺蔵「九条衣之図」にはそ

の区別が残るが、光紹智堂所伝のものや普満所伝のものではそれが失われつつある。

更に田隔の数を増し、諸仏諸菩薩諸天の数を増したものに、静岡県島田市静居寺所蔵「袈裟(二十五条衣)大事」(仮題)がある。

こうした切紙の先駆的存在としては、袈裟の各田相に仏・菩薩を示す梵字の種子を配した「袈裟曼荼羅」があげられ、鎌倉末期の版木摺刷物の存在が確認されている。

永平寺所蔵の「切紙目録」に、「一、袈裟之大事」と見えるのが、この光紹所伝の切紙に相当すると思われる。面山端方は「洞上室内断紙棟非私記」において以下のようになっている。

#### 九条衣密伝断紙

面山謂、作九条衣図、縁書須弥四洲名、又書五仏名号、四天王名号等種種事、又引袈衣經云、靈山有田名福田等、皆是好事者之妄案也、欲知三衣義、則須熟覽正法眼蔵袈裟功德卷等、祖師未攀之雜説、一切勿用焉

「九条衣図」は、好事家の偽作捏造であり、三衣の真実義を知ろうと思つならば、『正法眼蔵袈裟功德卷』を熟読すべきであるとする。この「袈裟切紙」と関連するものは、やはり光紹智堂が相伝した永平寺所蔵「法衣伝授時之参」が挙げられる外、「袈裟心伝大事」、「法衣伝授大事」、「衣鉢血脈伝授作法」、「結環之参」、「福田衣之参」等が永平寺室中に相伝さ

れていたことが確認できる。

#### 五、『室中切紙謄写』について

永平寺において相伝されてきた切紙の総数からすれば、上述した藪州が記載したものは、その一部分でしかない。その全体像を推測するために、永平寺第二七七世高国英峻(一五九〇—一六七四)が作成した『切紙目録』(光紹智堂所持)を中心として関係史料との対照表を後に掲げた。

駒澤大学図書館蔵『室中切紙謄写』は、三十八世承天則地を下限とする永平寺に現存していた切紙を後に謄写したものであり、その殆どが鉄心御州から光紹智堂へと相伝されたもので、総計五十一種の切紙が取り上げられている。その目録を掲げれば以下の通りである。ちなみに、埼玉県寄居町正龍寺には、やはり御州より普満韶堂に伝授された切紙が現存している。

- (1) 嗣法之儀記、(2) 嗣法論、(3) 傳法之儀軌、(4) 嗣書地綱之様子、(5) 傳授前巡堂之次第(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(6) 佛布施之法(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(7) 十佛名切紙、(8) 三寶印(嗣法之印籠相傳時之一紙)、(9) 三寶印之大事、(10) 傳儀加行、(11) 面授之参(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(12) 宗旨秘書、(13) 七佛傳授戒法之一枚紙(心田之話・五相之圖)、(14) 二度傳授参、(15) 佛祖正傳正法

眼藏血脈、(16) 嗣書袋圖(并拂子・竹篋寸尺)(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(17) 血脈袋之大事(子狐トモ)、(18) 住山之大事、(19) 施餓鬼之切紙、(20) 御大事事看經・回向、(21) 道場莊嚴之圖、(22) 嗣書袋圖(并拂子・竹篋寸尺) 前出(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(23) 竹篋切紙、(24) 遺誠之偈、(25) 鎮守切紙、(26) 五位之別紙亦五体五輪之圖、(27) 龍天受戒作法(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(28) 白蛇切紙(帰朝本則)、(29) 安座点眼、(30) 開眼点眼切紙并塔婆点眼、(31) 山神授戒 白山也、様子ト図アリ、(32) 白山妙理大権現切紙、(33) 山門法衣之大事 法衣傳授之時參話、(34) 米門之切紙、(35) 消災咒之記文并一返消災咒之切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(36) 一返消災咒切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(37) 己之切紙、(38) 無之切紙、(39) 四句文之切紙、(40) 身心脱落、(41) 竹篋・拄杖參話并注脚、(42) 拂子、(43) 多子塔前傳附之作法(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(44) 銀箱鎖子之切紙、(45) 合封折角之切紙、(46) 先師取骨之大事、(47) 廟移作法、(48) 龜背宝塔密紙圖、(49) 洞山門下牌塔相續之事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(50) 非人亡者之事、(51) 天痘病之事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

次に、面山瑞方『洞上室内断紙棟非私記』についてみてみたい。本書所載の「永平寺室中斷紙目録並引」の記事に依れば、

延享二年乙丑夏、余寓永平寺之承陽菴五十餘日。請室中法寶周覽、中有斷紙一百四十餘通、逐一拜讀目録以備後鑑、皆是代語者之妄談僻說、而無一補於宗門者<sup>上</sup>也。

とあり、延享二年(一七四七)面山が閲覽した当時、永平寺室中には、「斷紙一百四十餘通」が現存していたことがわかる。以下、その項目を挙げる。

(1) 過去七佛血脈、(2) 應身録、(3) 國王歸敬之本地、(4) 過去七佛心字參、(5) 龍天授戒陰陽祕密之妙儀(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(6) 白山妙理斷紙、(7) 鉈切斷紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(8) 龍天十八名號切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(9) 三國一位之血脈、(10) 奥藏之圖(高国英峻『切紙目録』ナシ)

右十通

(11) 六祖示青原半紙大事、(12) 三國流傳之圖、(13) 天竺一枚紙、(14) 洞山五位切紙 亦名五體五輪圖、(15) 三身大事切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(16) 三老普門大事 釋迦文殊彌勒、(17) 道元嗣書不同切紙、(18) 牌塔之儀式(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(19) 牌塔相續切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(20) 正法眼藏五輪碎切紙、

右十通

(21) 正傳始末切紙、(22) 大陽眞實參話、(23) 戒文傳授參 代語、(24) 戒文拈提參 代語、(25) 袈裟大事圖、(26) 袈裟心

傳大事、(27) 手形切紙、(28) 法衣傳授參話、(29) 法衣傳授大事、(30) 衣鉢血脈傳授作法、

右十通

(31) 結環之參、(32) 福田衣之參、(33) 曹山八圍圖、(34) 宗門五位圖參(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(35) 勃陀勃地斷紙、(36) 光明迷參、(37) 曹洞機切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(38) 一中十位切紙、(39) 七堂伽藍圖切紙、(40) 佛祖正傳菩薩戒血脈最極上大事、

右十通

(41) 曹洞三種訓訣、(42) 佛頂上圓相圖切紙、(43) 四處半夜之圖參、(44) 兩鏡圖大事、(45) 阿字大事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(46) 拈華微笑訣參、(47) 大善知識頂上三世了達圓滿一  
切紙、(48) 卍字大事、(49) 卍字切紙 卍字八七ノ字十ノ字  
ト云フ、(50) 卍字之圖、

右十通

(51) 鎮守切紙、(52) 諸行無常四句切紙、(53) 續松祕要參、(54) 續松切紙、(55) 襪子切紙、(56) 鷲鷲切紙、(57) 善知識切紙、(58) 團扇切紙 永祖歸朝天童ヨリ餞ト云コト(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(59) 二本柱切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(60) 露柱切紙、

右十通

(61) 天童一紙大事、(62) 大陽卵形毘龍圖斷紙、(63) 宗旨祕書、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(64) 元和尚黒衣由來、(65) 臨濟曹洞兩派血脈、(66) 濟下一條紅線切紙、(67) 天上梵天皇御即位大事 上梵八淨飯(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(68) 二句偈嗣書 周穆王達磨聖德太子、(69) 二句偈傳授血脈竝十如是大事

右十通(九通ノ三)

(70) 亡者靈供切紙、(71) 亡者靈供切紙 龜前熱田明神ニ上ルコト本地不動明王ト云コト、(72) 住持燒香切紙、(73) 念佛切紙、(74) 銀錢馬形切紙、(75) 竹篋切紙、(76) 拂子切紙、(77) 銀箱鎖子切紙、(78) 米門切紙 松ト梅ト椿ト牡丹トノコト、(79) 三寶印切紙、

右十通

(80) 三寶印大事、(81) 龜背寶塔切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(82) 竹篋拄杖參話竝圖、(83) 臨濟三句切紙、(84) 劔刃上切紙、(85) 天童山樹上切紙 大極ト五位ノコト、(86) 三悟道同切紙、(87) 身心脱落切紙、(88) 脱落脱落切紙、(89) 脱落身心 初、

右十通

(90) 無一切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(91) 八句祕密切紙 一段光明著語(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(92) 祖師禪嫌話切紙、(93) 祖師禪切紙、(94) 道元十三則目録、(95) 十八般妙語圖、(96) 州縣村切紙、(97) 馳書不到家大事、(98) 三位大事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(99) 君公書切紙、

右十通

- (100) 拈奪略三事切紙、(101) 十八般妙語 片仮假名、(102) 誰圖大事黒圖、(103) 頂門眼切紙、(104) 御大事看經回向切紙、(105) 住山大事切紙、(106) 遺誠偈大事、(107) 二度傳授切紙、(108) 梅華嗣書切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(109) 人人具足圖切紙、

右十通

- (110) 面授參事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(111) 嗣書地編切紙、(112) 竹篋拂子拄杖尺寸切紙、(113) 先師取骨切紙、(114) 十智同眞切紙、(115) 十三佛血脈切紙、(116) 四十九餅本位切紙、(117) 達磨知死期之祕密、(118) 佛誦最第一功 圓満知死期經 金剛智三藏譯偏經也 (高国英峻『切紙目録』ナシ)、(119) 向了畢判出切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (120) 參禪了畢證文(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(121) 血脈道場儀式、(122) 四恩參、(123) 晦朔弦印切紙 月圖、(124) 八師次第切紙 傳法師傳戒師受戒師參學師言行師依止師學得師右妄說也、(125) 十二字切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(126) 知識三箇行話、(127) 天童山禪定規 無準作ト云妄說ナリ(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(128) 多子塔前傳付作法切紙、(129) 傳戒加行切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (130) 傳戒道場次第注脚切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(131) 傳戒道巡堂切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(132) 室中儀軌參(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(133) 文殊手内一雀經 一名佛説三身壽量無邊經コレ偏經ナリ、(134) 臨終人問答切紙、(135) 九識圓満切紙、(136) 月有兩箇切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(137) 大藏法數要略之圖(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(138) 天童與道元問答嗣法論 妄説也、(139) 三段訣切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (140) 縁思寂一冊 右大陽付浮山書芙蓉道楷序妄作之書也、

寛延二年仲春二十八日

永福方面山記

上記の「永平寺室中斷紙目録並引」の記事と高国英峻『切紙目録』の記事とは、相互に異同が見られる。

次に『參禪切紙 後卷』(故古田紹欽氏所蔵<sup>13)</sup>)を取り上げてみたい。本書は光紹智堂所持の切紙を集成したものであるが、御州とは異なる系統の伝授を受けていたことが確認できる。

- (1) 壹 圓相參、(2) 二、合封參、(3) 三、傳授參、(4) 四、相承參、(5) 五、印可參、(6) 六、摩頂參、(7) 七、四句文參、(8) 八、勃陀勃地參、(9) 九、證淨訓訣、(10)

十、鉄漢大事参、(11) 十一、嗣續鉄漢参、(12) 十二、鎮守参、  
 (13) 十三、三喫茶、(14) 十四、念誦参、(15) 十五、二句偈参、  
 (16) 十六、嗣法論大事、(17) 十七、宗旨向上勘弁正法内意、  
 (18) 十八、国王授戒参付書天授、(19) 十九、空塵書圖抄、(20)  
 二十、安座點眼大事、(21) 廿一、見性之大事、(22) 廿二、住  
 山眼大事、(23) 廿三、死灰参、(24) 廿四、三箇劔大事、(25)  
 廿五、血脈圖相大事、(26) 廿六、亡靈授戒偈、(27) 廿七、死  
 母別腹大事、(28) 廿八、大姉血脈、(29) 廿九、續松之切紙、  
 (30) 卅、下炬之切紙并下炬證文、(31) 卅一、鎮守之参、(32)  
 卅二、寶鏡三昧、(33) 卅三、達磨傳法偈、(34) 卅四、達磨知  
 死期偈、(35) 卅五、甘露卷、(36) 卅六、印籠、(37) 卅七、三  
 說大死底本則、(38) 卅八、太白峰記、(39) 卅九、榮西記文、  
 (40) 四十、大陽玄銀箱鎖子、(41) 四十一、救龍偈、(42) 四十  
 二、孝典之因縁、(43) 四十三、自家訓訣、(44) 四十四、九ヶ  
 条結縁傳授、(45) 四十五、續松参、(46) 四十六、釈迦戒四鉢、  
 (47) 四十七、上來圖、(48) 四十八、祝聖切紙并通二紙、(49) 四  
 十九、祝聖焼香傳授、(50) 五十、了菴御修行、(51) 五十一、  
 住吉五ヶ条託宣、(52) 五十二、山門切紙、(53) 五十三、證淨  
 鉄漢之大事参共、(54) 五十四、祖師禪切紙、(55) 五十五、幽  
 靈留切紙、(56) 五十六、御影画像書様、(57) 五十七、嗣書疊  
 様之次第、(58) 五十八、満字切紙、  
 本書は残念ながら、零本であり、乾本を欠いているが、永平

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

寺における切紙相伝を考察する上でも、また光紹の教学的背  
景を知る上で極めて重要な史料である。

(1) 婁、圖相参

相ヲ云へ、代、無始無終テ走。師云、無始無終ノ時如何、  
良久云、今盧遮那佛、

亦一ツノ圖相ヲ云へ。無始終テ走、師云、無始無終ノ時如  
何、云、三世諸佛テ、如何トモシタカウ走、

師云、佛陀勃地ヲ云へ、云、佛陀佛地ニ至テ走、師云、佛地ヲ  
云へ、云、一心、師云、一心ノ通ヲ云へ、云、佛祖ノ命脉、  
〔慧輪永明禪師〕  
(未印白文)

付囑底ノ功ヲ、云、續八是功、紹了非其功、不レ紹底ノ功ヲ、云、  
葵花向日、柳絮隨風、師云、何ト風ニ隨ウタゾ、云、東力  
ヲ吹ケバ西ニ、南力ヲ吹ケバ北、師云、何タル境界タゾ、云、  
無心全提、無心ニ攀テ走、師云、無心全提無心ナラバ、魚ヲ食  
シ、シヨキヲツカウタモ、無心ナラウスカ、何トテ鬚髮ヲ除テ  
袈裟ヲハ掛タゾ、云、無(4オ)

(2) 二、合封参、

合封参・傳授参・相承参・印可参・摩頂参 大事合封参、師  
云、何ヲ合封シテ、云、佛陀勃地、師云、合封シヤウヲ、云、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

閉閉目良久ク、師云、合ノ一字ガ聞エヌゾ、云、手ヲ合、口ヲ開ク様子在、

(3) 三、傳授參、

傳授シ様ヲ、速礼三拜、師云、誰ヲ拜シ誰ニ授与シタゾ、云、一心ニ當著テ走、師云、當著ヲ、学、師ノ脇ニ立テ又手ヲ、

(4) 四、相承參、

相承ヲ云へ、速礼三拜、師云、何トテソレガ相承テハアルゾ、云、以心傳心、

(5) 五、印可參、

印可ヲ云、速礼三拜、師云、何トテソレガ印可テハアルゾ、云、施為運動是心印、

(6) 六、摩頂參、

摩頂ヲ、云、以頭圓相ヲ、自己ヲミル、師云、ソレガ何ソトテ、摩頂デアハルゾ、又如前拳ス、師云、マタモ聞エヌゾ、云、探頭大過、(4ウ)  
大事ヲ、云、トウ〜タラリ〜ララリラ〜リドウ、畢竟、イロハニホヘト羅々哩々哩々囉、

此參、傳後ニ早不可許、以是宗旨深密ナル事ヲ知、早免許スルト宗

門之破滅也、此秘參上足可為一人也

(7) 七、四句文參、

- ・師云、勃ヲ、・資云、佛、諸行無十八邪也
- ・師云、陀ヲ、・資云、法、是生滅法、
- ・師云、勃ヲ、・資云、僧、生滅々已、
- ・師云、地ヲ、・資云、實、寂滅為樂、
- ・師云、畢竟ヲ、・資云、作シテ一圓相ヲ良久ク、(5オ)
- ・師云、其拳着之心ヲ、當人ニ成テ道工、・資云、我今盧遮那佛、

(8) 八、勃陀勃地參、

勃陀勃地之參、  
・師云、勃地ヲ、・資、師ノ前ニ片足踏出而云、阿部曇、  
總而四句文ヲ不レ參、不レ可レ致引導ヲ、  
代々任意置如斯云々

(9) 九、證淨訓訣、

證淨訓訣參  
天童山如淨禪師ノ云々、仏法ハ者、秘シテ非レ秘スルニ、只ヲ為レ令メ盡レ功也、淨和尚(5ウ)撈云、既ニ是レ一大事因緣、為ニ甚麼ト落ツ糞土ニ、元和尚問答云、既ニ是レ一大事因緣、如何ガ放レン

身ヲ、淨和尚云、汝善ク護持シ、抛テ筆頭ヲ云、飽參ノ他人ニ不可シ傳語ス者也リ、可レ秘々々、若亦ク護リ流布シ、即チ眉鬚墮落ス證淨訓訣ヲ、代、作ス一圓相ヲ、師云、夫レハ何ントテ、代、總ノ窮リ物ヲ始リテ走、師云、円相ノ外ヲ云へ、代、此心ヲ走、師云、此心ヲ、代、心通證契即通、某甲即通、師云、畢竟ヲ、代、即礼三拜、是八悟上ノ參也、以心傳心也、畢竟八、心法受用也、此法二叶ツタ時キ、隔テ無イソ、

(10) 十、鉄漢大事參、

鐵漢之大事、學道ハ須ク為ル鐵漢、手ヲ着テ心頭ニ自ラ判ズ、師云、鐵漢ヲ、代、師ニ學カ方ヲ向テ、手ヲクンデ座ニ、師云、句ヲ、代、烏沙巾上ニ有ル天ノ在リ、師云、莫レ學ク平沙落厲ノ圖ヲ、心八、女鳥男（6オ）鳥ツレテアルク者也、女鳥デモ男鳥デモ死スレバ、其日ノ中ニ二トモヲ尋ル也、其日ノ中ニ二無ケレバ、一世獨リ居ル也、莫レ學クト云ハ、夫レヲモ學ヒゴトハ無用ト云心也、有沙巾上ト云ハ、大唐四百州ノ總社也、誓句ノコト也、有沙巾上ノマツリト云コトアリ、

(11) 十一、嗣續鉄漢參、

師云、嗣續ノ鉄漢ヲ、代、學、吾ガ首ヲ打テ有沙巾上誓ツト他二首ヲ振走マイ、師云、猶ヲモ鐵漢ヲ、代、亦タ吾ガ首ヲ打テ有沙巾上フツトト此事容易ニシ走マイ、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(図省略)

(6ウ)

「慧輪永明禪師」(三宝印)

(12) 十二、鎮守參、

異云、鎮守ノ參ヲ。學、師ニ向テ、前ニ立テクツルノトト匝ル也。師云、夫レハ何ントテ。學云、ドノ諸佛諸神モ圓ヨリ出テ圓ニ歸シタ、時、是ニ是ニ八走又トモ、汚穢不淨ハ走又。心得ハ、クツルノトト匝ツタハ、圓相ノ用所也。ホドニ、捨別鎮守ニ限、ドノ社口モ參詣シテ、クルリノトト廻ルハ此用所也。此心八、神ニト出テ佛ト出テ、怒徹ト出テ、亦タ八靈動含靈蝦蟇蚯蚓、或ハ依草附木ノ精靈等ニ至ル迄テ、此圓相ニハツレタノハ無イ、沙門八葬々ノ場ヨリ、參詣スル眼コ也、此辛勞ヲ助就シテ參ル人ヲバ、三ノキダハシ迄テ門送シテ拜シ在之。是ヲ知ラズシテ參ル人アレバ、大地ガ七尺ニ裂シテ、堅牢地神ノ煩惱ガサクルト云々。

念誦參・三喫茶・龍天參・白山參・鎮守參、皆一透也、(8オ)

(13) 十三、三喫茶、

到不到トモ二喫茶ヲ。代、作ス一圓相ヲ又手ノ此内ニ走。云、句ヲ。代、總ニ在レ此ノ中ニ圓カネ。云、三喫茶ヲ。代、茶傾三奠云、夫レハ何ントテ。代、釈迦毛達磨モ某甲モ、此茶ヲバ遁レ

走又。云、受ケ様ヲ。代、天下ニ雨露ヲ榮枯。趙州ノ時代ナラバ、如レ此見テヨシ、亦、碧岩ナドハ、圓悟雪豆ノカヲ入レテ見ル也。子元頌ミ、二三四五、々四三二一、是レハカズエ一ダ、一ヲハジメト誦ンダ。空劫ノ一位ヨリ地水火風空ト性ヲ受ケテ出ル也。夫レヲ死スル時ハ、夫レ一二歸ス也。時キ、本空也。故二位牌ニ歸一歸本歸元皈空皈真ト書クハ、此義ダ。未向皈シタ時、人ハ無イソ。呈ニコソ。塵埋 巾ト、延壽堂ノ額ヲバ拈ジタレ。死シ去テ、跡ノ成リ計リダ。扱テ、趣證デハソ口又カ。(8ウ)

(14) 十四、念誦參、

師云、切ニ以レバヲ。云、一息截断ノ時節、山形ハハラリツト崩レテ走。師云、生死交謝シヤウヲ。云、根本ハ何ンデモ無イ物テ走。師云、寒暑互ヲ。云、北山ハ寒ク南畔ハ暖テ走。師云、其来リヤウヲ。云、虚(9オ)空ヨリ風ノ吹キ来リカ如クテ走。去リ様ヲ。云、本二歸リ本二付テ走。師云、大海二淨(ホカ)リ様ヲ。云、本海二歸シテ走。師云、新圖寂ヲ。云、作シテ一圖相ヲ良久。師云、大命俄ニ落ヲ。云、死スル當位、柳キニ八緑リ花ニ八紅イデ走。師云、諸行無常ヲ。云、是ハ人間ノ生デ走。師云、寂滅為樂ヲ。云、カラダヲ捨ル當位、大安樂デ走。師云、諸聖之洪名ヲ。云、只今法身シテ走。師云、精魂覺路ノ進メ様ヲ。云、只今隙ヲ明ケテ走。師云、起竈ヲ。云、只今拂イ尽シテ走。師

云、句ヲ。云、人ハ死シテ精魂不レ留。師云、茶傾三奠ヲ。云、天雨露下ヲ故ニ榮枯不レ携。師云、畢竟ヲ。云、瞶眼スル也。師云、迷故三界城ヲ。云、言レ又一ヲ言トスルガ迷イデ走。師云、悟故十方空ヲ。云、言レ又一ヲ言トスルガ、迷イデアツケルヨト心得ルガ、悟リテ走。師云、本来無東西ヲ。云、作ス一圖相ヲ。師云、句ヲ。云、總ニ在リ此中也。師云、一圖相ヲ作シ様ヲ。代、師ノ前二往テ、此圖ヲ人作(9ウ)スヤ。心得ハ、凡モ聖モ餓鬼モ畜生モ修羅モ人天モ此内チヨリ出テ、亦タ此内ニ収ル也。師云、句ヲ。云、兒童ノ日ニ不レ到、都来愁ヲ不レ解。心得ハ、ドノ衲僧モ一度ヒ兒童日ニ到ラスンバ、人天ノ大導師トハナラレマジキ也。ト云ハ、チツトモ會ノ出テ又ガ、肝要ダ。識情ガアラバ、外導天魔方面ヲ出スゾ。兒童ノ日ニ至テ見ヨ。外道モ無ク天魔モナイソ。ソコヲ即心成佛トモ云タゾ。畢竟此圖ノ中ヨリ閻羅惡魔モ出タガ、亦タ此圖ニ入ル也。ト云、太郎モ二郎モ愛ヨリ出デタゾ。扱テ、兒童ノ日ニ至レバ、太郎ト呼ブニモヨツ、二郎ト喚ブニモヒヨツト出デタ。時キ、愁イヲ解シタ一ダ。處ヲ、成佛性天ノ人トモ云タ。悪クスレバ、迷イ走ゾ。迷故 城ノ城ヲフサガルト誦ンダ。迷エバ、三界トモフサガツタ一ヨ。悟故 空ノ空ヲヒロシト誦ンダ。悟レバ、十方ガヒロキ也。ト見レバ、尽十方テ東西モ(10オ)ナク、南北モ無イ一ダ。師云、火光三昧ヲ。云、心火デ走。師云、其心ヲ。云、南方ハ火ナリ、心デ走。師云、猶ヲモ子細ニ。云、火

火二歸シ、水八水二歸シテ走。心得八、南方八陽デ、人ノ發也。四大五蘊ヲソレノ二歸シタ時キ、只夕空也。時キ、閻羅老子カ眼ガ及ンデコソ。

(15) 十五 二句偈參、

師云、慈眼視衆生、福聚海無量、此二句ヲ。代、師ノ前二至テ帝座ノ如クニシテ坐スル也。心得八、先ツ此二句ハ、王法ノ起リナ呈ニ、王道ノ沙汰也。慈眼ノ眼ガシヲ以テ衆生ヲ視タト云ハ、十善ノ帝王ノ民ミヲ哀ミ、衆生ヲ憐ニワ、天寒ノ時分、夜ルノ(10ウ)ヲトゞニ御衣ヲ卒度脱ギ玉ウ。處デ、四海八蠻トモ暖ヲ得タゾ。ト云ハ、ドツコモ此帝德慈悲ノ心テ挂エタゾ。ト云テ、左輔右弼ニ困邊セラル、帝トノ「デハナイゾ。宗旨ヲハ、本分ノ心王ノコトヨ。此心王ノ慈眼テ、ドツコモ通シタゾ。心王ノ(惠澤)ノ深ウシテ、窮リ無イ處ヲ、福聚海無量ト云タゾ。爰ヲ宗門デ見ル則ンバ、四時トモニ此心王ノ司ツタゾ。トミレバ、春百花夏涼風冬雪白イガ、福聚海ノ浪タゾ。森羅万像、頭々物々トモニ此皇帝ノ德澤ノ温イデワナイカ、拳着ノ心口モ、トクト座シタ一片テ、解會承當冠リヲ傾又處ガ、從前ノ帝位ヨ。爰ヲ取テ、心王 通ト云タゾ、ホドニ、帝位帝座ト云テ、余所ニハナイゾ。座徹一片ノ正當傾カ又帝位ヨ。此正當位十成圓滿テ佛世トモニ欠ケ(11オ)路ナイゾ。爰ニ湛々トシタ福聚海タゾ。呈ニコソ、写水ヲ獻スルモ此譬喻ヨ。畢竟恩流ナラザ

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

ル處ハナイゾ。師云、子細ニ其落居ハ、代、九識本分本尊ヲ走心得八、トクト坐シタ正當帝坐ガ、即チ九識圓備ノ体タゾ。其コガ本分千手ノ正面、心ノ觀音ヨ。爰ヲ本尊ト成シタゾ。ホドニ、圓滿圓滿ノ修行デ、佛世トモニ相欠又ソ。處ガ十成圓滿一片ノ天道タゾ。爰ヲ佛法王法一般ト云テ走ゾ。既ニ傳授後之參禅也。可レ附与之傳一人。

(16) 天童如淨禪師道元和尚嗣法論

師問、如是何一箇ノ露柱。元云、人々具足。師云、試ニ具足ニ看。元云、無心底。師云、言語尽。元云、立身叉手。師云、禮拜着。師云、又(11ウ)問、如何是露柱一句。元云、六根不具。師云、是什麼。元云、拂袖去。師亦問云、一面古鏡、元云、磨。師云、磨何處落處處。元云、破鏡。師云、落處作麼生。元云、火裏氷。師云、其時節作麼生。元便放身臥。師云、禮拜着。師又問、如何是佛子上。元云、電光知了剎。師云、在何處。正知得。師云、會處如何。元云、天地同根、万物一體。師、會麼々々。元呵々大笑。師云、是誰ノ章句。元立拜。師下坐、授レ拂子。師又問云、如何是龜毛ノ拂子、兔角ノ柱。杖元云、世界怎麼廣濶、師云、其外在指頭一言、道々。元拳ニ指頭。師又問云、如何是柱杖子ノ外元云、吾ニ有ニ言ニ在。師便授レ杖。師又問云、如何是三尺ノ竹篋。元云、問話ノ者ハ與棒。師云、不怎麼時如何。元云、三日前五日後。

師云、前後際断断時時如何。元不會。師云、為レカ何ト不レ會也。(12)  
オ元云、唯為不レ開レ口。師下座、授ケ竹篋ヲ了也。元九拜珍重  
此口傳之書、曹洞之二大事也。可授上足一人。

(17) 十七、宗旨向上勸弁正法内意

宗旨向上切紙正法内意

正法者、諸法實相也。即心成佛也。上根之人、到得也。正法入派・向上入派ト云也。向下入派、初入頭事也。  
眼藏者 一塵不立之自己也。

涅槃者 涅槃不生、離ル有相ヲ。槃ハ不滅、離ル無相ヲ。生死透脱底ヲ大涅槃ト云也。

妙心者、不レ墮ニ空劫ニ、不汚染也。不似底也。

實相者、柳緑花紅也。煩惱也。不軌則也。(12オ)

無相者、非レ僧ニ非レ俗ニ、非レ草木ニ、非レ禽獸ニ、非レ天ニ非レ地ニ、主也。

微名者、幽遠也。甚深也。佛祖不識也。

法門者、有天地、有人天、正法佛法無尽也。

教外者、一字不説也。不識也。不可得也。

別傳者、父子不傳也。則禅道也。

世尊者、靈覺性也。性即是佛也。佛是心也。心即道也。道

即是禅也。禅之一字、不ニ凡聖ニ側處ニ、故ニ謂レ別傳也。宗旨向上

大事也。吉祥山沈金宮有之。

(18) 十八、國王授戒參付傳天授戒

國王授戒ヲ。代云、切忠諱名スルノヲ。云、諱名セ又先ヲ。代風(13オ)不レ鳴レ枝マ、雨メ不レ破レ塊ク。云、破り様ヲ。云、雀ハジウ鳥ハガウ。云、句ヲ。代、縱横何ノ處カ不レ風流。心ハ、一片ノ皇化也。諱名セ又先御大事ト被レ成。佛祖ノ大事、非レ所ニ小根劣者ノ造詣ス也。未分之一位也。

龍天、有時ニ現ニ雲一片相ヲ來ル也。佛其ノ時ニ授戒ノ言ヲ。我道甚深微妙也。汝ノ其ノ形ヲ不レ可改。龍天謝戒云、此ノ山ヲ奉レ佛ニ可シ佛法ヲ弘メ給フ也。

云、龍天ヲ。代、变化身ヲ走。云、天ヲ。代、不出ノ天ヲ走。云、吾道甚深微妙ヲ。云、变化身ヲ、本ノ住家ニ歸シタ時キ、本有ノ如來、不出ノ天ヲ走。云、句ヲ。代、風セ不レ鳴レ枝ヲ、(13ウ)雨メ不レ破レ塊ヲ。

(朱印白文)「慧輪永明禪師」

「光紹高風」(朱印)

本書の前半部分は、切紙の參の集成である。ここで、切紙の參を集成する史料について、付言しておきたい。龍泰寺蔵『仏家一大事夜話』<sup>(19)</sup>は切紙の參の集成であり、本參として機能していたと思われる。所載の公案目録を挙げれば以下の通りである。

- (1) 勤行(三時ノ行事)、(2) 禅家ノ本尊、(3) 日中(祈祷)、(4) 日ノ晩ルノ行事、(5) 放散、(6) 四時ノ坐禅、(7) 土地神、(8) 祖師堂、(9)

御影堂、(10)鉢、(11)小施餓鬼、(12)祝聖之參、(13)鐘鼓之參、(14)小開  
 静ノ參、(15)大開静(ノ參)、(16)土地堂(ノ參)、(17)血脈參、(18)命  
 脈參、(19)經教參、(20)鉢ノ參、(21)拄杖之參、(22)扠子之參、(23)楊枝  
 之參、(24)「普通問訊」、(25)五六六蘊參、(26)鬚髮參、(27)飄袖參、  
 (28)手巾參、(29)襪子參、(30)履ノ參、(31)襪子參、(32)傘參、(33)草鞋、  
 (34)四大五蘊、(35)安坐点眼、(36)靈供參、亦靈供、(37)襪子參、(38)竜  
 天參、(39)廿一社順礼參、(40)没后作僧參、(41)中陰破壇參、(42)隔国  
 甲亡靈參、(43)吉方勸請參、(44)悪日連統參、(45)塔婆書后点眼參、  
 (46)塔婆參、(47)念誦參、(48)竜天參、(49)頂眼參、(50)持戒參、(51)宗旨  
 駕齋參、(52)香炉ノ參、(53)坐具參、(54)宗門松參、(55)鎮守之參、(56)  
 白山參、(57)竜天參、(58)念誦參、(59)理趣分參、(60)十三仏參(第一  
 不動、第二釈迦、第三文殊ノ境界、第四普賢ノ境界、第五地藏、  
 第六弥勒ノ境界、第七業師ノ本体、第八観音ノ全体、第九勢至  
 本体、第十阿弥陀本体、第十一阿闍仏ノ心、第十二大日ノ全身、  
 第十三虚空蔵)

しかしながら、鉄心御州が筆写した『佛家之大事』も、『仏  
 家一大事夜話』と同系統の本参であるが、『参禅切紙 後巻』  
 との関係は殆ど認められない。これは、智堂光紹の切紙相伝  
 が、鉄心御州からだけではないことに起因すると思われる。  
 『参禅切紙』には、相伝系譜を異にするの切紙が収載されて  
 いる。

(29) 廿九、續松之切紙

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

拈華微笑圓相 續松之切紙 同参禅 續松二本ノ圓相在之  
 續松ノ節者、十二処結也。十二処八、十二因縁也。

(図省略)

太宋宝慶元年天童山景德禪寺如淨和尚授道元和和尚了也

血脈不斷 圓相 續松ノ参

(22ウ)

師云、圓相ヲ云云。代云、混沌未分テ走。師云、血脈ノ一点ヲ  
 云云。代云一圓相ヲ處ク。師抄云、本来無一物。此何ヲ力處。  
 代云、一物無キ処力、人々ノ本命元辰ノ全駄子走。師云、夫レ  
 ナラバ、本命星ヲ云云。代云、無名無一物子走。師云、脈ヲ。  
 代、無実無際。師云、其句ヲ説破セヨ。代云、此命ヲ脉トシテ  
 得來リ、人々具足ノ眼睛子走。心八、命八是血日也。脉八是月  
 也。血脈ト云ハ、日月旦望ニ和合シテ、佛祖正傳シテ血脈トナ  
 ル也。師云、血脈相傳ヲ云云。代云、天毛無ク地毛無ク衆生毛  
 無イト相傳シテ走。師云、句ヲ。代云、雪繼深橋斷。心ハ、血  
 脉不斷、佛祖不到処、一圓相血脈一点也。是ヲ無相無形無念ノ  
 根本無一物不將來。又圓相ハ三世諸佛、道場中ノ一点八、佛祖  
 ノ駄種子也。此話頭一千七百則ノ外也。

先祖以來代々相傳シ來、今傳附了也。

勝國叟

(貼紙) 円月迄傳來如此 (23オ)

續松之参

云、袈裟ト衣ト衫ト、三ツヲ取り添エテ、續松ヲ拈スルゾ。呈  
 二三ツヲ一ツニ取り添羊ヲ。代云、三界唯一心。云、證據ヲ。

二七九

代、作「圓相」云、其意ヲ。代云、心ノ一字ヲ走。云、心ノ一字ガ圓相ダト云證抛ヲ。云、万般巧妙一圓空。云、三界唯心ト一々拳シ派ハ、心ノ一字ヲ肝要ト會ヲ成スゾ。一ツ目ヲ開イテ、續松ヲ抛擲セヨ。爰テハ辛勞ノ拳セ。心ノ一字ニ會ヲナスワ、地獄ダトキライ落ス也。爰ワ、師ノ前ヲ座具ヲホカト抛ウツテ、一心三界ト拳スナリ。勝國和尚以來如此。(23ウ)

(30) 世、下炬之切紙并下炬證文、

乾坤大地、一世界之儀也。知識之一大事也。

(図省略)

(24オ)

維那續松ニ火ニ付テ、振り消メ出ス処ヲ、師取テ急度拈メ作一圓相ヲ。心ハ、トボン出ス火ワ、消ヤスイゾ。急度拈メ作一圓相ヲ、燃灯ノ一灯、心火ノ示シ派タゾ。此ノ心ノ一火一灯ワ、釈迦ニモ達磨ニモ、師ニモ亡靈ニモ、地獄餓鬼畜生修羅人天、草木含靈共ニ二灯ニカ、ヤキ渡ツタゾ。万劫消エタ「ガ在ツテコソ。此ノ心得可レ為「肝要。心火ノ受用ガ三界ノ大導師ナリ。

勝國叟

續松下炬之證文切紙

釋尊現來 先續松下炬因縁者、周昭王四十二年至二月八日、年十九ニ於「四門」遊觀。見「四等」事、心有「悲喜」<sup>ル</sup>、而「欲」求「出家」<sup>ニ</sup>。自念言<sup>ク</sup>、即遁「城」去<sup>テ</sup>、於「檀特山中」<sup>ニ</sup>、修「道」發<sup>ス</sup>天

智光明。照十方世界(24ウ)地「涌」金蓮華、於二月八日明星出時、成佛號「天人師」。無救得三界衆生。徒「然」以來、拳「續」松「作」下火ヲ、以「實」相微妙正法、不出離火宅者、摧伏<sup>シ</sup>迷妄惡逆之心ヲ、而令<sup>レ</sup>至<sup>ラ</sup>菩提<sup>ノ</sup>道<sup>ニ</sup>者也。到<sup>リ</sup>後來未孫<sup>ニ</sup>迄<sup>テ</sup>、護<sup>リ</sup>此垂戒<sup>ヲ</sup>、為<sup>ス</sup>善知識<sup>者</sup>、續松<sup>ヲ</sup>參、下炬<sup>ヲ</sup>參、傳授悟<sup>了</sup>而了<sup>リ</sup>達三世<sup>ノ</sup>者、衲子者雖<sup>ニ</sup>然<sup>モ</sup>邪惡<sup>ニ</sup>妄念<sup>ノ</sup>士<sup>ト</sup>、觀照一刹那間<sup>ノ</sup>者、驪<sup>ニ</sup>惡心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>善根菩提<sup>ヲ</sup>者也。諦聽々々、善護持<sup>シ</sup>々々日本初祖永平開山從元和尚以來、當門到<sup>テ</sup>吾<sup>迄</sup>傳附<sup>シ</sup>畢。

徹骨山

上記は、続松関連の切紙であるが、龍穩寺系統ではあるが勝國良尊派下に相伝された切紙である。この一連の切紙がどういう経緯で光紹が相伝したのかは判然としないが、永平寺室中に相伝されてきた切紙は幾つかの異なる系統を内包するものであったと言える。

(33) 世三、達磨傳法偈、

問云、傳法偈無翻訳、及付法藏傳中無斯偈、以至諸家多說無拠、願垂至謂。答曰、噫、子孫支分是非鋒起。不能根究耳。只達磨大師入此土、已不會、唐言以何知之。初見梁武帝時對問、其事即知。乎後、又二祖可大師十年侍奉、以至立雪斷臂、志求祖業至勤誠。乎後達磨告曰、吾有一迦袈裟、付你為信也。必有疑者云、吾西天人、汝此土子也。得法實信耶。汝當以吾言證之。

又云、自釈迦聖師、至般若多羅、以及於我、傳衣表信、傳法留偈、吾今付汝。偈云、吾本來茲土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成。因引從上諸祖偈、一々授之内、傳法印以契證、心外「附」袈裟「以定」宗旨、

以此則知達磨二決乎。此便單傳口授、何假翻譯哉。達磨單傳心印、不立文字、直指人心、見性成佛矣。(27オ)

原忻在判

附與原訓畢

于時慶長十一丙午年吉辰

原設

附與原道

(34) 卅四、達磨知死期偈、

達磨大師謂三二祖三云、生死事大、無常迅速、汝還テ識ル也。惠可涕淚悲泣テ而云、吾未レ會、唯願ハ大慈大悲開テ甘露門、救ニ我ガ昏朦ヲ。師夜半ニ點テ松火ニ示ス此妙偈。汝聞キ思修ヲ、惠以能ク護持ノ嗣續ヲ、吾宗ニ云ク、南山月キ白ク元來水寒シ。偈ニ云、纒ニ覺ヲ玉池ニ無キヲ滴瀝シ、次キ於テ波底ニ取ル神光ヲ、無常ハ須ク聽ク體頭ノ敲ラ、得レ數ハ方ニ知ル幾日ニ亡スルヲ。右知ル所ロ玉池ニ無キ(27ウ)滴瀝シ者、不慮シ得レ病ヲ、口中ニ聚ル唾ヲ、指テ端ヲ見レ之ヲ、若シ無シ泡沫者、可レ知ニ定業ヲ。波底ニ取ル神光者、以レ指ヲ押テ眸ヲ散ラルカ星ヲ如シ。若シ無シ思ハ定業ト、聽ク體頭ノ敲ラ者、極月晦日ノ子ノ時キ、打テ頭ヲ敲ラ驗ニ十二月ヲ、若シ無シ音ト知ルニテ定業ト。玉池ハ唾也。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

波底ハ眸也。自レ古知レ之者、臨終ニ住テ正念ニ、能ク可ク信受シ。看經ノ之作法、極月晦日ノ夜、子ノ剋ニ先本則唱、坐禪廿一息而向ニ明ノ方ニ合掌ヲ念佛ヲ一百反、并シ般若心經三卷、消災咒一返也。其後チ以テ兩手ニ兩耳ヲ塞テ頭ヲ打ツ。先ニ月ヲ打ツ、次ニ日ヲ打ツ、次ニ時ヲ打ツ。音無キヲ其ノ時キ月ト知ル。此時有居用、口傳有之、能ク可ク傳者也。

生前死後、契約之切紙是也。無之可為片眼云々。又云、向ニ

此觀音經ヲ誦テ敲ラ打ツ、定業知共云也。

從如淨禪師傳附道元和尚畢、今於日本從巖山和尚附屬通幻寂靈

和尚畢

光紹傳附畢(28オ)

上記の切紙は、先に論じた知死期関連の切紙であるが、慶長十一年(一六〇六)に原設が原道へと附與したものであるから、やはり系譜を異にしている。永平寺における切紙の相伝については、その系譜を今後明確にしなくてはいけないと思われる。同時に、今回は論じられなかったが、その質と量(総体)についても考察すべきものと思う。

又、「円月迄傳來如此」との貼紙があり、又、これらの切紙は永平寺四二世円月江寂(一六九四—一七五〇、大智慧光禪師)まで相伝されたことが確認できる。江寂は、『參禪切紙 後卷』(智堂光紹書写、零本)に跋文を付しているのだが、古訓を有する十三件の断紙(切紙)以外を代語僧の臆説

であるとして、批判している。

此上下二冊、一百九十六件ノ之断ツカミ、皆代語僧ノ之臆説、佛經祖論ノ之未レ説カ也。但所列于下之十三件ハ、古訓有據、宜實文字差誤解而傳、列目如左。

- 一、自家ノ訓訣二卷ノ内ニアリ 有徳ヒ
- 一、國王授戒ノ作法一ノハノ括
- 一、榮西授經ノ儀軌九ノ括
- 一、施餓鬼ノ法九ノ括
- 一、嗣法ノ式一ノ括
- 一、義雲和尚坐禪ノ密語五ノ括
- 一、禪宗日本伝来ノ口訣
- 一、榮西ノ記文一ノノ括 八ノ括 八ノ括
- 一、達磨ノ一心戒二卷ノ内ニアリ
- 一、十佛名ノ科文一ノノ括 十ノ括
- 一、手形ノ古式テカクノ括 十ノ括
- 一、酒水ノ法一ノノ括
- 一、永平祖師ノ嗣書ノ口訣

延享二年(一七四七)乙丑之夏住山圓月誌之(印)圓月(印)江蘇(印)

太清撫國禪師、雖考正室中、断帛目録、一百九十六件上、而未到逐一辨眞偽定中、取捨焉。山僧再レ加考正。唯上十三件足レ以テ可信。其餘ハ玉石混雜。不違ニ悉考フル。又待他日、閑暇而已。

この圓月の所説は、面山の「永平寺室中断紙目録並引」洞上室内断紙棟非私記』所収)の所説と呼応しているように推察される。

大中寺・龍穩寺・總寧寺等関三刹から出世した高国英峻、鉄心御州、光紹智堂らの永平寺における活動は、後世代語禪として批判されることもなつた。永平寺所蔵史料に見る限

り、その先がけとなつたのは同寺三十八世承天則地であり、その著わした「舊本除却辨」には、以下のように見える。

此一本ハ者何人ノ所撰、爲レト偽書明ケシ焉、英俊小写シテ而禍及フ兒孫ニ、光紹不合カフ而將錯錯錯矣、予毎ニ管看スルニ相ニ似テ十二街頭失スレ斗ヲ、豈ニ聖賢、一言半句如レクニ是者、也、言句文字鄙陋暗昧、而非ニト大師ノ舌頭ニ必セリ矣、中間雜ツ入ス辨師ノ之着語、且ッ亦タ元師、直書懷辨在判ニ云々、不レバ見直書在判、争カ打破セシヤ疑團ニ也、後生舌頭古聖ノ金言折角弁レハ之各自ノ眼睛ニ也、後來ノ現住強欲ニ開見者請一鑑、而除却之ヲ可也、若シ亦不レ除却セ、尽未來際深鎖シテ而不レ入レ他見、然則ニハキニ宗旨ノ保護兒孫ノ奉重ト者乎、

舊本除却ノ辨併記ス焉

此、一本者、於テ天童室中、元祖ノ參得淨翁ノ印可ト云々、件件觸ニ犯テ、而相ニ似家醜揚レ外ニ也、正修行底古佛ノ眼睛、雖トモ我曾不ト會レ之ヲ、言句ノ鄙陋文字ノ不整、敢保是レ不正師ノ之舌頭ニ也、以テ這般ノ事ヲ弄レ得セハ、声ヲ誰カ立テ古人ノ下ノ風ニ也、論ニ書中不的之十一者、有レ米西記文ノ之拳着、且ッ以テ血脈ヲ爲レ傳法ノ之證、并ニ上足印可等非ニト天童室中ノ之語ニ明白ナリ也、淨翁以テ嗣書爲レト傳法ノ之證、今猶當山室中裡在ノ一書、世以テ所レ知ル也、血脉傳授ハ者、上古尤モ未曾有之説ナリ也、上足印可是レ亦不傳ノ之説也、榮俊先師與書ニ曰、元古佛直書懷辨傳授在判ニ云々、直書在判今何ヲ在焉、是レ不直書一不拜

見<sup>セ</sup>、難<sup>キ</sup>首肯<sup>シ</sup>一條<sup>ナリ</sup>也、同<sup>ク</sup>奥書<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、此<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>末<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>山代々、  
現住<sup>以</sup>ニ自<sup>ラ</sup>筆<sup>ヲ</sup>諱<sup>リ</sup>書<sup>テ</sup>趣<sup>キ</sup>來<sup>ル</sup>の嗣住<sup>山ノ</sup>之證<sup>ナリ</sup>也云々、此<sup>ノ</sup>論<sup>レ</sup>尤<sup>モ</sup>  
難<sup>シ</sup>會<sup>シ</sup>、有<sup>リ</sup>人々各自<sup>ノ</sup>法嗣<sup>書</sup>、且<sup>ツ</sup>現住<sup>世代</sup>者、白<sup>ク</sup>青天<sup>切</sup>  
紙<sup>傳</sup>底<sup>者</sup>、有<sup>リ</sup>二大事<sup>ノ</sup>在<sup>ル</sup>、何<sup>レ</sup>シ<sup>ハ</sup>抛<sup>リ</sup>此<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>伎<sup>也</sup>、  
細<sup>ク</sup>考<sup>スル</sup>、偽<sup>シ</sup>替<sup>シ</sup>淨<sup>元</sup>二大師<sup>ノ</sup>之勝<sup>躡</sup>而欲<sup>レ</sup>買<sup>フ</sup>卑<sup>名</sup>於<sup>レ</sup>後<sup>世</sup>、  
必<sup>シ</sup>矣、若<sup>シ</sup>夫<sup>レ</sup>道<sup>徳</sup>修<sup>功</sup>相<sup>當</sup>之<sup>レ</sup>言<sup>句</sup>カ<sup>カ</sup>歟、明<sup>智</sup>俊<sup>才</sup>折<sup>角</sup>之<sup>レ</sup>文<sup>法</sup>  
カ<sup>カ</sup>歟、然<sup>ル</sup>則<sup>レ</sup>秘<sup>シ</sup>而珍<sup>蔵</sup>スル<sup>モ</sup>亦<sup>カ</sup>可<sup>ク</sup>哉、言<sup>ク</sup>意<sup>不</sup>到<sup>、</sup>句<sup>々</sup>説<sup>不</sup>  
到<sup>、</sup>痛<sup>哉</sup>、觸<sup>レ</sup>犯<sup>ス</sup>二大師<sup>ヲ</sup>、可<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>潛<sup>偷</sup>之<sup>レ</sup>賊<sup>乎</sup>、俊<sup>老</sup>師<sup>質</sup>  
直<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>亂<sup>サ</sup>之<sup>レ</sup>清<sup>書</sup>添<sup>語</sup>、却<sup>レ</sup>禍<sup>ヲ</sup>及<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>宗<sup>旨</sup>、予<sup>再</sup>三<sup>看</sup>過<sup>、</sup>  
決<sup>シ</sup>而欲<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>然<sup>レ</sup>以<sup>スル</sup>ハ一<sup>己</sup>自<sup>得</sup>則<sup>辜</sup>負<sup>ス</sup>先<sup>師</sup>之<sup>レ</sup>矣、  
是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>堅<sup>封</sup>深<sup>鎖</sup>シテ而<sup>俟</sup>ツ、來<sup>開</sup>見<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>正<sup>眼</sup>睛<sup>耳</sup>已<sup>、</sup>冀<sup>ク</sup>ハ一<sup>見</sup>  
照<sup>破</sup>而<sup>除</sup>却<sup>ヲ</sup>焉、若<sup>シ</sup>亦<sup>タ</sup>不<sup>ニ</sup>ハ除<sup>却</sup>セ、尽<sup>未</sup>來<sup>際</sup>可<sup>シ</sup>深<sup>鎖</sup>也、  
及<sup>ニ</sup>他<sup>見</sup>則<sup>レ</sup>二大師<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>汚<sup>名</sup>、一<sup>宗</sup>門<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>垢<sup>染</sup>也、墮<sup>淚</sup>斷<sup>腸</sup>、  
慚<sup>愧</sup>不<sup>レ</sup>少<sup>、</sup>

予<sup>曾</sup>除<sup>キ</sup>二大師<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>諱<sup>、</sup>改<sup>メ</sup>二二<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>顛<sup>倒</sup>而題<sup>ス</sup>切<sup>紙</sup>名<sup>目</sup>、  
參<sup>ト</sup>、某<sup>手</sup>書<sup>置</sup>焉、臭<sup>氣</sup>猶<sup>在</sup>、不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>全<sup>擲</sup>者<sup>乎</sup>、平<sup>改</sup>  
書<sup>猶</sup>更<sup>ニ</sup>不<sup>通</sup>名<sup>字</sup>者<sup>筆</sup>記<sup>而</sup>若<sup>ク</sup>也、冀<sup>ク</sup>後<sup>賢</sup>改<sup>正</sup>焉、  
享<sup>保</sup>十<sup>三</sup>(一七二八)戊<sup>申</sup>歲<sup>十一月廿一日</sup>記<sup>封</sup>畢、  
現住<sup>三十八世末学比丘</sup>承<sup>天</sup>則<sup>地</sup>(花<sup>押</sup>)

上記のように、承天則地は高国や智堂を名指して批判してい  
る。

更に、永平寺所蔵『永平總目錄御州本参』の表紙見返しに

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

は、

此<sup>ノ</sup>題<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>吉祥<sup>山</sup>永<sup>平</sup>禅<sup>寺</sup>話<sup>頭</sup>之<sup>レ</sup>仮<sup>字</sup>書<sup>一</sup>冊<sup>ハ</sup>者<sup>、</sup>中<sup>古</sup>住<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>  
山<sup>ノ</sup>代<sup>語</sup>僧<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>述<sup>作</sup>スル<sup>、</sup>而<sup>ト</sup>固<sup>非</sup>下<sup>ニ</sup>承<sup>陽</sup>・二<sup>代</sup>・三<sup>代</sup>  
代<sup>等</sup>ノ<sup>レ</sup>時<sup>、</sup>伝<sup>ヘ</sup>之<sup>ヲ</sup>來<sup>有</sup>底<sup>也</sup>也、読<sup>ム</sup>者<sup>、</sup>宜<sup>ク</sup>考<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>時<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>  
知<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>而<sup>用</sup>否<sup>ト</sup>焉、  
延<sup>享</sup>二<sup>乙丑</sup>孟<sup>夏</sup>

住山円月誌之

とあり、江寂が、本書(吉祥山永平禅寺話頭之仮字書)を  
中古永平寺住山の代語僧による著述(偽作)として批判して  
いる。面山瑞方の代語禅(僧)批判の主張は、永平寺室中に  
相伝されてきた切紙・本参(「一大事因縁」)が途絶する一因  
をなしたものと言える。

注

- (1) 飯塚大展「林下曹洞宗における相伝史料研究序説(一) 永平寺所蔵史料(上)」(駒澤大學佛教學部研究紀要)第六六号、二〇〇八・三)
- (2) 飯塚大展「潔堂派切紙に関する一試論 常光寺史料を中  
心として」(駒澤大學禪研究所年報)第七号、一九九  
六・三)
- (3) 同右「潔堂派所伝の切紙について 常光寺蔵切紙の紹介」(駒澤大學大学院仏教学研究会年報)第二九号、一九  
九六・〇五)
- (3) 『第一回熊本美術展 寒巖派の歴史と美術』(熊本県立美術

- 館、一九八六)
- 水野覚禪『曹洞宗寒巖派の形成と展開に関する研究』(修士論文、一九九六)
- (4) 菅原昭英、『鎌倉時代の遺偈について 円爾にいたる臨終作法の系譜』(大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』所収、吉川弘文館、一九九三・六)
- 古田紹欽、『禅僧の遺偈』(春秋社、一九六五)
- 同右、『遺偈の書』(毎日新聞社、一九八一・一一)
- 柳田聖山、『禅の遺偈』(潮文社、一九七三)
- (5) 石川力山、『禅宗相伝資料の研究』上巻、第五章 葬祭・追善供養関係切紙
- 知死期偈関係切紙については、主として上記の論叢に依拠した。
- (6) 末木文美士、『高山寺所蔵禅籍小品について』(『平成六年度高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』、一九九五)
- (7) 『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻、No.52、建仁宋西千光禅师伝法儀軌(『廣瀬良弘解説』)
- (8) 本史料については、その成立に関して若干の問題がある。『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.24、以實附法状(『廣瀬良弘解説』)参照。私見によれば、祚棟は付法状と伝法偈を別個に授与していることから、本史料は、前半部は付法状の一部であり、後半は伝法偈である可能性を有する。
- (9) 『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.26、祚棟付法状(『廣瀬解説』)
- (10) 同右、No.27、祚棟伝法偈(『廣瀬解説』)
- (11) 注(1)参照。
- (12) 『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻、No.57、仏祖正伝菩薩戒作法(『No.58、同上』、『No.59、同上』)(『廣瀬解説』)
- (13) 石川力山、『禅宗相伝資料の研究』下巻、第六章 室内(嗣法・三物・血脈)関係切紙
- (14) 『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.39、切紙目録(『菅原昭英解説』)
- (15) 同右 第三巻、『No.14、伝授室中之物』(『菅原解説』)
- (16) 拙稿、『禅籍抄物研究(二)』、『大円禅師垂示夜話』を中心として、『駒澤大学佛教學部研究紀要』第六二号、二〇〇四・三)
- (17) 拙稿、『中世曹洞宗における本参研究序説(三)』(『峨山関連抄物と円応寺所蔵本参について』、『駒澤大学佛教學部論集』第三十号、一九九九・一〇)
- (18) 金田弘、『洞門抄物類書目解題』(『洞門抄物と国語研究』、桜楓社、一九七六)
- (19) 本書は、石川力山、『禅宗相伝資料の研究』上巻、第一篇「第二章 美濃竜泰寺所蔵の代語・門参資料」(法蔵館、二〇〇一・五)において、内容の分析が行われており、また「付録1 『仏家一大事夜話』として全文が翻刻されている。





43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
一、伝法義儀軌	一、七仏師承道場荘嚴切紙	一、多子塔前伝附作法	一、仏々相伝戒作法	一、洒入室中秘伝「則是訓訣也、二通」	一、七仏伝授作法	一、御大事看經回向	一、伝儀加行	一、上來之図	一、山門之図	一、合封之切紙	一、人々具足図	一、大(太力) 白蟻記	一、涅槃之作法	一、光明之迷	一、住吉大明神之切紙	一、耳口之偶血脈
(3) 伝法之儀軌		(43) 多子塔前伝附之作法	(13) 七仏伝授戒法之一枚紙(心田之語・五相之図)カ			(20) 御大事看經回向	(10) 伝儀加行		(33) 山門切紙	(45) 合封折角之切紙						
「(132) 室中儀軌參(カ)」	紙	(128) 多子塔前傳付作法切		「(41) 曹洞二種訓訣(カ)」		(104) 御大事看經回向切紙					(109) 人人具足図切紙		(36) 光明迷參			
直伝、普満韶室所持」					「(61) 七仏血脈図諸話頭根本あり」					(67) 合封切紙(從永平寺室中直伝、普満韶室所持)						
									(52) 山門切紙	(2) 「合封參」		(38) 太白蟻記			(28) 住吉五ヶ祭託宣	
秘訣、巻本也、(47)		(43) 同多子塔前伝付ノ作法、一枚										(49) 太白蟻記 晝冊				

58	一、永平寺參禪切紙目錄						
57	一、嗣法論	(2) 嗣法論	(138) 天童與道元問答嗣法論 妄說也		(16) 嗣法論大事		
56	一、嗣書伝授儀記、						
55	一、伝法儀式、						
54	一、法嗣儀記	(1) 嗣法之儀記				(37) 一、嗣法儀式、	
53	一、七仏伝授戒法一枚書、						
52	一、授戒之作法						
51	一、道場莊嚴儀式					(9) 一、道場莊嚴儀式	
50	一、御開山伝法儀式					(48) 開山伝法之作法 二卷	
49	一、伝授道場次第						
48	一、道場儀式						
47	一、道場莊嚴図	(21) 道場莊嚴之圖		[ (64) 檀家血脈行時道場莊嚴(從永平寺室中直伝、普満韶堂所持) ]			
46	一、伝底作法						
45	一、伝法儀式						
44	一、血脈道場儀式		(121) 血脈道場儀式				伝法之作法總目錄、 卷本也、(52) 当山伝 法之作法、一枚、紙 小結六ツ合、大把二 成、二ツ、

74	一、鉢盂之切紙		(17) 達磨知死期之秘密				
73	一、達磨知死期秘密						
72	一、八師之次第		(124) 八師次第切紙 伝法師伝戒師受戒師參学師言行師依止師学得師右妄説也				
71	一、住山之大事	(18) 住山之大事	(105) 住山大事切紙			(22) 住山眼大事	
70	一、一条紅線		(66) 濟下一条紅線切紙				
69	一、山門法衣大事						
68	一、十八般妙語						
67	一、正法眼藏切神						
66	一、嗣書焼却大事「二通」			(81) 嗣書焼却實裡紙(從永平寺室中直伝、普満韶堂所持)			
65	一、六祖半紙函「一通」		(11) 六祖示青原半紙大事				
64	一、安座点眼「四通」	(29) 安座点眼 (30) 開眼点眼切紙并塔婆点眼		(71) 塔婆点眼大事(鉄心御州普満韶堂、從永平室中直伝、寛文四年二月吉日)	(20) 安座点眼大事		
63	一、没後作僧切紙、						
62	一、宗門十八種劔						
61	一、三十四話切紙						
60	一、問訊之大事			(75) 問訊切紙(從永平寺室中直伝、普満韶堂所持)			
59	一、血脈袋大事	(17) 血脈袋之大事 (子狐卜毛)					

91	一、法衣伝授参	(33) 山門法衣之大事 法衣伝授之時参話	(28) 法衣伝授参話				
90	一、桐書地絹之様子	(4) 桐書地絹之様子	(111) 桐書地絹切紙				
89	一、二度伝授	(14) 二度伝授参	(107) 二度伝授切紙				
88	一、四処半夜図	(43) 四処半夜之図参					
87	一、永平一枚密語						
86	一、三國一位図	(9) 三國一位之血脈					
85	一、三老普門大事	(16) 三老普門大事 釈迦 文殊弥勒					
84	一、天竺一枚紙	(13) 天竺一枚紙	(57) 仏祖以前血脈天竺一枚截紙 (從永平寺室中直伝、普満韶堂所持)				
83	一、衣鉢血脈作法	(30) 衣鉢血脈伝授作法	(60) 衣鉢血脈伝授作法(從永平 寺室中直伝、普満韶堂所持)				
82	一、四句之文切紙	(39) 四句文之切紙	(52) 隨行無常四句切紙	(7) 四句文参			
81	一、四十九位之本位	(116) 四十九餅本位切紙					
80	一、牌当之大事	(49) 洞山門下牌当相 続之事	(19) 牌塔相続切紙	[ (85) 牌塔伝授截紙(從永平寺室 中直伝、普満韶堂所持) ]			(43) 一、牌塔伝授之 切紙 壹枚
79	一、三悟道一位図	(86) 三悟道同切紙					
78	一、嗣法論始終						
77	一、宋西記文			(39) 樂西記文			
76	一、日用行参作法		(58) 日用行参作法祝聖切紙(從 永平寺室中直伝、普満韶堂所持)	(48) 祝聖切紙			
75	一、龍天勸破図						

92	一、袈裟之大事	(25) 袈裟大事圖	(53) 袈裟大事(從永平寺室中直 伝 普満留室所持)		
93	一、襪子之切紙	(55) 襪子切紙			
94	一、仏頂上円相切紙	(42) 仏頂上圓相切紙		(1) 圓相參、(25) 血脈圓相大事	
95	一、鷲鷲切紙	(56) 鷲鷲切紙		(56) 御影画像書様	
96	一、御影切紙				
97	一、勃陀勃地切紙「三通」	(35) 勃陀勃地断紙		(8) 勃陀勃地參	
98	一、宗旨秘書	(63) 宗旨秘書			
99	一、住持焼香切紙	(72) 住持焼香切紙			
100	一、曹洞八圍図「三通」	(33) 曹山八圍図			
101	一、白蛇之切紙	(28) 白蛇切紙(帰朝 本則)			
102	一、漆下之御大事				
103	一、松竹梅之切紙				
104	一、林際曹洞兩派血脈	(65) 臨濟曹洞兩派血脈			
105	一、鎮守之切紙	(25) 鎮守切紙	(51) 鎮守切紙	(12) 鎮守參、(31) 鎮守之參	
106	一、靈供之切紙	(70) 亡者靈供切紙 (71) 亡者靈供切紙 轟前 熱田明神二上ルコト本地 不動明王下云コト	(84) 靈供秘極(從永平寺室中直 伝 普満留室所持)		

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

121	120		119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107
一、七伝血脈図「二通」	一、宋西僧正記文録		一、文殊手内一巻經	一、祖師禪切紙 5ニモアリ	之図 一、達磨一心戒儀同十戒	一、嗣書相伝巻	一、善知識切紙	一、十三仏之切紙	一、非人亡者結縁大事	一、拈花微笑之図「七通」	一、剣刃上之切紙	一、香巖樹上切紙「二通」	一、戒文参「二通」	一、拈毒瞎之切紙	一、最極無上之大事
									(50) 非人亡者之事						
(1) 過去七伝血脈			(13) 文殊手内一巻經 一名仏説三身寿量無辺經 コレ偽経ナリ	(93) 祖師禪切紙 「外に(92) 祖師禪嫌道話 切紙あり」			(57) 善知識切紙	(115) 十三仏血脈切紙		(46) 拈華微笑訣参 他家 訓訣邪解カナ抄ナリ	(84) 剣刃上切紙	(85) 天童山樹上切紙 大極下五位ノコト(力カ)	(23) 戒文伝授参 代語 (24) 戒文拈提参 代語	(100) 拈毒瞎三事切紙	(40) 仏祖正伝菩薩戒血脈 最極上大事
(61) 七伝血脈図諸話頭根本(鉄心)												(59) 「香巖樹上話(仮題)」(従永 平寺室中直伝 普満韶堂所持)			

137	一、身心脱落		〔外に〕(88) 脱落脱落切紙		
136	一、君公書		(99) 君公書切紙		
135	一、四恩之參		(122) 四恩參		
134	一、御開山黒衣之由来		(64) 元和尚黒衣由来		
133	一、伝法偈〔三通〕	(24) 遺誠之偈			
132	一、遺戒之偈		(106) 遺誠偈大專		
131	一、臨終人問答	(7) 十仏名切紙			
130	一、十仏名之大事切紙				
129	下段 一、大藏法教略要之図之				
128	一、緒環之參		(31) 緒環之參		
127	一、洒下印可切紙				
126	一、応身之録		(2) 応身録		
125	一、一中十位抄	切紙	(38) 一中十位切紙		
124	一、白山妙理大権現切紙 〔三通〕	(31) 山神授戒 白山 也、様子ト図アリ (32) 白山妙理大権現	(6) 白山妙理断紙	(65) 龍天授戒作法(鉄心御州 普満韶堂、從永平室中直伝) (74) 龍天血脈(從永平寺室中直 伝、普満韶堂所持)	
123	一、九六三之大事				
122	一、達磨三安心図〔二通〕			御州 普満韶堂、從永平室中直伝 (62) 過去心字血脈(大事)(鉄心御 州 普満韶堂、從永平室中直伝)	

150	一、御開山嗣書切紙		(17) 道元嗣書不同切紙 (力)			
149	一、七堂之図		(39) 七堂伽藍図切紙			
148	一、皇城中一社巡礼之切紙					
147	一、五位別紙	(26) 五位之別紙亦五 体五輪之図	(14) 洞山五位切紙 亦名 五体五輪図 (力)			
146	一、三位三裏図		(96) 州奥村切紙			
145	一、白山妙理之図」并參 禪」					
144	一、二句之偶嗣書」十通」 之」三通」		(68) 二句偶嗣書 周穆王 達磨聖徳太子 「外に(69)二句偶伝授血 脈並十如是大事あり」	(15) 二句偶參		
143	一、卵形之血脈并參禪有 之」三通」	(15) 仏祖正伝正法眼 藏血脈	(62) 大陽卵形昇龍図断紙			
142	一、正法眼藏血脈					
141	一、誰之図大事		(102) 誰図大事黒円			
140	一、晦朔弦望之図切紙		(123) 晦朔弦印切紙 月図			
139	一、十宗之弁別					
138	一、銀錢馬形之秘書	(40) 身心脱落	(74) 銀錢馬形切紙 り」	(89) 脱落身心 初・あ		

166	別鈔切紙 一、三國伝灯切紙						
165	一、三國流伝乾栗陀耶差						
164	一、三國流伝書		(12) 三國流伝之図	伝 普満韶堂所持			
163	一、統松秘要 切紙		(53) 統松秘要參 「外上(54)統松切紙あり」	(54) 統松截紙(從永平寺室中直 傳 普満韶堂所持)	(29) 統松之切紙、		
162	一、銀相(箱力)鑊子之 切紙	(44) 銀箱鑊子之切紙	(77) 銀箱鑊子切紙		(40) 太陽玄銀箱鑊子		
161	一、諸仏影像抜精之一紙						
160	一、無之切紙「二通」	(38) 無之切紙					
159	一、參禅掃地之切紙「二 通」						
158	一、三宝印之大事「二 通」	(8) 三宝印(嗣法之 印籠相伝時之一紙) (9) 三宝印之大事	(79) 三宝印切紙 (80) 三宝印大事				
157	一、十智同真		(114) 十智同真切紙				
156	一、太陽真贊		(22) 太陽真贊參話				
155	一、洞山价尊像						
154	一、林際三句切紙		(83) 臨濟三句切紙				
153	一、頂相之大事						
152	一、大善知識頂上之達切紙		(47) 大善知識頂上三世了 達圓満一・切紙				
151	一、福田衣		(32) 福田衣之參	(72) 福田衣切紙(從永平寺室中 直伝、普満韶堂所持)			

駒澤大学図書館所蔵『室中切紙謄写』

室中切紙写

(1) 嗣法之儀軌 或八巨望礼類ト云 口傳授大率

一、疊安 嗣書ヲ疊テ安置スル事也

一、同九 師弟共ニ同時ニ九拜之事也

一、六三 六拜・三拜スレバ九拜ニ當ル也

一、奇拜 奇ハ異也、不偶、非常之拜ノ意ニシテ

一、豎繼 座具ヲ豎ニ繼グ、座具ノ端ヲ重テ繼グ

一、横繼 座具ヲ横ニ繼グ、座具ノ長ヲ重テ繼グ

一、無住拜 尽期モ無ク拜スルヲ云ベシ、今ハ二十五拜スレバ

師命住ベシ

一、六膝行 六ハ六拜也、膝行ノ意、七重ノ膝ヲ八重ニ折ル意

也

一、資 弟子之事也

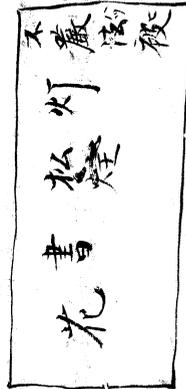
一、法嗣 傳戒之料綱ハ六尺二寸也、刀尺ニ定ベシ、恭敬之心也

端ノ長キハ、尊重ト口傳スル也、是ハ摩頂之儀式之導場也

(1ウ)

図(1) 嗣法儀軌

道場  
莊嚴  
之圖



右永平母九世光紹花輝

(2オ)

(2) 嗣法論 文字前後不穩當 天童如淨與道元問

答 文段不分明、下巻論ト可ニ合看、下巻有レ之

能ベシ

曹洞家天童如淨禪師道元和尚嗣法論

師問、如何は一箇ノ柱杖、元云、人々具足、師云、具足ニ看

元云、言語尽ク、元便立、師便礼、師又問、如何是露柱ノ一

句、元云、六根六具、師云、直<sup>ニ</sup>具足<sup>ス</sup>也、元云、答<sup>ハ</sup>在<sup>レ</sup>問處  
 一、師云、道々、元便喝、師云、是何<sup>ノ</sup>、元便拂袖<sup>シテ</sup>去<sup>ル</sup>、師  
 云、如何是即心即佛、元云、鏡裡<sup>ノ</sup>像、師云、(2ウ)如何是  
 明鏡辺、元云、古鏡<sup>ヲ</sup>磨<sup>ク</sup>、師云、磨<sup>ク</sup>何<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>落<sup>テ</sup>在<sup>ス</sup>、元云、  
 破鏡、師云、彼<sup>ノ</sup>落處<sup>ヲ</sup>道、元云、火中水、師云、其時節作  
 麼生、元便<sup>テ</sup>放身、師礼<sup>ス</sup>、師又問、如何是一<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>真性、元云、  
 電光智了<sup>ノ</sup>劍、師云、在<sup>レ</sup>何處、元云、正智得、師云、會處  
 如何、元云、天地同根、万物一<sup>ノ</sup>躰、師云、會<sup>ス</sup>乎々々、元  
 阿々大笑、師云、是誰人<sup>ノ</sup>章句<sup>ノ</sup>、元立拜<sup>ス</sup>、師座<sup>テ</sup>授<sup>ニ</sup>拄杖、  
 師又問、(3オ)如何是龜毛<sup>ノ</sup>拂子、兔角拄杖、喚<sup>ク</sup>何<sup>ト</sup>道<sup>ノ</sup>、  
 元云、世界恁麼<sup>ニ</sup>廣、師云、其外指頭上在一言、一指拳直、  
 道々、師又問、如何是拂子上<sup>ノ</sup>一句、元云、吾<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>一言、  
 師云、元言時授<sup>ニ</sup>白拂子<sup>ヲ</sup>、師又問、如何是三尺竹箇、元云、  
 問話者<sup>ハ</sup>喫<sup>レ</sup>棒、師云、不恁麼時如何、元云、三日前五日後、  
 師云、前後際斷時如何、元云、不會、師云、為甚麼不會、元  
 云、唯為不<sup>レ</sup>開、師便下座、而授<sup>ニ</sup>(3ウ)竹箇<sup>ヲ</sup>畢、元九拜  
 珍重、

右延文元年八月(出カ) 正日在妙莊嚴院傳<sup>レ</sup>之

永平住光紹叟

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(3) 傳法之儀軌

燭 敷座具、書詞疏了、連了、其下<sup>ニ</sup>師傳授之儀<sup>ヲ</sup>、師之自筆<sup>ニ</sup>  
 香<sup>ヲ</sup>書入、年号日付判<sup>シ</sup>了<sup>テ</sup>、嗣疏(4オ)ヲ疊<sup>セ</sup>、次儀  
 花軌・戒本ヲ傳授<sup>シ</sup>了<sup>テ</sup>、儀軌・戒本ノ與<sup>ニ</sup>、年号・日  
 付・師号・在判也、次<sup>ニ</sup>新礼席<sup>ヲ</sup>展<sup>テ</sup>、其上<sup>ニ</sup>弟子ノ袈裟<sup>ヲ</sup>敷  
 ク、裏<sup>ヲ</sup>面<sup>ニ</sup>敷<sup>キ</sup>也、其上<sup>ニ</sup>和尚与弟子對座<sup>シテ</sup>、九拜<sup>ス</sup>、和尚  
 合掌<sup>シ</sup>、弟子三合掌<sup>ス</sup>、和尚ノ一指<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>、弟子ノ指<sup>ヲ</sup>按<sup>テ</sup>  
 曰、佛々祖々、授手相傳、只是々、云了、亦弟子ノ指<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>、  
 和尚ノ指<sup>ヲ</sup>按<sup>テ</sup>曰、佛々祖々、授手相傳、只是々、云(4ウ)  
 了、三拜<sup>シテ</sup>跪座<sup>ス</sup>、サテ、師、嗣疏ヲ弟子<sup>ニ</sup>渡<sup>ク</sup>、則再<sup>ニ</sup>頂戴  
 而、胸<sup>ノ</sup>引合<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>三拜<sup>ス</sup>、次<sup>ニ</sup>弟子、和尚前<sup>ニ</sup>跪坐<sup>スル</sup>時、師  
 法衣<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>捧<sup>テ</sup>曰、此是曩祖大福田衣、今傳授<sup>ニ</sup>弟子<sup>止</sup>、廣度群生  
 化々莫令斷絶、唱了、弟子取、頂戴<sup>シ</sup>了、傍置、三拜也、黃梅  
 夜半、五祖、六祖<sup>ノ</sup>傳受之次第、如是也、  
 住持<sup>ハ</sup>南面、弟子<sup>ハ</sup>北面<sup>ニ</sup>座<sup>ス</sup>、此時<sup>ハ</sup>、花松一本立也、(5オ)  
 下草不可在之也、  
 光紹叟花押

(4) 嗣書地絹之様子

受書名  
新某甲

釋迦牟尼佛勃陀勃地 摩訶迦葉勃陀勃地

(5ウ)

圖相縱橫圖轉兒、無始無終、自在縱橫故也、即是云、蓮華法蓋也、佛祖命脈證契也、即通嗣書、如此可書、

通即 某甲 即通

御料梅花紋織様子、長六尺二寸、鷹計定也、織付花之紋之間、大槩如此、



(6才)

天童相傳

道元謹拜書

(5) 傳授前巡堂之次第

向諸堂祈念、無別事、生死事大、無常迅速、經并咒者、任スル意也、巡堂了而、回向沙門某、一七日、二七日、三七日、之中、無難・無・無・無、此願成就、  
常ニ為弘戒律、令見高人、永作佛法棟梁、與佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜、  
生死事大、無常迅速、常可唱也、

是巡堂之儀式也

勅吉祥山永平二十六世萬照高國禪師

与建國主翁

(6) 佛布施之法

奉請過「佛、五百文、機世歷代祖師、五百文(7才)

奉請護「天善神、佛法棟梁白山妙理大権現、伊勢天照皇大神宮、稻荷大明神、當山鎮守、當境旺化靈神、當山土地、當山龍王等、總五百文

畢竟者五百文也、

考田切紙等考田切紙等可見  
考田之大事、以五百金、作五葉蓮華、奉二然燈佛出世、得二授記トアリ、

与建國主翁(7ウ)

(7) 十佛名切紙

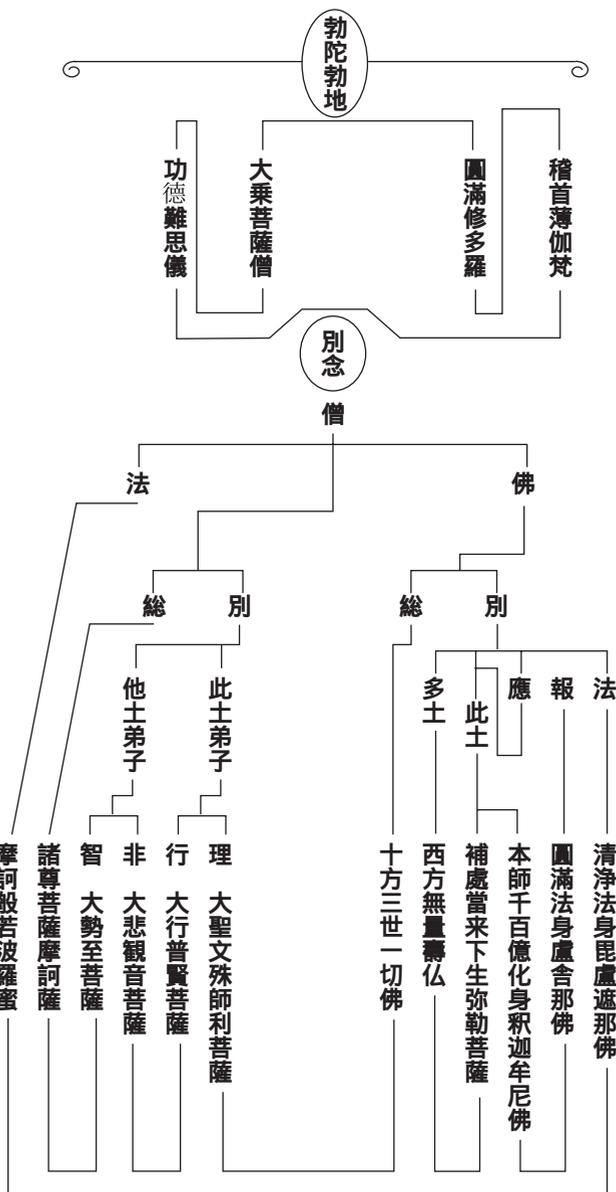
図(3) 十佛名切紙



十佛名切紙... 詳出公不三和詩之明因亦... 而別録行之同持線如石... 終制日比丘度誌

(7) 十佛名切紙

道安法師傳云、今僧食時取法現未及二士大弟子為十声餘  
為々結句下、或八時之放數而、缺其不念過者



十佛名古來法師不詳出處、不二和訪之明國、亦未分曉拾返、安法  
師、別錄待之、固 線石癸丑結制日比丘一度誌

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(8) 三寶印 永明叟花押  
嗣法之印籠相傳時之一紙



御州在判

附与 光紹老衲 花押 (8ウ)

(9) 三寶印大支

三寶印 印可之參

師云、三宝ヲ、代、佛法僧ヲ窮ルガ、宝テ走、師云、印可ヲ、  
 代、師前ニ至テ云、和尚、大慈大悲哀愍、聴許ナラバ、印可  
 シ玉ヘ、師右ノ手テ、學ノ頭ヲツカントテ、印判ヲツク模様ヲ  
 ナシテ云、黄河從源頭濁了、汝能護持セ、(9オ) 同印可參、  
 師云、宝印ヲ、代、印判ヲ持スルノ模様ヲナシテ云、宝印當  
 空妙、重々錦縫開、師云、言句不渡空處ヲ、代、手開  
 模様ヲナシテ云、開拳無二物、應用曾不欠、口傳云、  
 印ヲツイテ不起シ、三皈依唱ヘテ、印ヲ起シサマニ、黄河  
 從頭濁了ト云也、是縱橫無碍之印ト云也、三皈依、南無皈

依佛、南無皈依法、南無皈依僧 (9ウ)

御州在判

附与 光紹老衲 花押

(10) 傳儀加行

兼日定日一七日

- 一、 嗣書儀 勃陀勃地ト云者、  
成等正覺儀也、成等正覺ト云者、唯佛與佛之儀也、(10オ)
  - 一、 上連リ結目終而始儀也、
  - 一、 迦葉師弟三人之名ト云者、  
師書處也、同連也、
  - 一、 嗣書之支者、師之所書也、
  - 一、 始ハ縱ニ續ニ、終ハ橫ニ續ニ也、
- 永平住永明叟 花押 (10ウ)

(11) 面受之參

傳授三日已後之參

面受之參ヲ、代、資師ニ向テ合掌シテ云、「マカ」トウト、師云  
 其ノ的ノ句ヲ、代、十世古今始終不相離、師云、看經話ヲ、代  
 資、向師合掌ト云、南無佛陀耶、南無達磨耶、南無僧伽耶、  
 南無觀世音菩薩、南無本師釈迦牟尼佛、(11オ)  
 第七十九世御州大和尚法乳之恩報シタテマツル、

〔釈〕〔定書〕 迦師 淨名老毘耶摩竭心相照 此句キリシテ朱書ハ、

御州在判

附與 光紹老衲 花押

(12) 宗旨秘書 道元和尚大梅和尚夢見五由來

嗣書様、嗣法佛々祖々は證契即通也、單傳也、無上菩提也、不レ到レ佛陀佛地一輩莫印證、佛々(11ウ)祖々得レ印證一則無師獨悟也、又佛々祖々證契即通也、佛々祖々或令得皮肉骨髓嗣法、或法衣・應器・座具・宝瓶・拄杖・白拂・洒水器・松枝・續松不遺一物授畢時、以レ指血一嗣書故名一血脉云々、

嗣書様子 永平和尚在二大宋國一時、感二夢一相〔釋〕、大梅法常禪師ヲホシキ、ト覺二敷一在二高僧一、向レ吾梅花一枝一棒〔釋〕吾語云、若テ既二越一船舷一、實人成、莫レ惜花、謂テ与二梅花一夢〔12オ〕相感、夢中吟云、未レ跨一船舷時、好二与一三十棒、然レ不レ經一機日一、淨老云、元老既二跨一船舷來、為レ汝嗣書付与二衣一仰出也、亦故二曹洞宗旨一之嗣書地ハ、落地之梅花也、紋ノ白地也、長五尺也、表二五智如来一滿足十地也、忝二試一兼二大梅和尚一之教處矣、不思儀不可說々々、夢相二符合一之間、道元和和尚深信感而奉嗣書請也、然何元和尚、從二大宋國一皈朝時節、天童之路程在二(12ウ)大梅山護聖禪寺一、彼寺元和和尚作二一宿夜半計一、大梅祖師ト覺二老僧來即一一枝梅花一棒〔釋〕与レ吾、其梅花縱橫五尺餘、榮夢相

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

感、元和尚即觀而云、梅花是吾家之優曇華也、心花也、元和尚皈朝ヨリ后来、諸大祖師皆以嗣書奉レ請レ之云々、四家嗣書ハ異也、當頭和尚以四脉儀被二嗣書一、今則吾子參レ吾一不合、不二嗣書相傳一云々、今則可レ知曹溪血氣、忝モ青原淨血二(13オ)和合一、青原淨血ハ親曹溪淨血二和合一而以來面々印證即通也、非レ餘一祖及處、吾宗之佛祖正傳血脉之儀也、先師古佛堂〔釋〕和尚示云、諸佛必在嗣法云々、

于時仁治一辛丑年三月廿七日於觀音道利興聖寶林禪寺、入宋傳法沙門道元記

寛元二年甲辰年二月二日懷并書之、

永明叟花押(14オ)

(13) 七佛傳授戒法之一枚書 心田之話 五相之圖

七佛嫡傳命脈心田之話 悟上參師ト而印心也 妙明之圖ト毛傳之 稱薄曇之大支ト、  
本地風光心田之境界、示曰、如何是本地風光、請一轉語、退云、廓而無際、心月孤圓〔釋〕光含万像、撈云、如何是這箇一心、良久云、匹上不足、匹下有餘、示曰、這箇心在二甚麼處一、良久云、一粒有荒田、不耕苗自秀、撈云、出處且得、如何是入處、良久云、一粒粟中藏世界、示云、(14オ)出處入處且得、如何是這箇田地、直下當胸〔釋〕叉手、撈云、正恁麼時如何、叉手〔釋〕云、豎窮三際、橫遍十方、云曰、如レ是本分境界、良久云、一心一處座八万四千劫、撈云、既レ是心田之境界、為

甚麼隨二限量一、乃云、行到水窮處、謂内大、外小、(半)座視雲起時、撈云、畢竟一句道將來、退云、如淨琉璃中内、像、示曰、心田之分

處如何得承當、振威一喝、撈云、時如何、展開兩手云、琉璃瓶破漿水(14ウ)逆、師云、善哉々々、乃九拜珍重、

五相之圖、洞谷和尚云、大極者、天地未分前也、元氣混而一也、謂之、太初一レ大也、謂之、妙明田地也、是乃本地風

光心地境界也、七佛相承大支也、云々、私云、天地未分之前混沌如鷄子云々、

一陰也、是心也、田也、紫微震輻綠苔封、天關地軸、天<sub>ハ</sub>旋地<sub>ハ</sub>右旋、自上見左旋也、自下見右轉也、

一陽也、是心也、田也、一也、半夜一轉也縱橫妙展無私化、

是同上、左展右轉仕君看、四方八面俱玲瓏、混沌初分)半夜天、(15オ)

陰也、混沌未分境界皆無色受、空生那群地心、

・陽也、混沌初分界也、達者暗裡驚、混沌初分半夜天、

威音一箭射虛空、這个一箭者吾道、一以貫之哉云々、御判云一者、心也、以天地万物、納吾之方寸丹田也、是一靈性也、

貫者、始終以此一透徹、故曰、貫也、天地万物理一串穿却而不可殘境界、所以上ノ句云、一心一處座<sub>ハ</sub>、八万四千塵勞妄

想、万物理一串貫通三千(15ウ)刹界、一草一木尽是以一靈之心性也矣、王道者、以忠恕之二句一貫而已、一心無私處、

豈非一貫之心<sub>乎</sub>哉、

右是悟上得悟之參話也、於未徹者、夢々不可傳授、必可蒙天罰也、故先聖漫不許也、可秘々々、

永平住光紹叟 花押

(14) 二度傳授<sub>參</sub>

獅子咬人時如何、答云、五老峰前、(16オ)師云、獅子咬様於、學云、惡知惡逆咬尽而走、師云、其<sub>レ</sub>八何<sub>レ</sub>トテ、答云、大知之發<sub>スル</sub>末境テ走、師云、發處<sub>ヲ</sub>、此安山点倒露柱力叫<sub>ン</sub>テ走、師云、答話之機於、云、五老峰前<sub>ト</sub>喚起サ又已前<sub>テ</sub>走、師云、着<sub>テ</sub>話<sub>ト</sub>於、空劫已前更已前、

五老峰前之五<sub>編</sub>次第也(16ウ)

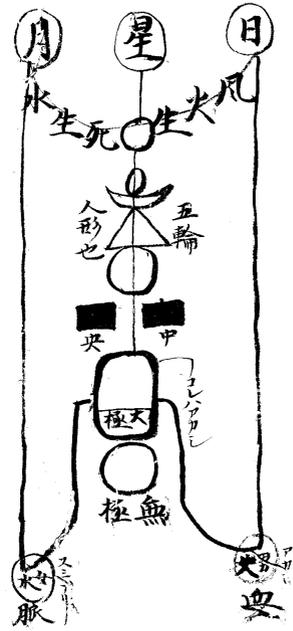
二度傳授是也

永平住永明叟 花押

(15) 佛祖正傳正法眼藏血脉(17オ)

三種<sub>ノ</sub>大叟也、白山妙理權現<sub>ノ</sub>三也、月<sub>ノ</sub>居<sub>ル</sub>處<sub>ニ</sub>日在、日居<sub>ル</sub>處<sub>ニ</sub>月在、星<sub>ハ</sub>今上當君也、日月無<sub>二</sub>也、日月無<sub>二</sub>父母也、無<sub>二</sub>也、一合二而三世諸佛<sub>モ</sub>出生代々榮也、

圖(4) 佛祖正傳正法眼藏血脈



偏正・死活・明暗・目前・自己・四料簡・四喝・照用・五帝・八句・十八問・顯密・迷悟・凡聖・不出斯內・根本外・森羅万像悉在之、(17ウ)

(16) 嗣書袋圖 并并字寸尺

嗣書袋之圖

- 一、豎之短四寸七分、是者、那边至極不覺不知也、不識上之
  - 一句、那边<sub>ニ</sub>不留、此大意、一氣之大極之点处、更不覺也、
  - 自<sub>ニ</sub>那边<sub>ニ</sub>重上也、是通也、此不識上一句也、
  - 一、横長五寸二分、都自<sub>ニ</sub>兀上<sub>ニ</sub>不足、兀下<sub>ニ</sub>餘有<sub>リ</sub>云々、
- (18オ)
- 一、竹篔之本長三尺二寸二分、竹之廣五分、中節<sub>ニ</sub>甚黒、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

サキヲ少シ圖、本ヲ一文字<sub>ニ</sub>切也、  
一、拂子之作法、一尺九寸八分、二尺<sub>ニ</sub>不足、畢竟忌十成之儀也、  
天童老和尚示和尚在判、

年号月日 永明叟 花押、

(17) 血脈袋之大支 又小狐上モ (18ウ)

血脈袋三者、小狐本也、其故者、稻荷大明神守護當家之佛法御誓願<sub>ニ</sub>間、如是地者、赤地也、七重入候支者、大小便不離身可懸申一候也、無<sub>ニ</sub>左様<sub>ニ</sub>者、違不淨也、可恐不淨也、風呂之間、御供湯藥侍者御連候者、風呂之間、可為懸也、自餘不離身云々、

地絹者、六尺二寸 二長也、(19オ)

血脈袋長四寸七分、横三寸五分可作

為後代可添嗣書可秘々々

永平開山記之給也、永平住光紹叟 花押

(18) 住山之支

兼中到圖也

重離圖

黒圖地

是住山之眼也、 (19オ)

傳後相續一大支因縁也

永明叟 花押

(19) 施餓鬼之切紙

施餓鬼焼香之次第

- 一、進前焼香而揖而無量壽佛之尊号三返低声唱云、
- 二、南無薩婆時、酒水之印在、大姆指屈四指ラ立様子在之、
- 三、南無蘊婆時、開口之印、彈指三下、(20オ)
- 四、南無三曼哆ト時、飽滿ノ印、五指ヲ立、圓相ヲ成コト三相、
- 五、神咒加持之時、飯取加持、乾坤印而、
- 六、汝等鬼神咒之時、柵之外ニ抛却テ洗米、同支ニ百味之飯食、雖柵上備不加持ニ者、諸之餓鬼見炎、与不能食、依之如是之作法在之者也、

永明叟 花押

(20) 御支覆羅 (20ウ)

御守之祈禱之支、毎日可成之者也、

心經一卷、大悲呪咒一返、消災神咒三返、合掌而南無彌々相承御血脈上段・中段・下段、洞家濟家祖師、只願沙門某佛宝成就、法宝成就、僧宝成就、自利々他成就、法孫繁昌、身心堅固、謹戒成就、災難消滅、檀信歸(兼)、諸縁吉利者十方密、御守用心之支、

右毎月一度龍天、看經次、又ハ先師之日ニ、身心清淨シテ (21オ)

於ニ無レ入室ニ、座具展其上ニ、守ヲ開テ能ク奉レ見、切紙ヲ一々ニ拜見、佛祖ノ恩難有、師恩難有、師不依争如斯大支可レ傳、

感淚流肝膽徹ク可、如是致セバ、如何様之支モ在リ、失トモ空ニ転シテ調ル羊ノ覺也、此信心ニ依マ、自然ニ冥加至、出世可レ來、

亦邪念惡心モ消滅、佛法增長、佛祖三寶モ不招、守護加給者也、只世支名利不折、佛法成就ト一心志在レバ、世福隨レ分在、予カ指南法孫、未來永劫如此一身可レ為建立 (21ウ) 肝要

少モ邪念惡心・破戒無慚之心在ラバ、今生ニ後生ニ佛罰法罰、世々生々、無間地獄可レ墮、返々隙明モ是迄ト思不可、一切經、

文字サヤ、一世ニ成ルマシキ、祖々先達ノ諸話頭、本位終劫始劫難窮、無智無能、亦世支万支不如意、先世修行拙キ故也、悔

恨正直法慈悲ヲ本トシ、時々能クナルヲ善知識ト知也、常ニ行住坐臥、拳手動足、是何物、出息入息甚麼物、常ニ自性住セバ即佛体也、云々、(22オ)

永平住光紹叟 花押

(21) 道場莊嚴之圖

受テ命之後、一七日ノ間、諸堂焼香礼拜、三時無懈怠可動也、其余祈念勤行、須勇猫精進、當其夜黄昏ノ以後、着淨衣具ニ威儀、及半夜ニ潛ニ上ニ方丈ニ、

道場莊嚴之樣



釈迦牟尼佛遺戒之偈、

如法修行、

正<sup>(德)</sup>憶念、

皆是佛子云々、

正憶念者、夜半心也、

故夜半之云傳也、

此<sup>(24)</sup>支千佛之護持所、曇祖之傳來所、(27才)

我今授汝、々從今身至佛身能護持、云々、

御州在判

附与 光紹老衲 花押

(25) 鎮守切紙

無業和尚曰、莫忘相、万法實相見、凡夫妄相、万法皆是無常見、小乘妄相、万法上常見断<sup>ト</sup>見<sup>ル</sup>、外道妄相、如幻即空見、圓覺妄相、中道實相悟、菩薩妄相、(27ウ) 教外別傳見、禪魔之妄相、此外皆莫忘相見、亦是忘相故忘相、故一<sup>(27)</sup>生道莫妄相是、



逆順縱橫、無碍自在心、圓通大虛、三界唯一心、一圓空也、師云、神之前、饒堂<sup>ヲ</sup>、代、順<sup>(代)</sup>迴<sup>(代)</sup>テ走、師云、諸佛如来<sup>ヲ</sup>前、逆<sup>(代)</sup>迴<sup>(代)</sup>テ走、佛心宗<sup>ヲ</sup>テ八、地獄<sup>ト</sup>出<sup>テ</sup>タガ、順<sup>ヲ</sup>タソ、逆<sup>(代)</sup>

才) 色黒、サキヲ少シ圓、本ヲ一文字二切也、

一、拂子之作法、一尺九寸九分、二寸二不足、畢竟忌十成之儀也、

天童老和尚示 在判

年号月日 永明叟 花押

(23) 竹篋切紙

元和尚拜問、竹篋謂者何<sup>(23)</sup>哉、淨和尚答之、竹(25ウ) 篋謂者、南天竺竹峰山一大惡獅子<sup>(23)</sup>在之、彼獅子之名謂<sup>(23)</sup>篋破、彼篋破欲<sup>(23)</sup>動<sup>(23)</sup>輪<sup>(23)</sup>、驚<sup>(23)</sup>天動<sup>(23)</sup>地食<sup>(23)</sup>殺<sup>(23)</sup>、一切有情生類<sup>(23)</sup>數多也、恭<sup>(23)</sup>積<sup>(23)</sup>尊<sup>(23)</sup>回<sup>(23)</sup>方便<sup>(23)</sup>、親<sup>(23)</sup>近<sup>(23)</sup>彼篋破<sup>(23)</sup>、御<sup>(23)</sup>弟<sup>(23)</sup>子<sup>(23)</sup>、摩<sup>(23)</sup>頂<sup>(23)</sup>授<sup>(23)</sup>殺生戒<sup>(23)</sup>給也、殺<sup>(23)</sup>食<sup>(23)</sup>、有情生類<sup>(23)</sup>一<sup>(23)</sup>支<sup>(23)</sup>即<sup>(23)</sup>休<sup>(23)</sup>、其<sup>(23)</sup>時<sup>(23)</sup>佛<sup>(23)</sup>篋<sup>(23)</sup>破<sup>(23)</sup>取<sup>(23)</sup>一<sup>(23)</sup>毛<sup>(23)</sup>名<sup>(23)</sup>竹<sup>(23)</sup>篋<sup>(23)</sup>承<sup>(23)</sup>也、故<sup>(23)</sup>竹<sup>(23)</sup>峰<sup>(23)</sup>山<sup>(23)</sup>竹<sup>(23)</sup>字<sup>(23)</sup>、篋<sup>(23)</sup>破<sup>(23)</sup>篋<sup>(23)</sup>字<sup>(23)</sup>、合<sup>(23)</sup>名<sup>(23)</sup>竹<sup>(23)</sup>篋<sup>(23)</sup>也、故<sup>(23)</sup>佛<sup>(23)</sup>心<sup>(23)</sup>宗<sup>(23)</sup>者、常<sup>(23)</sup>住<sup>(23)</sup>不<sup>(23)</sup>退<sup>(23)</sup>、作<sup>(23)</sup>隨<sup>(23)</sup>身<sup>(23)</sup>驚<sup>(23)</sup>策<sup>(23)</sup>故<sup>(23)</sup>、邪<sup>(23)</sup>魔<sup>(23)</sup>外<sup>(23)</sup>道<sup>(23)</sup>(26才) 魍<sup>(23)</sup>魎<sup>(23)</sup>鬼<sup>(23)</sup>神<sup>(23)</sup>毒<sup>(23)</sup>蛇<sup>(23)</sup>毒<sup>(23)</sup>龍<sup>(23)</sup>作<sup>(23)</sup>怖<sup>(23)</sup>畏<sup>(23)</sup>、是<sup>(23)</sup>則<sup>(23)</sup>佛<sup>(23)</sup>法<sup>(23)</sup>守<sup>(23)</sup>護<sup>(23)</sup>神<sup>(23)</sup>、你<sup>(23)</sup>善<sup>(23)</sup>可<sup>(23)</sup>護<sup>(23)</sup>持<sup>(23)</sup>、答<sup>(23)</sup>、吾<sup>(23)</sup>奉<sup>(23)</sup>護<sup>(23)</sup>持<sup>(23)</sup>者<sup>(23)</sup>也、

御州在判

附与 光紹老衲 花押

(24) 遺戒之偈

子時當正、々者中、々者心也、  
袈裟者、是表心衣也、故云以心傳也、(26ウ)

廻ル則シバク (28オ) (三) 来卜返スバ 畢竟一圓空一バ

天地同根、万物一躰、莫妄想定也、

天童・如浄・道元・瑩山、嫡々相承而今到光紹 花押

(26) 五位之別紙亦五体五輪之圖(28ウ)

洞山悟本良价禪師五位別紙 道元御在判

●地、体、東、青、春、水、死中生 久遠現今時 〇頭、偏正回互、疊作三、人地、

●水、用、西、黃、夏、木、生中死 今時現久遠 〇手

●火、性、南、赤、土、火、現生現死 久遠今時出入 〇胸

○風、相、北、白、秋、土、全中生 在今時

●空、中、黑、冬、金、全中死 現在久遠 〇腹

卦三トハ、天地人トハ、ト「二」(29オ) 界、三毒、三宝、三順等是也、宗旨之三関ト立ルモ是也、変尽作五トハ者、皆断三、已二六

成ルソ、何トテ五トハ疊田ソ、ナレバ、一ツトハ、本卦也、本卦ヲ添レバ、時餘也、出二方、五体トハ主也、出一方トハ、主ノ字也、

五臟・六腑也、五蘊・六識也、五行・六根也、五蘊六心也、五トハ眼耳鼻舌身、六トハ意也、六和合トハ、五位トハ皈一位トハ、六トハ爻三

是也、畢竟五位トハ皈無位トハ、此ノ現形像也、〇是也、△空、風ト火ト水ト地、五位トハ是也、六トハ爻トハ三トハ是トハ、無縫塔トハ、皈無位

トハ、五位トハ掃蕩スルヲ無位トハ名トハ、(29ウ)傳ハ法ハ已後一人トハ外、不可着眼、熟不疑、混沌未分、未生トハ已前、空々寂々トハ、主人公未

出、父母未生トハ已前、本来トハノ空トハ、無位トハ、此地不證契、争カ知レ無位トハ、無性也、無心トハ、無功也、無生死也、無影像也、

無佛相也、無根樹也、無上下也、無源也、無傳也、無人法也、無佛也、無天童也、無地獄也、無東西也、無体用也、無形相也、

無分別也、無五位也、無智慧也、無陰陽也、無君臣也、無父母也、無師也、無眷屬也、無方便也、無正トハ也、(30オ)無妄想

也、無空也、無人也、無我也、無疑也、無欲也、無碍也、無兀也、無凡聖也、無因果也、無富貴也、無情愛也、無男女也、無

知音也、無情也、無望也、無破也、無前也、無後也、無人境也、無始終也、無六根也、無衆生也、無安樂也、無活計也、捨無

也、去コ社ト、無位トハ疊來也、無位トハコソ本性空トハ、畢竟無位トハ皈トハ、何処無位トハ、在レ無一トハ已前トハ、此五位洞山大師、深密トハ付道膺、新

住持嫡々相承而付レ日本道元子トハ、此別紙トハ(30ウ)不トハ相承、悟本之不レ可レ為レ孫子トハ、畢竟無位如何坐禪良久。

洞山大師 雲居膺 同安道丕 同安觀志 大陽警玄

投子義青 丹靄子淳 長盧清了 天童宗班 雪豆智鑑

天童如淨 永平道元 懷英 寂圖

宗奕 門鶴 (31オ)

御州 光紹 花押

(27) 龍天授戒作法

室内<sup>ヲ</sup>莊<sup>カ</sup>、門外<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>置<sup>ニ</sup>象香洒水器<sup>ヲ</sup>、師<sup>ノ</sup>椅子南<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>可<sup>レ</sup>立、  
棹一脚、花瓶・香炉・燭臺・拂子等<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>置<sup>ニ</sup>之、右<sup>ノ</sup>棹<sup>ニ</sup>坐具・  
五条・七条・九条・鉢・洒水器・散楊之松枝<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>置、師<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>  
龍天安座<sup>ス</sup>、鳥居<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>立、兩<sup>ノ</sup>柱<sup>ニ</sup>燈籠<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>懸、兩侍者出<sup>ニ</sup>室内  
、請<sup>シテ</sup>師<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>シム門、燒香而侍者拜席<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>三拜、侍者納<sup>ニ</sup>拜席  
、師登<sup>ニ</sup>椅子<sup>ニ</sup>衣鉢 (31ウ) 棹椅子前<sup>ニ</sup>立<sup>ツ</sup>、並<sup>ニ</sup>燭臺<sup>ニ</sup>棹<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>  
立、侍者可<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>門、師洒水器而散枝、竜天<sup>ノ</sup>頂<sup>ニ</sup>洒<sup>ニ</sup>三々、東  
西南北四維上下、洒水散枝、竜天<sup>ノ</sup>頂<sup>ニ</sup>洒<sup>ニ</sup>三々三摩、師燒香、  
坐具・授戒文如<sup>レ</sup>常授了、師拍<sup>レ</sup>掌、侍者入<sup>レ</sup>室、師向<sup>テ</sup>椅子<sup>ニ</sup>  
燒香、兩侍者展<sup>ニ</sup>坐具<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>九拜、師自<sup>レ</sup>椅子<sup>ニ</sup>下<sup>レ</sup>室、侍者引  
出<sup>ク</sup>、佛祖<sup>ノ</sup>命脈證然<sup>ト</sup>即通、又云、欲<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>戒者、以<sup>レ</sup>鏡引<sup>テ</sup>  
可<sup>ニ</sup>面<sup>ヲ</sup>看<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>藏、有<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup>四足者、五戒礼如<sup>レ</sup>常、若<sup>ク</sup>又鳥類  
者、可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup> (32オ) 二足五戒、礼如<sup>レ</sup>常、次無足多足者、十戒  
可<sup>レ</sup>授、礼如<sup>レ</sup>常、是等<sup>ノ</sup>戒、雖雖<sup>レ</sup>變形、有<sup>ニ</sup>向<sup>レ</sup>鏡看<sup>、</sup>現<sup>ルコト</sup>

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (二) (飯塚)

本形<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup>蔵、可<sup>ニ</sup>心鏡用<sup>、</sup>可<sup>レ</sup>秘<sup>ク</sup>々々、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>乱<sup>ル</sup>流布<sup>、</sup>今  
傳附既畢、

永明叟 花押

(28) 白蛇切紙 飯朝本則

永平傳云、初祖道元和尚入宋傳法飯朝<sup>ノ</sup>時、於<sup>ニ</sup>西海松中<sup>、</sup>  
天雪大降、俄有<sup>ニ</sup>化身<sup>、</sup>謹現<sup>ニ</sup>師<sup>ノ</sup>前<sup>、</sup>師問云、你是什麼神  
答云、我 (32ウ) 是護法善神也、號<sup>シテ</sup>稱<sup>ニ</sup>大宋國祠山正順照  
顯威德聖利大帝招賣七郎大權修利菩薩<sup>ト</sup>、傳燈擁護靈神也、  
和尚已<sup>ニ</sup>傳<sup>ニ</sup>曹洞無上正法<sup>、</sup>今飯<sup>ニ</sup>本國<sup>、</sup>我今為<sup>レ</sup>守<sup>ニ</sup>護沙門<sup>、</sup>  
佛法<sup>ヲ</sup>相隨來也、師歎喜而言<sup>ク</sup>、善、然者、假<sup>リテ</sup>現<sup>ニ</sup>小身<sup>ヲ</sup>容<sup>ニ</sup>  
衲<sup>ヲ</sup> (32エ) 吾袈裟袋中<sup>ニ</sup>、即時<sup>ニ</sup>神滅<sup>ニ</sup>三寸計<sup>ヲ</sup>作<sup>ニ</sup>白蛇<sup>ニ</sup>而入<sup>ニ</sup>囊中<sup>、</sup>  
松中<sup>ノ</sup>衆驚<sup>ニ</sup>耳目<sup>、</sup>信感無窮、自<sup>レ</sup>余<sup>ノ</sup>以來、於<sup>ニ</sup>日本寺院<sup>ニ</sup>  
建<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>處々<sup>ニ</sup>、稱<sup>ニ</sup>崇<sup>ニ</sup>玉神<sup>ト</sup>、又有<sup>ニ</sup>初祖傳戒之二十二社<sup>、</sup>分<sup>ニ</sup>  
與<sup>ニ</sup>吾朝<sup>、</sup>天地便是 (33オ) 護法龍天善神也、大<sup>ニ</sup>感<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>兒  
孫<sup>ノ</sup>榮<sup>ニ</sup>靈驗<sup>也</sup>、

永平永明叟 花押 (33ウ)

(29) 安座点眼

威音如来、昔、本師釈迦牟尼佛、摩訶迦葉尊者、西天東土之祖師、嫡々相承而至天童師<sup>ミ</sup>、天童老師吾<sup>レ</sup>無窮<sup>ト</sup>、則密<sup>ニ</sup>授<sup>テ</sup>而曰、歸<sup>ニ</sup>日本<sup>ニ</sup>後、許<sup>ニ</sup>嗣法<sup>ニ</sup>之弟子一人<sup>ニ</sup>、莫<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>断<sup>ニ</sup>絶<sup>ト</sup>宗門之一大支<sup>マ</sup>、如来傳心之法様也、殊<sup>ニ</sup>迦文勒之三説、妙法蓮花經之五字、點眼安座之參禪、非<sup>ニ</sup>透徹<sup>ト</sup>人<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>難<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>之、忝<sup>モ</sup>如来正法直傳(34オ)旨也、吾今許<sup>ニ</sup>懷并首座<sup>ニ</sup>、勿<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>断<sup>ニ</sup>絶<sup>ト</sup>宗門之一大支<sup>マ</sup>云々、以<sup>ニ</sup>妙法蓮花經之五字<sup>ニ</sup>、法花二十八品之最初<sup>ニ</sup>置<sup>レ</sup>ハ之、佛子皆此心地之妙法<sup>ヲ</sup>觸<sup>レ</sup>口<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>覺<sup>レ</sup>了<sup>ト</sup>也、故大乘<sup>ノ</sup>宗<sup>ト</sup>謂<sup>レ</sup>之也、十方佛土<sup>ノ</sup>中、唯<sup>タ</sup>有<sup>ニ</sup>一乘<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>、無<sup>レ</sup>二<sup>モ</sup>無<sup>レ</sup>三<sup>モ</sup>、十方佛土<sup>ノ</sup>中者、衆生<sup>ノ</sup>之心地也、一乘法者、一心也、名<sup>ニ</sup>此<sup>ト</sup>之<sup>ヲ</sup>大乘<sup>ト</sup>、此<sup>ノ</sup>一心<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>邊際<sup>ト</sup>故、名<sup>ニ</sup>大菩薩<sup>ト</sup>、此<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>色相<sup>ト</sup>故、名<sup>ニ</sup>摩訶薩<sup>ト</sup>、一切諸佛菩薩之名相<sup>ハ</sup>、(34ウ)皆心性<sup>ノ</sup>異名也、獅子<sup>ノ</sup>寶座<sup>ニ</sup>蓮花座<sup>ニ</sup>莊嚴<sup>シ</sup>奉<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>安座<sup>シ</sup>、靈山<sup>ノ</sup>之後<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>溪川<sup>ニ</sup>、洞優婆羅樹<sup>ノ</sup>窟裡<sup>ニ</sup>、前<sup>ニ</sup>釈迦未<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>、後<sup>ニ</sup>弥勒未<sup>レ</sup>現、威音王<sup>未<sup>レ</sup>曉<sup>ラ</sup>間<sup>ニ</sup>、世尊先金相<sup>ヲ</sup>獅子<sup>ニ</sup>臥<sup>シ</sup>給<sup>フ</sup>、心大忽發<sup>シ</sup>而如来微笑<sup>シ</sup>、金身現<sup>シ</sup>給<sup>フ</sup>、此<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>莊<sup>ニ</sup>嚴<sup>ト</sup>獅子<sup>ノ</sup>寶座<sup>マ</sup>、其上<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>蓮花座<sup>マ</sup>、蓮花座<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>如来<sup>マ</sup>、點眼安座<sup>後</sup>、將<sup>ニ</sup>燈燭瓶供物<sup>ヲ</sup>、莊<sup>ニ</sup>嚴<sup>ニ</sup>佛前<sup>ヲ</sup>諷<sup>演<sup>スル</sup>ハ</sup>楞嚴<sup>ノ</sup>神咒<sup>、</sup>此咒<sup>ノ</sup>一切<sup>ノ</sup>咒母<sup>タルカ</sup>故<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>采用<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>(35オ)</sup>

筆<sup>ノ</sup>臺<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>硯<sup>ヲ</sup>致<sup>シ</sup>、新<sup>キ</sup>筆<sup>ヲ</sup>對<sup>シ</sup>置<sup>ニ</sup>右<sup>ノ</sup>之<sup>方<sup>ニ</sup>、</sup>新<sup>キ</sup>墨<sup>ヲ</sup>對<sup>シ</sup>置<sup>ニ</sup>左<sup>ノ</sup>之<sup>方<sup>ニ</sup>、</sup>墨<sup>ハ</sup>兼<sup>テ</sup>而<sup>レ</sup>磨<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>導師<sup>不<sup>レ</sup>經<sup>ニ</sup>左右<sup>ヲ</sup>、</sup>裏<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>佛

前<sup>ニ</sup>燒香<sup>而</sup>染<sup>メ</sup>筆<sup>ヲ</sup>左<sup>リ</sup>、眼珠<sup>ニ</sup>指<sup>當</sup>テ云々、威勢<sup>ト</sup>兼<sup>テ</sup>愛相<sup>ト</sup>、慈眼視衆生、福聚海無量<sup>ト</sup>三度<sup>宛</sup>九度<sup>毎</sup>、每<sup>レ</sup>度<sup>染</sup>筆<sup>ヲ</sup>也、其<sup>ノ</sup>筆<sup>ヲ</sup>置<sup>ク</sup>硯<sup>ノ</sup>左<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>也、亦<sup>ハ</sup>片<sup>カ</sup>筆<sup>ヲ</sup>染<sup>メ</sup>軸<sup>ヲ</sup>返<sup>テ</sup>而<sup>レ</sup>佛<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>眉間<sup>ヲ</sup>、白毫<sup>ニ</sup>指<sup>シ</sup>當<sup>テ</sup>云々、一點<sup>ノ</sup>水墨、其<sup>ノ</sup>筆<sup>ヲ</sup>返<sup>テ</sup>而<sup>レ</sup>前<sup>右</sup>、眼<sup>ヲ</sup>指<sup>フ</sup>云、兩處<sup>ニ</sup>化<sup>ス</sup>龍<sup>ト</sup>、兩處<sup>ノ</sup>龍<sup>ト</sup>者、(35ウ)是<sup>レ</sup>威勢<sup>ト</sup>兼<sup>テ</sup>愛相<sup>ト</sup>也、然而退<sup>テ</sup>佛前<sup>ヲ</sup>、登<sup>ニ</sup>椅子<sup>ニ</sup>向<sup>レ</sup>佛<sup>ニ</sup>安座<sup>而</sup>云々、威音如来、昔、莊<sup>ニ</sup>嚴<sup>ニ</sup>獅子<sup>ノ</sup>寶座<sup>マ</sup>、宝座<sup>上</sup>安<sup>ニ</sup>座<sup>マ</sup>、法花<sup>ノ</sup>全身<sup>ヲ</sup>、作<sup>レ</sup>麼生<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>安座<sup>、</sup>一分奉<sup>釈迦牟尼佛<sup>、</sup>一分奉<sup>其時ノ佛名也</sup>、次<sup>ニ</sup>住持安座<sup>、</sup>以大円覺<sup>、</sup>佛子住<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>、為<sup>レ</sup>我<sup>ノ</sup>伽藍<sup>、</sup>即是<sup>レ</sup>佛受用<sup>、</sup>心身安居<sup>、</sup>常<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>其中<sup>、</sup>平等性智<sup>、</sup>經行若座臥次<sup>、</sup>衆僧安座<sup>、</sup>我<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>誰<sup>、</sup>父母未<sup>生</sup>前<sup>ニ</sup>已<sup>レ</sup>前<sup>、</sup>如来<sup>ノ</sup>面目<sup>ヲ</sup>道<sup>レ</sup>了<sup>而</sup>(36オ)一円相<sup>中</sup>一<sup>ノ</sup>座<sup>ヲ</sup>畢<sup>テ</sup>即<sup>チ</sup>立<sup>ツ</sup>也、</sup>

- 第一 如来兩眼      第二 如来開眼
  - 第三 如来点眼      第四 如来安座
  - 第五 家安座          第六 住持安座
  - 第七 衆生安座      末々ニテハ、是<sup>レ</sup>ヲ口<sup>ニ</sup>書<sup>ク</sup>也、
- 師云、佛兩眼之定<sup>ヲ</sup>、代、佛眼<sup>ヲ</sup>、法眼<sup>ト</sup>テ走、師云、佛眼法眼トハ、何<sup>レ</sup>力<sup>ヲ</sup>現<sup>シ</sup>タソ、代、以<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>指<sup>ヲ</sup>師<sup>ノ</sup>眉間<sup>ヲ</sup>指<sup>シ</sup>(36ウ)ツメテ云、一點<sup>ノ</sup>水墨、即<sup>チ</sup>師<sup>ノ</sup>指<sup>ニ</sup>兩眼<sup>ヲ</sup>而云、兩處<sup>ニ</sup>化<sup>ス</sup>龍<sup>ト</sup>、師云、開眼シヤウ<sup>ヲ</sup>、代、兩手<sup>ヲ</sup>展<sup>開</sup>悠<sup>然</sup>ト<sup>シ</sup>、半目<sup>ニ</sup>而座<sup>ス</sup>、意<sup>ハ</sup>深<sup>ク</sup>雜<sup>念</sup>ヲ嫌<sup>ハ</sup>、半眼<sup>ニ</sup>シテ悠<sup>然</sup>ト<sup>シ</sup>テ座<sup>シ</sup>タ處、即是<sup>レ</sup>如来安座微妙<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>相也、師云、安座<sup>ヲ</sup>參<sup>フ</sup>、獅子<sup>ノ</sup>宝座<sup>ヲ</sup>莊嚴<sup>シ</sup>タガ、

何<sub>レ</sub>トテ蓮花<sub>ニ</sub>安座スルゾ、代、法花之全身<sub>ヲ</sub>安座セシメンタ  
メテ走、師云、法花<sub>ト</sub>ハ、何<sub>レ</sub>ノ佛<sub>ヲ</sub>御名<sub>ヲ</sub>申スゾ、代、心  
佛之總名<sub>ヲ</sub>走、(37オ)即<sub>チ</sub>速礼三拜而退也、此、儀規一々頂  
戴傳授畢、三年之内待<sub>テ</sub>師命哀慙聽許<sub>ヲ</sub>云々、

雨爛却了也、

故改之也、 萬照高國叟

(30) 開眼点眼切紙 并塔婆点眼 上卷之内ニ書ク

諸佛<sub>并</sub>塔婆開眼供養之作法(37ウ)

先洗米<sub>一盃</sub>、灯明<sub>二灯</sub>、華<sub>一盃</sub>、香爐<sub>一盃</sub>、新筆<sub>一對</sub>、墨<sub>一握</sub>、筆<sub>一ツ</sub>取、  
墨<sub>ヲ</sub>左廻<sub>ノ</sub>摺<sub>リ</sub>、筆左廻<sub>ヲ</sub>染<sub>テ</sub>、左<sub>ノ</sub>眼<sub>ニ</sub>推當念云、慈眼  
量<sub>ト</sub>三返唱、左<sub>ノ</sub>方<sub>ニ</sub>花寄立、火<sub>ヲ</sub>左<sub>ヘ</sub>寄、香<sub>ヲ</sub>燒、佛眼押當、  
慈眼 量<sub>ト</sub>三返唱、又右<sub>ノ</sub>筆<sub>ヲ</sub>取<sub>リ</sub>、上<sub>ト</sub>同<sub>ク</sub>スル也、其後供物何  
能<sub>ク</sub>可<sub>レ</sub>供也、サテ燒香偈曰、佛法興隆、子孫繁昌、福壽增  
長、災難不障、吉祥如意、急<sub>ク</sub>如律々、七難即滅、七福即生、  
(38オ)乾元亨利貞<sub>ト</sub>三返唱、指<sub>ニ</sub>以香取、左廻三度可<sub>レ</sub>燒  
也、

一念座禪肝要也、 点眼之後ノ也也、筆墨八不入也、口傳在之

塔婆<sub>ヲ</sub>書<sub>マ</sub>、衣之袖之内<sub>ニ</sub>筆拈、法報應<sub>ノ</sub>三身<sub>ヲ</sub>具足<sub>ノ</sub>走<sub>ト</sub>三返唱、

又筆<sub>ヲ</sub>以指當曰、如来應供正 天人世尊<sub>名入</sub>口傳在之

同參、筆染一圓相作念云、宗門奥書是也、(38ウ)

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

石木佛陀何<sub>レ</sub>如是、一念肝要也、

亦塔婆立時唱偈曰、以大圓覺 身心 智<sub>可堪立也</sub>、

永明叟 花押

(31) 山神授戒 白岳也 學下書アリ

從佛祖相承來、如淨授道元儀式 如此也、

拜問、白山授戒之儀如何、示曰、若有山神有<sub>レ</sub>望<sub>ニ</sub>受戒等<sub>ヲ</sub>者、  
先茅屋一字拜殿<sub>ニ</sub>、棒<sub>ニ</sub>幣帛<sub>ヲ</sub>莊<sub>カガリ</sub>、香花灯米(39オ)備<sub>ニ</sub>供物<sub>一</sub>、  
神前<sub>ニ</sub>安座而、其山神化形三相<sub>ヲ</sub>現來待<sub>マ</sub>、可<sub>レ</sub>授<sub>ニ</sub>戒血脈<sub>一</sub>、儀  
式如勝也、

某甲 受者各勃陀勃地

釈迦牟尼佛勃陀勃地 摩訶迦葉勃陀勃地嫡々

佛祖命脈證契某甲申通 即通

圓相縱橫圓轉兒、無始無終自在縱橫故也、即是蓮華法蓋嗣書、  
如斯書也、(39ウ)

御料花紋織地如常 長六尺一寸也、

図(7) 山神受戒

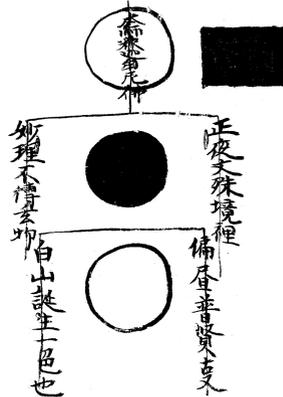


花瓶 香炉  
 権現 新席  
 燭臺 洗  
 向上堂前可行也  
 供物

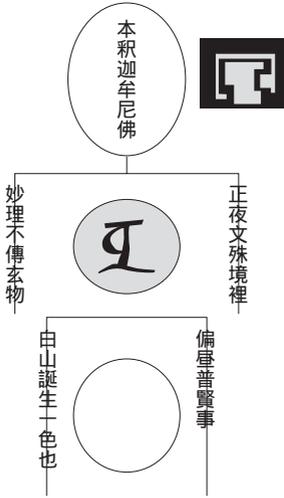
永明叟 花押

(40才)

図(8) 白山妙理大権現



(32) 白山妙理大権現切紙



( 図(8) 参照 )

白山誕生一色、妙理不傳玄物也、不傳玄物、不露也、亦主、叟、大権現空劫已前ヨリ今時ニ却來也、唯佛與佛八、至覺本覺之叟也、乃能窮尽八、畢竟始末不二之処也、猶口傳在從天童如淨道元和尚法傳、嫡々相承而今到光紹 花押(40ウ)

(33) 山門切紙 下巻ノ内ニ有之ト小異アリ

山門三門共可、心得者、空ト云、此 圖也、無相門ト云、此 圖也、無作門ト云、〇是也、呈也、空門、山門ト云八、無極之処也、呈、陰陽ト分レ又已前也、過去体也、無相門ト云八、大極也、無作門ト云八、未來也、陰陽ト引發処也、故二此〇〇圖也、天地、空、天地ト空、此三形ヲ取テ山

門トモ、山門トモ云也、此利<sup>ラ</sup>以<sup>マ</sup>、寺院ニ山号ヲ名付ル也、畢竟此根本本原也、

礼<sup>レ</sup>。此圖相中ニ字<sup>ヲ</sup>書<sup>テ</sup>本モアリ、(41オ)

釈迦牟尼如来

南無皈依佛 南無皈依法 南無皈依僧  
天上天下是也 附与 光紹老衲

歳号月日 印 花押 (41ウ)

(34) 山門法衣之大夏

法衣傳授之時參話

夫以<sup>レ</sup>佛々祖々相承之法衣者、誓<sup>ハ</sup>大師釈尊、迦葉<sup>ニ</sup>法衣<sup>ヲ</sup>御渡給<sup>ズ</sup>、此法衣<sup>ト</sup>謂<sup>ハ</sup>、八万四千条御袈裟也、御袈裟授<sup>ニ</sup>迦葉<sup>一</sup>給時、涙流給、名<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>發露涕泣衣、彼御袈裟者、在<sup>ニ</sup>母胎内<sup>一</sup>時、此袈裟<sup>ニ</sup>八万四千之毛<sup>ヲ</sup>、骨肉共<sup>ニ</sup>一<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>漏、此袈裟之内<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>裹<sup>テ</sup>、不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>犯<sup>ニ</sup>一<sup>塵</sup>一<sup>法</sup>、是名<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>衣衲、亦此御袈裟曰<sup>ク</sup>佛祖不傳衣、又曰<sup>ク</sup>(42オ)九条、是即父母未生已前、本来無縫之真衣也、生来已前之紫極宮中是也、烏抱<sup>レ</sup>卵是在<sup>ニ</sup>此中<sup>一</sup>、纒借<sup>ニ</sup>地水火風<sup>一</sup>、又木火土金水具足者也、烏者紫極宮主也、吾宗之密語密處也、人々須<sup>ニ</sup>參得<sup>一</sup>頂<sup>ニ</sup>戴<sup>一</sup>法

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (二) (飯塚)

衣<sup>ヲ</sup>者也、師問學人云、倒騎<sup>ニ</sup>佛殿<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>山門<sup>一</sup>時如何、代云、自可<sup>ニ</sup>參得<sup>一</sup>、又問云、倒<sup>レ</sup>意如何、學人云、欲<sup>ニ</sup>出来<sup>一</sup>時、此内<sup>ヲ</sup>転却<sup>ス</sup>時節也、師云、山門<sup>ト</sup>ハ、出生處門也、(42ウ)是名<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>玉闌、又問、出後如何、學人云、法堂上草深<sup>一</sup>一丈、又問、意旨如何、學人云、哆々嘲々、師云、法堂上者、産出土也、又草深<sup>一</sup>一丈、産時、展両手、何物<sup>ヲ</sup>取付啼々、是<sup>レ</sup>云也、此声響<sup>ニ</sup>天地<sup>一</sup>也、是清淨本然無相<sup>ノ</sup>說法也、又亦無相杖拂也、故<sup>ニ</sup>生土<sup>ヲ</sup>名<sup>ニ</sup>法堂<sup>一</sup>、今号<sup>ニ</sup>法衣<sup>一</sup>、是<sup>レ</sup>表也、然間、法衣染<sup>ニ</sup>紫色<sup>一</sup>、是<sup>レ</sup>色紫上也、

正嫡一人相承畢、(43オ)

天童如浄老禅師傳附道元和尚畢

永明叟 花押

(35) 米門之切紙

主位者、松也、是壽命也、主位者、梅也、梅<sup>ハ</sup>愛敬也、佛殿四庭栽木之支<sup>ニ</sup>米門<sup>一</sup>

客位者、椿也、椿<sup>ハ</sup>福德也、客位者、牡丹也、丹<sup>ハ</sup>威勢也、(44ウ)

同參禪在リ、師云、西之花ヲ、代、明然タル威儀<sup>ヲ</sup>走、師云、東<sup>ノ</sup>花ヲ、代、草花<sup>ヲ</sup>走、師云、北之花ヲ、代、空花<sup>ヲ</sup>走、師云、南之花ヲ、代、總之始終<sup>ヲ</sup>走、師云、名<sup>ニ</sup>二字ヲ、代、形<sup>ニ</sup>祝星<sup>ヲ</sup>走、師云、下之字ヲ、代、凡心塵下<sup>ヲ</sup>走、師云、

二字之畢竟ヲ、代、不落不昧、師云、客殿ヲ、代、首テ走、師云、佛殿ヲ、代、胸テ走、師云、山門ヲ、代、閉テ走、師云、庫裡ヲ、代、右手テ走、師云、僧堂ヲ、代、左手テ走、(45才) 師云、風呂淨頭ヲ、代、両脚テ走、

佛戒寶

青紙・黄紙・赤紙・白紙・黒紙・五色之紙書之也、白赤之二枚者、廣同、青黄黒三枚ハ同廣也、代々如是流布來也、

永明叟 花押(45ウ)

(36) 消災咒之記文并一返消災咒之切紙

消災咒記文

藏經消災咒之記文、排當、天之星辰三可行拜者、一切、鬼神闍、呪之字、悉皆合掌ニ受ル也、

曇護三滿多

過去現在未來之諸仏也、

母駄喃

清淨法身毘盧舍那仏之名号也、

阿鉢羅底

盧舍那仏也、

賀多舍

不動明王也、

娑曇喃

釈迦文佛也、(46才)

怛姪佗唵

一切、鬼神闍、呪之字、悉皆合掌ニ受ル也、

法々法四々々

文殊師利菩薩也、

吽々

二十八宿・七曜・九曜也、

入嚩囉々々々

大通智勝仏、同眷屬等也、

嚩囉入嚩囉々々々々々々

彌勒仏同眷屬也、

底瑟吒々々々

八万四千金剛神之名号也

瑟至哩々々々々 金剛菩薩同眷屬也、(46ウ)

娑發吒々々々々 四天王同眷屬也、

扇底迦

妙吉祥菩薩名号也、

室哩曳

熾盛光王仏之名号也、

娑婆寶

一返消災咒之時、那行那歩之大支口傳也、

伏レ以レハ有ニテ三世諸仏之加護、四時八難悉ク消滅、常ニ誦ニ此咒ヲ、諸天擁護、功德無量、吉祥如意、是レ故ニ日々三度向ニ(47才) 東西南北各々誦ルレ可ニ返ニ、念々不捨、可レ誦レ可レ誦、

淨和尚附元和尚而嫡々相承今猶如此、

私ニ云ハ、那行那歩、此歩行ト云ハ、消災咒之歩行ハ、七字圓成

卍字ト巡ル也、七難即滅、七福即生、一圓卍字也、

一返消災咒切紙

先當胸合掌シテ身心一如ノ相ヲナシ、向ニ仏前ニ南無消災熾盛光

王如來ト念フ、光明灌頂ノ相ヲ存シ、怛姪佗(47ウ)唵ノ処ニテ、

維那ノ小聲一声ヲ聞ク、左足ヨリ進ンテ卓前ニ至リ、吽々ノ処ニテ、

右足ニテ踏ミ止マレバ、左右合フ十二歩ナリ、卓前ニテ香ヲ拈シ、

炉ニ向ツテ一圓相ヲ打シ焼香シ、嚩囉入嚩囉ノ処ニテ轉身ノ外ニ向キ、

底瑟吒々々々ノ処ニテ、左足ヨリ進ンテ本位ニ皈リ、娑發吒

々々々ノ処ニテ、右足ニテ踏ミ止マリ、扇底迦ノ処ニテ、轉身ノ

仏前ニ向キ、合掌ノ手ヲ以テ、一圓相ヲナシテヨク收ル也、如レ前

進テ本位ニ皈レ、往來ノ間自然ニ(48才)一圓相ニナルレ、焼香

ノ時ノ圖相ト収メ派ノ圖相ト共ニ三圖相ヲ得テ、心ノ三点ヲ表ス、  
進モ十二歩、皈モ十二歩、流轉還滅ノ二種ノ十二因縁ノ数ニ當ル  
也、全體現前シ、尽十方遍法界、一時ニ光明三昧ノ中ニ圖撰シ、  
消<sup>災</sup>吉祥ノ功德ヲ蒙ラシムル者、是ニ返一心ノ然ラシムル也、慳  
重ノ想ヲナスベシ、輕忽ノ念ヲ存スルナカレ、嫡々相承而永平  
室中今尚如此、(48ウ)

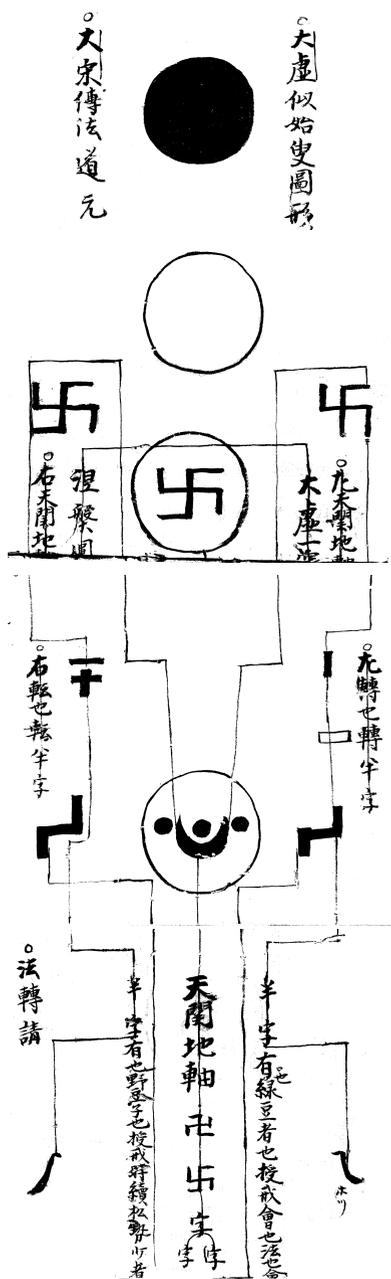
承天手書置之花押

(37) 卍字之切紙

■上大同少異而一本也

勃陀勃地者、言佛悟司位之謂也、又不翻譯詞歟、又至九位也、言接無位真人出、傳法之時、膝行・合血、亦曰、授戒道場之中、鼻音<sup>ハナ</sup>匿<sup>カク</sup>、籠也、カクス、ヒキシ、讀在也、亦曰撰戒也、曰<sup>ニ</sup>夏<sup>カ</sup>在也、

図(9) 卍字之切紙

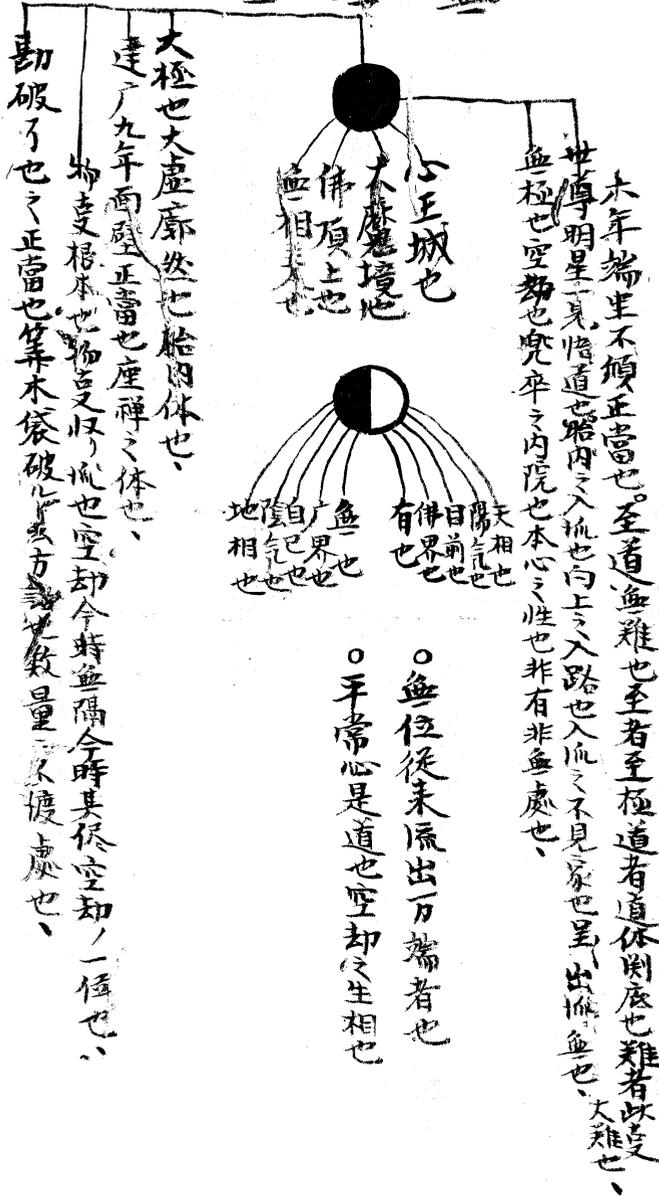


。大虛傳法道元

佛偈說故曰、見宝塔品曰、從地涌出、住在虛空中、曰、言警出從虛空、凡聖一味相授也、一戒、中授二十戒、亦十戒授九戒、

佛嫡々祖々相傳嗣法、是證契故、無上菩提心、最初發心時、彼一念功德、深廣無涯際、如來分別、而<sup>モ</sup>末世<sup>ノ</sup>為<sup>シ</sup>兒孫、圖形<sup>ノ</sup>夏<sup>カ</sup>如是、怪服者、紫伽梨也、(50ウ)

○有魚  
 ○本魚  
 ○不魚

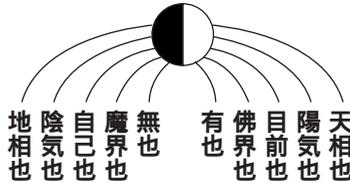


(39) 無之切紙

「六年端坐不傾正當也至道無難也至者至極道者道体涸底也難者此叟大難也  
世尊明星一見悟道也胎内之入派也向上之入路也入派之不見家也呈<sub>三</sub>出派<sub>三</sub>無也  
無極也空劫也兜卒之内院也本心之性也非有非無處也

有無  
本無  
不無

心王城也  
大魔境也  
佛頂上也  
無相主人也



無位從來  
平常心是道也空劫之生相也

大極也大虛廓然也胎内体也

達磨九年面壁正當也座禪之体也

物叟根本也物叟収<sub>レ</sub>派也空劫今時無隔今時其俟空劫一位也

勘破了也之正當也等木袋破儿卜云方語也數量不渡處也

永明叟  
花押

(39) 四句文之切紙

永平和尚夜半流傳

四句文切紙

諸行無常 是生滅法

今時之相ハ、幻代也、覆ラ尽シテ大極ニ到ル也

心 釋迦牟尼佛大和尚

生滅々已 寂滅爲樂

是ハ無極也、大極ヲ尽ノ此ノ地ニ到ル也

(51ウ)

上足一人傳附畢

于時仁治<sub>三</sub>年月日

天童如淨老師傳附元和尚

永平傳法念九世光紹叟 花押

(40) 身心落脫

二代和尚 重壽也

二代曰、永平門下有二三脫落之話、蓋是開山和尚在天童時悟處也、(52オ)

● 如何是身心脫落處

○ 如何是脫落身心處

如何是脫落々々處

此三句者、只是一句也、一句モ亦無可參、尚不獲已、某甲註

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

破了也、所謂脫偏曰「凡身、落、正、黑、聖之處、半白半黑也、謂之転凡入聖之一句」、不<sub>レ</sub>可<sub>下</sub>無<sub>二</sub>如<sub>レ</sub>是分大休大歇去也、次脱<sub>ハ</sub>聖、身、外邊白、落<sub>ハ</sub>本、中間ノ黑處、外邊白、

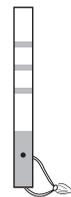
中黑也、(52ウ) 謂之転功就位一句、可<sub>レ</sub>恣麼會取、深透深徹去也、上下内外全分黑底處、脱落烏鴉豈漆樋乎、

離<sub>二</sub>四句<sub>一</sub>絶<sub>二</sub>百非<sub>一</sub>、直下無第二人、●○ 不同五位君臣之圈兒、聽<sub>ハ</sub>奇分和合 私<sub>ハ</sub>黑處也、不可備本洞家玄奧宗旨體也、恐屬流布、滅<sub>二</sub>却吾宗<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>秘々々、

永明叟 花押

(41) 竹篋拄廬杖參話<sub>并</sub>注脚(53オ)

竹篋<sub>(註)</sub> 和尚云、突出難弁、掘地深埋、



如何是竹篋、三尺黑蛇眠暗室、又云、隨機動搖、從來未露、右這箇黑蛇長「三尺也、通<sub>二</sub>三世<sub>一</sub>、三世<sub>二</sub>佛宛有<sub>一</sub>法報應、三身一是也、如來之通処也、其三世諸佛爲「惡業煩惱者、爲<sub>二</sub>百億分身也、具<sub>二</sub>物々<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>性、或<sub>ハ</sub>佛性心地之如來座<sub>二</sub>三<sub>一</sub>方寸丹田<sub>二</sub>也、飛花落葉無常生死之道理也、自說他說之支<sub>一</sub>、回隨<sub>二</sub>草裡漢<sub>一</sub>接物利生、謂<sub>二</sub>之竹篋之心行<sub>一</sub>也、箇<sub>二</sub>竹篋者、心有<sub>レ</sub>則<sub>二</sub>毒蛇也、(53ウ) 心無則<sub>二</sub>自己也、元來草裡<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>主<sub>一</sub>、故落草漢<sub>二</sub>云也、竹篋之本意者、三尺之中<sub>二</sub>有三節也、此<sub>二</sub>三節<sub>一</sub>三世也、法報應化<sub>レ</sub>如來座給<sub>レ</sub>也、竹篋<sub>ハ</sub>者、作家手段<sub>一</sub>、一着子也、拈來与<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>時、全<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>打<sub>レ</sub>、(未<sub>レ</sub>)、物々頭々、三

世諸仏打<sup>レ</sup>給<sup>フ</sup>也、故<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>慈悲竹篋<sup>ト</sup>也、已<sup>ニ</sup>喚<sup>ハ</sup>竹篋<sup>ト</sup>觸<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>喚<sup>ハ</sup>亦背<sup>ク</sup>、喚<sup>テ</sup>作<sup>シ</sup>甚麼<sup>ト</sup>、過去現在未來三世不可得、喚<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>竹篋<sup>ト</sup>、即今請喚<sup>シ</sup>作<sup>シ</sup>什麼<sup>ト</sup>、良久云、古殿沈々<sup>ト</sup>全体不露、(54オ)

拄杖 堂山和尚 點<sup>(點讀カ)</sup>烏藤看、花向不萌枝上開、

図(14) 竹篋拄杖參話註脚



如何是拄杖子、拈拄杖卓一下云、是這箇拄杖子、便汝拄杖子作麼生呈<sup>マ</sup>、放下拄杖、便良久云、即今是汝拄杖子也、否、靈木超然<sup>ト</sup>風無<sup>ニ</sup>依倚<sup>一</sup>、又云、乾坤道合<sup>テ</sup>通<sup>ニ</sup>無碍<sup>一</sup>、右這箇拄杖子者、上<sup>ニ</sup>徹<sup>ニ</sup>有頂天<sup>一</sup>、下<sup>ニ</sup>透<sup>ニ</sup>金輪際<sup>一</sup>也、然則<sup>バ</sup>(54ウ)如<sup>シ</sup>乾坤体中具<sup>ニ</sup>足<sup>スルカ</sup>三界之形山<sup>ラ</sup>也、又云、山形者、人々山形也、知<sup>レ</sup>得<sup>シ</sup>箇<sup>ノ</sup>山形<sup>ラ</sup>了<sup>レ</sup>、是<sup>レ</sup>契<sup>ラ</sup>本分相應之理也、又鉄火<sup>ハ</sup>、上<sup>ニ</sup>有頂天之間<sup>一</sup>忘相、當<sup>レ</sup>彼<sup>ノ</sup>焰<sup>ニ</sup>顛倒<sup>スル</sup>也、又云、鉄子<sup>ハ</sup>、下<sup>ニ</sup>金輪水際之全体也、又孫枝<sup>ハ</sup>、宗旨之孫子、無相<sup>ニ</sup>而大地黑漫々<sup>ナルカ</sup>故也、拄杖<sup>ノ</sup>形体怎麼<sup>ナルカ</sup>故云、拄杖子化成<sup>テ</sup>竜<sup>ト</sup>吞<sup>シ</sup>却乾坤<sup>ラ</sup>了、云々、又云、拄杖子口傳、杖魂也、故<sup>ニ</sup>打<sup>ニ</sup>破<sup>ニ</sup>是非之苦業<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>受也、又杖<sup>ハ</sup>魄也、故<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>娑婆世界之主<sup>ト</sup>、万劫千聖之間、一言無相<sup>ニ</sup>而受<sup>ス</sup>三人(55オ)天供養也、然而世界黑漫々故<sup>ニ</sup>、從<sup>ニ</sup>拄杖子<sup>ノ</sup>中<sup>一</sup>來、

抑從<sup>ニ</sup>拄杖子<sup>ノ</sup>中<sup>一</sup>來<sup>ル</sup>者、這箇主中<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>道理也、主文受用底如何、左手<sup>ニ</sup>得來<sup>テ</sup>右手<sup>ニ</sup>用<sup>マ</sup>、左手<sup>ノ</sup>指<sup>ニ</sup>久遠<sup>ト</sup>也、右手<sup>ハ</sup>今時却來也、久遠今時不<sup>レ</sup>相離、一箇<sup>ノ</sup>拄杖往來也、

延文九年八月時正日在妙莊嚴院傳之詔蹟在判于時元和九年霜月吉日先師書寫之本蟲滅<sup>スルカ</sup>故<sup>ニ</sup>今享保九年甲辰冬十一月二十一日現住永平

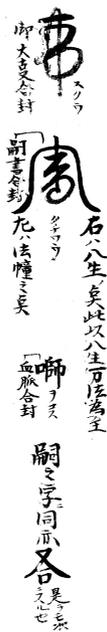
勅賜大清撫國禪師承天叟則地手書置 花押(55ウ)

(42) 拂子

如何是一拂子、豎起拂子云、是須<sup>ク</sup>妙手携來用、受用底作麼生、任<sup>シ</sup>手拈來着々親<sup>ク</sup>、右箇<sup>ノ</sup>拂子者、拈華之話也、拂子<sup>ハ</sup>是五尺<sup>ノ</sup>境界<sup>ヲ</sup>表<sup>ス</sup>、地水火風之四大也、此形体<sup>ニ</sup>含<sup>ニ</sup>虛空<sup>一</sup>為主<sup>ト</sup>、走<sup>ニ</sup>東西南北<sup>一</sup>、似<sup>ニ</sup>万物拂<sup>ラ</sup>、雖<sup>レ</sup>然<sup>ト</sup>未<sup>レ</sup>在<sup>ル</sup>者、仏祖<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>仏祖者、心中從<sup>レ</sup>外出來、從<sup>レ</sup>內出來<sup>ス</sup>可<sup>キ</sup>非<sup>ク</sup>、然<sup>レ</sup>則<sup>ハ</sup>号<sup>ニ</sup>仏祖<sup>ト</sup>來<sup>ル</sup>、是這箇也、喩<sup>レ</sup>我<sup>ニ</sup>、縱<sup>ハ</sup>雖<sup>レ</sup>有<sup>ト</sup>外道<sup>一</sup>、仏祖<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>人故<sup>ニ</sup>、仏魔俱<sup>ニ</sup>拂<sup>ス</sup>(56オ)時<sup>ニ</sup>、一毛頭上<sup>ニ</sup>納<sup>ニ</sup>乾坤<sup>ヲ</sup>、此時又<sup>ハ</sup>一毛<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>續<sup>ニ</sup>滋味<sup>一</sup>也、拂子柄上<sup>ノ</sup>者、五輪五輪也、三身圓滿<sup>ニ</sup>而、如法如說<sup>ナル</sup>故<sup>ニ</sup>、妄想塵勞<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>納<sup>ル</sup>、雖<sup>レ</sup>沈<sup>シ</sup>淪生死<sup>ニ</sup>、此<sup>ノ</sup>五体生死<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>、風火水地飯<sup>スル</sup>箇<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>耳、在<sup>レ</sup>主<sup>ト</sup>者、圓滿無際而成<sup>ニ</sup>一息<sup>一</sup>、是則本分自性也、是我本一息之氣、世尊拈華之也、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>常花<sup>ト</sup>、本分自性也、花綻時、迦葉<sup>ノ</sup>心花亦綻也、世尊瞬目處、八万大衆終<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>會、此<sup>レ</sup>教<sup>ニ</sup>云、為



図(17) 合封折角之切紙



此ニ勃陀勃地之參在之

高国叟

合封之大事

人此<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>口<sup>ヲ</sup>以飯<sup>ヲ</sup>喫<sup>テ</sup>命<sup>ヲ</sup>讀、此<sup>一</sup>口<sup>ヲ</sup>以生命食<sup>トシ</sup>續<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>支<sup>因</sup>縁<sup>ヲ</sup>、此<sup>ニ</sup>テ一<sup>口</sup>ヲ<sup>ト</sup>転<sup>ニ</sup>無<sup>上</sup>大法<sup>輪</sup>、從<sup>ニ</sup>本<sup>師</sup>釈迦牟尼佛<sup>一</sup>、(59才)今日新到某甲迄連授、代、黄河從源頭濁了也、師云、元和尚兩処ヨリツリ羊<sup>ヲ</sup>、代、左右逢源、師云、畢竟<sup>ヲ</sup>、代、總<sup>ニ</sup>在此<sup>中</sup>圖<sup>ナリ</sup>、

合封之節角切紙

年号

吉舎啣

御大支 嗣書 血脈 合封

未山<sup>ニ</sup>テハ如此<sup>モ</sup>スル也 心ハ同

花押 (59ウ)

(46) 先師取骨之大事

先師之骨取、嗣法人渡、骨紙包上書付云、全体和尚之示寂如是<sup>云々</sup>、裡<sup>ニ</sup>年号日付書、紙<sup>一</sup>上<sup>ニ</sup>重<sup>テ</sup>包<sup>共</sup>三<sup>枚</sup>也、  
取骨及骨袋、運集作法 末三編在之

吾附法弟子、

光紹和尚禪師、

佛祖通徹處、(60才)

悉以印證畢、

于時年月日

時刻 以上七行<sup>ニ</sup>書者也、

永平傳法二十八世御州

寛文三<sup>庚</sup> 辰 歲九月吉日

附与光紹老納 花押

(47) 廟移作法 (60ウ)

図(18) 廟移作法



(61才)

廟移<sup>ス</sup>時、先<sup>ツ</sup>先祖<sup>ノ</sup>廟<sup>處</sup>無<sup>ケ</sup>レバ、金神<sup>ノ</sup>方、或ハ死人<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>出<sup>方</sup>ヲ見<sup>テ</sup>、吉方<sup>ニ</sup>地<sup>ヲ</sup>取<sup>テ</sup>可<sup>レ</sup>移、其後<sup>テ</sup>前<sup>ノ</sup>基<sup>ヲ</sup>平<sup>ガ</sup>

テ、如レ本可レ植<sup>マ</sup>草木<sup>マ</sup>、亦旧墓ノ下ニ八下炬力、亦經陀羅尼ヲ書テ可レ埋、亦此圖ヲ本ノ墓ニモ可レ置也、廟移ス時、先祖ノ廟在<sup>ハ</sup>、如レ此、吉也、亦先祖ノ位ヲ不<sup>レ</sup>違、次第々々上ニ登テ、其下ニ今廟ヲ立也、是周ノ世ノ時、禧公文紹ノ子、穆ノ位ヲ違<sup>ハ</sup>テ、禧公ノ廟ノ上ニ立也、処テ、周世乱也ト云々、亦廟ヨリ出ス時、吉日好方、五輪亦石塔ヲ出、落処八、(61ウ)何<sup>ノ</sup>方ナリ共、不<sup>レ</sup>苦也、肝要ハ先出方ヲ可レ見、新廟ヲ立テ墓ニ駭<sup>レ</sup>之、亦云、大支在<sup>之</sup>、墓ノ石ヲ取来、廟ヲ付テ、其上ニ置<sup>マ</sup>安座ノ模様<sup>在</sup>、亦子細<sup>スル</sup>則<sup>ル</sup>、河ノ石ヲ七ツ取来、字ヲ書<sup>ハ</sup>、亦米<sup>ト</sup>錢<sup>ト</sup>袋<sup>ニ</sup>入<sup>テ</sup>、墓<sup>ニ</sup>収<sup>ル</sup>、畢竟、身心安居、平等性智、肝要也、畢竟、安座点眼ノ模様肝要也、畢竟眼ノ用所也、

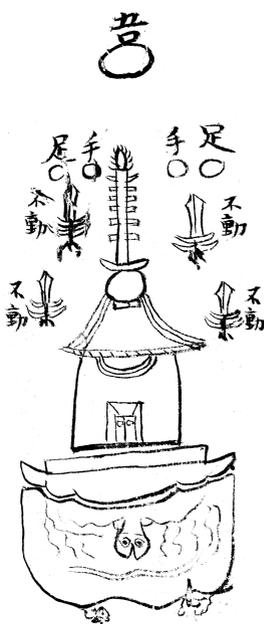
花押

(48) 龜背宝塔密紙圖(62オ)

一切衆生、身心即塔、無所不住之人也、

地水火風空、亦復六根六境六識尽、又以来五岳之体也、

図(19) 龜背砲塔密旨圖



仏言、性海双圓、談<sup>ニ</sup>四曼自性、重如月殿說、三密藏自樂、(62ウ)三十七圓滿云人ヲ識得<sup>ス</sup>、本氣無相為<sup>レ</sup>主、

口傳曰、極秘相應經也、

洞山云、曹山<sup>モ</sup>此塔重如月殿<sup>ト</sup>、密經經書、此塔形也、兩段全運之月殿也

六祖云、龜<sup>ハ</sup>是器也、器者、無縫塔也、此塔<sup>ハ</sup>氣之以<sup>レ</sup>形<sup>ヲ</sup>也、

五岳<sup>ハ</sup>五大之氣形也、劔<sup>ハ</sup>四大、劔也、第一第二第壹不至哉、

或人不問、又三頭之三分<sup>ヲ</sup>不得、外<sup>ト</sup>一氣也、氣<sup>ハ</sup>五氣也、其

内動性之氣<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>主、動性之氣<sup>ト</sup>ハ、風性ノ氣也、風性ノ氣<sup>ト</sup>ハ、

(63オ)只風清淨タルヲ云、此時風性本氣<sup>モ</sup>無<sup>シ</sup>、此是大支之

第一義之主人也、亦復非風非氣非四大、此外大無相之一義ト

不云、了却看々、

仏祖不至、又吾不至、又機不至、又弟子不可至、若至<sup>云</sup>八從<sup>ニ</sup>

三猶下落也、

深密々々、即事即真、不一不二、皆是了々不了々、只是一心而已、此外云八、外道之心也、(63ウ)

(49) 洞山門下牌塔相續之事

昔臨濟和尚證明、洛浦安禪師云、臨濟門下、一隻箭、當誰レカテ鋒、雖然モ與麼、不レ續ニ其後跡、果而洞上ノ嫡孫繼ニ夾山善會和尚ニ而、枝々葉々無不レ「芬芳」、不レ熟ニ前因故乎、既ニ改ニ其源「皈ル」、今當派下ニ為レ極、以レ粵「知ル」、機縁只在ニ極下ニ乎、悟本之正脈、存シテ、太陽ノ本宗絶テ亦興、以此故ニ、即截ニ断嗣書地、繼ニ旗「於」(64オ) 万代ニ令ニ繁茂ニ云々、

年号月日

氏名書判

資名書而 付与之、(64ウ)

(50) 非人亡者之支

■形別紙ヲ写取置

自家初テ世、其雜難具等、衣裳・刀共送り捨マ、其身ヲ乞食ニ渡ス、弓絃ヲ以テ、男ハ左、女ハ右ノ腕ニ纏リ、非人ニ渡シ、引動タル時キ、子ヲ不レ持者、後手ニ截ル也、其後截タル刃ニ身之代リヲ相添テ送ル時、文曰、因果業生、靈々除滅、尽未來際、直截根源、此文ヲ書キ、死人ニ可レ添、亦其「出」門ノ塔下ニ可レ埋、其後人間ニ成テ引導可レ有レ之、(65オ)

(51) 天疵病之事

自レ我家風上ニ不レ置、居ル座敷ニ不レ居、盃ヲ不レ飲、平生如是、亦死去引導最大切也、又天蓋・幡何レモ黒色ニ可レ致、此符ヲ書、引導シ、七日居タル座敷ニ可レ敷、其親兄弟共ハ、此符ヲ百箇日間ハ不レ可レ捨、供養モ平人ニ替レテ、無ニ回向ニ可レ問也、下炬云、汝元来不生不滅、無レ男無レ母無ニ兄弟、此土自レ去不レ来、輪廻顛倒直断絶、(65ウ)

永平現住永明叟

図(20) 天疵病之事

